

なが ぬま ちょう
長沼町

みなみ ろく ごう がわ さ がん

南六号川左岸遺跡

— 道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財調査報告書 —

平成24年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 遺跡近景 (南東から)



2 調査状況 (南東から)



1 H-1遺物出土状況（南西から）



2 縄文時代晩期前葉土器

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部が行う道央圏連絡道路泉郷道路工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成23（2011）年度に発掘調査を実施した長沼町南六号川左岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査・整理は、平成23・24年度の2か年にわたり第1調査部第2調査課が担当した。
3. 整理作業は、遺構を鈴木宏行・末光正卓、遺物を鈴木が担当した。
4. 現場の写真撮影は鈴木・末光が行い、遺物の撮影は菊池慈人が行った。
5. 本書の執筆は、鈴木・末光が行い、文責は各項目の末尾に括弧で示した。編集は鈴木が担当した。
6. 作業の一部および各種測定・分析は、下記の機関に委託した。
石器実測の一部：(株) トラスト技研
放射性炭素年代測定：(株) 加速器分析研究所
黒曜石原産地分析：(株) パレオ・ラボ
7. 報告書刊行後、遺物および台帳は長沼町教育委員会が、図面・写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
8. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏の御指導、御協力をいただいた。（順不同、敬称略）
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
長沼町教育委員会：相澤昌之、崇田章男、齋藤義弘、山下光雄、高田和孝
恵庭市教育委員会：上屋眞一、長町章弘、鈴木将太
厚真町教育委員会：乾 哲也、奈良智法、荻野幸男、中沢祐一、天方博章
北方文化研究センター：野村 崇
札幌市：大沼忠春

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。
H:住居跡 P:土坑 F:焼土 PC:土器集中 FC:剥片集中 S:集石 HP:住居内の土坑・柱穴 HF:住居内の焼土 HCC:住居内の炭化物集中 HFC:住居内の剥片集中
2. 遺構図の縮尺は、土器集中については1/20とし、それ以外は1/40とした。いずれの場合もスケールを示した。
3. 遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称番号は右下のグリッドを示している。レベルは標高(単位:m)である。
4. 遺構の規模は以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものは現存長を()で示した。(単位:m)
住居跡・土坑…確認面での長軸長×確認面での短軸長/床(底)面での長軸長×床(底)面での短軸長/確認面からの最大深
焼土…確認面での長軸長×短軸長/最大厚
土器集中・剥片集中・集石…確認範囲の長軸長×短軸長
5. 遺構に関連する遺物分布図には床面・底面出土遺物のみを掲載した。
6. 土層の表記については、基本土層はローマ数字、遺構の層位はアラビア数字で示した。
7. 土層の色調は『新版 標準土色帖 2002年版』(小山・竹原2002)に従った。
8. 遺物の実測図の縮尺は以下のとおりである。
復元土器・土器拓影 1/3 土製品 1/2 剥片石器・礫石器・石製品 1/2
砥石(図Ⅲ-13-12のみ) 1/3 金属製品 1/1
9. 土器図には正面図では表現できない箇所を図を追加して補助的に掲載しているものがある。この補助図は「Φ」印によってその実測位置を示している。「Φ」印は土器の上面観を模式化したもので、十字の垂直線は下端が正面側、上端が裏面側を、十字の水平線は左端が左面側、右端が右面側を示す。「Φ」に太線がある場所が補助図の位置で、太線が円の内側にある場合(「Φ」)は内面、外側にある場合(「Φ」)は外面を示している。
10. 土器の断面図位置が右端以外の場合、その位置を「▼」で示した。
11. 土器に粘土の積み上げ痕である接合面が確認できる場合、断面図に接合面を記入した。正面図の上に「↑」や「↓」の印を付けてその位置を示し、「↑」は正面側、「↓」は裏面側である。数字は断面図と対応し、下部から順に付けた。但し、記入された接合面のみが製作工程上の「継ぎ目」を示すものではない。
12. 土器表面に赤色顔料の付着した範囲は赤のトーンで示した。
13. 礫石器に関して敲打痕はV——V、すり痕は←——→で範囲を示した。

目 次

口絵 (カラー図版)

例言・記号等の説明

目次・挿図目次・表目次・図版目次

I 諸言	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経過	1
4 調査概要	4
(1) 調査区の設定	
(2) 土層	
(3) 調査の方法	
(4) 整理の方法	
(5) 遺物の分類	
(6) 調査結果の概要	
II 遺跡の位置と周辺的环境	
1 遺跡の位置と環境	13
2 周辺の遺跡	13
III 遺構と遺構出土の遺物	
1 概要	19
2 竪穴住居跡	20
3 土坑	27
4 焼土	31
5 土器集中	33
6 剥片集中	38
7 集石	40
8 フローテーション法によって回収された微細遺物	41
IV 包含層出土の遺物	
1 概要	45
2 土器・土製品	50
3 石器・石製品	65
4 金属製品	73
V 自然科学的分析等	
1 放射性炭素年代測定 (株加速器分析研究所)	83

2	南六号川左岸遺跡出土黒曜石裂石器の産地推定 (竹原弘展 : (株) バレオ・ラボ)	87
---	---	----

VI まとめ

1	遺構について	91
2	遺物について	91
	(1) 土器	
	(2) 石器	

引用文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

I 諸言	図Ⅲ-13	土器集中出土遺物 (1)	35	
図Ⅰ-1 南六号川左岸遺跡の位置	2	図Ⅲ-14	土器集中出土遺物 (2)	36
図Ⅰ-2 調査範囲・調査区設定図	3	図Ⅲ-15	土器集中出土遺物 (3)	37
図Ⅰ-3 基本土層図	5	図Ⅲ-16	剥片集中FC-1~7、集石S-1	39
図Ⅰ-4 土層断面図 (1)	6	IV 包含層出土の遺物		
図Ⅰ-5 土層断面図 (2)	7	図Ⅳ-1	包含層出土土器分布 (1)	45
図Ⅰ-6 土層断面図 (3)	8	図Ⅳ-2	包含層出土土器分布 (2)	46
II 遺跡の位置と周辺の環境		図Ⅳ-3	包含層出土土器分布 (1)	47
図Ⅱ-1 石狩低地帯周辺の遺跡	14	図Ⅳ-4	包含層出土土器分布 (2)	48
図Ⅱ-2 長沼町内の遺跡 (1)	15	図Ⅳ-5	包含層出土土器分布 (3)	49
図Ⅱ-3 長沼町の遺跡	16	図Ⅳ-6	包含層出土土器 (1)	55
図Ⅱ-4 長沼町内の遺跡 (2)	18	図Ⅳ-7	包含層出土土器 (2)	56
III 遺構と遺構出土の遺物		図Ⅳ-8	包含層出土土器 (3)	57
図Ⅲ-1 遺構位置図	19	図Ⅳ-9	包含層出土土器 (4)	58
図Ⅲ-2 H-1 (1)	21	図Ⅳ-10	包含層出土土器 (5)	59
図Ⅲ-3 H-1 (2)	22	図Ⅳ-11	包含層出土土器 (6)	60
図Ⅲ-4 H-1 (3)	23	図Ⅳ-12	包含層出土土器 (7)	61
図Ⅲ-5 H-1 (4)	24	図Ⅳ-13	包含層出土土器 (8)	62
図Ⅲ-6 H-1 出土遺物 (1)	25	図Ⅳ-14	包含層出土土器 (9)	63
図Ⅲ-7 H-1 出土遺物 (2)	26	図Ⅳ-15	包含層出土土器 (10)	64
図Ⅲ-8 土坑 (1) P-1~6	29	図Ⅳ-16	包含層出土土器 (1)	68
図Ⅲ-9 土坑 (2) P-7~9	30	図Ⅳ-17	包含層出土土器 (2)	69
図Ⅲ-10 土坑出土遺物	30	図Ⅳ-18	包含層出土土器 (3)	70
図Ⅲ-11 焼土F-1~4	32	図Ⅳ-19	包含層出土土器 (4)	71
図Ⅲ-12 土器集中PC-1~5	34	図Ⅳ-20	包含層出土土器 (5)	72

図Ⅳ-21 包含層出土石器(6).....	73	図Ⅴ-4 黒曜石産地推定判別図(1).....	90
図Ⅳ-22 包含層出土金属製品.....	74	図Ⅴ-5 黒曜石産地推定判別図(2).....	90
V 自然科学的分析等		図Ⅴ-6 黒曜石産地分析試料一覧.....	90
図Ⅴ-1 暦年較正年代グラフ.....	86	Ⅵ まとめ	
図Ⅴ-2 較正年代一覧.....	86	図Ⅵ-1 縄文時代晩期前半期土器群(1)...	94
図Ⅴ-3 北海道・東北地方黒曜石原石分布図.....	88	図Ⅵ-2 縄文時代晩期前半期土器群(2)...	95
		図Ⅵ-3 口唇部整形.....	97

表 目 次

I 諸言		V 自然科学的分析等	
表Ⅰ-1 出土遺物一覧.....	12	表Ⅴ-1 放射性炭素年代測定結果(1).....	85
Ⅱ 遺跡の位置と周辺環境		表Ⅴ-2 放射性炭素年代測定結果(2).....	85
表Ⅱ-1 長沼町の遺跡一覧.....	17	表Ⅴ-3 分析対象.....	87
Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物		表Ⅴ-4 北海道・東北地方黒曜石産地の判別群.....	88
表Ⅲ-1 フローテーション結果.....	41	表Ⅴ-5 測定値および産地推定結果.....	89
表Ⅲ-2 遺構一覧.....	42	表Ⅴ-6 器種ごとの産地.....	89
表Ⅲ-3 遺構出土遺物一覧.....	42	Ⅵ まとめ	
表Ⅲ-4 遺構出土掲載石器一覧.....	43	表Ⅵ-1 南六号川左岸遺跡縄文時代晩期前葉土器の特徴.....	92
表Ⅲ-5 遺構出土掲載石器一覧.....	44	表Ⅵ-2 ユカンボシE2遺跡・南六号川左岸遺跡・カリンバ3遺跡の縄文時代晩期前半期土器の比較.....	96
Ⅳ 包含層出土の遺物		表Ⅵ-3 有意な属性の新旧関係.....	97
表Ⅳ-1 包含層出土遺物一覧.....	74		
表Ⅳ-2 包含層出土掲載石器一覧.....	76		
表Ⅳ-3 包含層出土掲載石器一覧.....	81		
表Ⅳ-4 包含層出土掲載金属製品一覧.....	82		

写真図版目次

図版1 空中写真	図版5 竪穴住居跡(1)
1 南六号川左岸遺跡(1947年9月米軍撮影)	1 H-1 完掘(南東から)
図版2 遺跡遠景・近景	2 H-1 断面(南から)
1 遺跡遠景(北西から)	3 H-1 断面(東から)
2 遺跡近景(北から)	図版6 竪穴住居跡(2)
図版3 I層除去状況・調査状況	1 H-1 遺物出土状況(東から)
1 I層除去状況(南東から)	2 H-1 石斧出土状況(西から)
2 調査状況(北西から)	3 H-1 HF-1 検出状況(西から)
図版4 土層	4 H-1 HF-1 断面(西から)
1 C~E6区北壁断面(南西から)	5 H-1 HF-3 断面(東から)
2 I4区西壁断面(東から)	6 H-1 HF-4 断面(南から)
3 風倒木痕内榑前a軽石分布状況(K8区、西から)	7 H-1 HCC-2 断面(南から)

- 8 H-1 HFC-1 検出状況(北から)
- 図版7 竪穴住居跡(3)・土坑(1)
- 1 H-1 HP-1 断面(東から)
 - 2 H-1 HP-13 断面(南から)
 - 3 H-1 HP-11 断面(南西から)
 - 4 H-1 HP-14 断面(南から)
 - 5 H-1 HP-12 断面(南東から)
 - 6 H-1 HP-21 断面(北から)
 - 7 H-1 HP-23 断面(東から)
 - 8 H-1 HP-24 断面(南西から)
 - 9 P-1 断面(南から)
 - 10 P-1 完掘(南西から)
- 図版8 土坑(2)
- 1 P-2 断面(南から)
 - 2 P-2 完掘(南東から)
 - 3 P-3 断面(南から)
 - 4 P-3 完掘(南から)
 - 5 P-4 断面(南東から)
 - 6 P-4 完掘(南から)
 - 7 P-5 断面(南から)
 - 8 P-5 完掘(南西から)
- 図版9 土坑(3)
- 1 P-6 断面(北東から)
 - 2 P-6 完掘(南東から)
 - 3 P-7 断面・PFC-1(南から)
 - 4 P-7 完掘(南西から)
 - 5 P-8 断面(南から)
 - 6 P-8 完掘(南から)
 - 7 P-9 断面(北から)
 - 8 P-9 完掘(南西から)
- 図版10 焼土・集石・土器集中(1)
- 1 F-1 断面(西から)
 - 2 F-2 断面(北東から)
 - 3 F-3 断面(南から)
 - 4 F-4 断面(南から)
 - 5 S-1(南から)
 - 6 PC-2(北から)
 - 7 PC-3(北東から)
- 図版11 土器集中(2)・遺物出土状況
- 1 PC-4(北から)
 - 2 土器出土状況(D5区、南から)
 - 3 土製品(L8区、南から)
 - 4 石槍(15区、東から)
 - 5 石槍(13区、東から)
 - 6 石製品(G6区、北から)
 - 7 砥石(H6区、東から)
 - 8 寛永通宝(C5区、北東から)
- 図版12 遺構出土遺物(1)
- 1 H-1、P-3・6・7の遺物
- 図版13 遺構出土遺物(2)
- 1 PC-1~4の遺物
- 図版14 遺構出土遺物(3)・包含層出土遺物(1)
- 1 PC-4の遺物
 - 2 PC-5の遺物
 - 3 包含層出土土器(掲載番号1~19)
- 図版15 包含層出土遺物(2)
- 1 包含層出土土器(掲載番号20~55)
- 図版16 包含層出土遺物(3)
- 1 包含層出土土器(掲載番号56~79・81~83)
- 図版17 包含層出土遺物(4)
- 1 包含層出土土器(掲載番号80・84~112)
- 図版18 包含層出土遺物(5)
- 1 包含層出土土器(掲載番号113~147)
- 図版19 包含層出土遺物(6)
- 1 包含層出土土器(掲載番号148~179)
- 図版20 包含層出土遺物(7)
- 1 包含層出土土器(掲載番号180~207・209)
- 図版21 包含層出土遺物(8)
- 1 包含層出土土器(掲載番号208・210~227)
 - 2 包含層出土土器(掲載番号1~19)
- 図版22 包含層出土遺物(9)
- 1 包含層出土土器(掲載番号20~61)
- 図版23 包含層出土遺物(10)
- 1 包含層出土土器(掲載番号62~81)
- 図版24 包含層出土遺物(11)
- 1 包含層出土土器(掲載番号82~92)
・金属製品(掲載番号1)

I 諸言

1 調査要項

事業名：道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター（平成24年3月31日まで）

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（平成24年4月1日から）

遺跡名：南六号川左岸遺跡（北海道教育委員会登録番号：E-17-58）

所在地：夕張郡長沼町883-27ほか

調査面積：2,300㎡

受託期間：平成23年4月1日～平成24年3月31日、平成24年4月9日～平成25年3月29日

（発掘期間：平成23年8月1日～11月11日）

2 調査体制

平成23年度

理事長	坂本 均	常務理事	畑 宏明
専務理事	松本昭一	第1調査部長	千葉英一
総務部長	中田 仁	主 査	鈴木宏行（発掘担当者）
第2調査課長	鈴木 信		
主 査	末光正卓（発掘担当者）		

平成24年度

理事長	坂本 均	副理事長	畑 宏明（平成24年6月8日から）
専務理事	松本昭一（平成24年6月7日まで） 中田 仁（平成24年6月8日から）	常務理事	畑 宏明（平成24年6月7日まで） 千葉英一（平成24年6月8日から）
事務局長	中田 仁（平成24年6月8日から） （兼務）		
総務部長	中田 仁（平成24年6月7日まで） 和田基興（平成24年6月11日から）	第1調査部長	千葉英一 （兼務）
第2調査課長	鈴木 信	主 査	鈴木宏行

3 調査に至る経過

この調査の原因である道央圏連絡道路泉郷道路工事は、北海道開発局札幌開発建設部が実施している地域高規格道路「道央圏連絡道路」計画の一環である。

道央圏連絡道路は道央都市圏の新しい交通・物流ルートとなる4車線道路で、新千歳空港を起点とし、北海道横断自動車道千歳東IC、北海道縦断自動車道江別東IC、重要港湾石狩湾新港、北海道横断自動車道銭函ICを結ぶ延長約80kmの半環状道路である。市町村としては千歳市、長沼町、南幌町、江別市、当別町、札幌市、石狩市、小樽市を連結している。事業は新千歳空港関連・泉郷道路・長沼南幌道路・中樹林道路・美原バイパス・美原道路・当別バイパスの7区間に分けられている。

泉郷道路は千歳市中央から長沼町幌内に至る延長8.2kmの区間である。事業者である北海道開発局

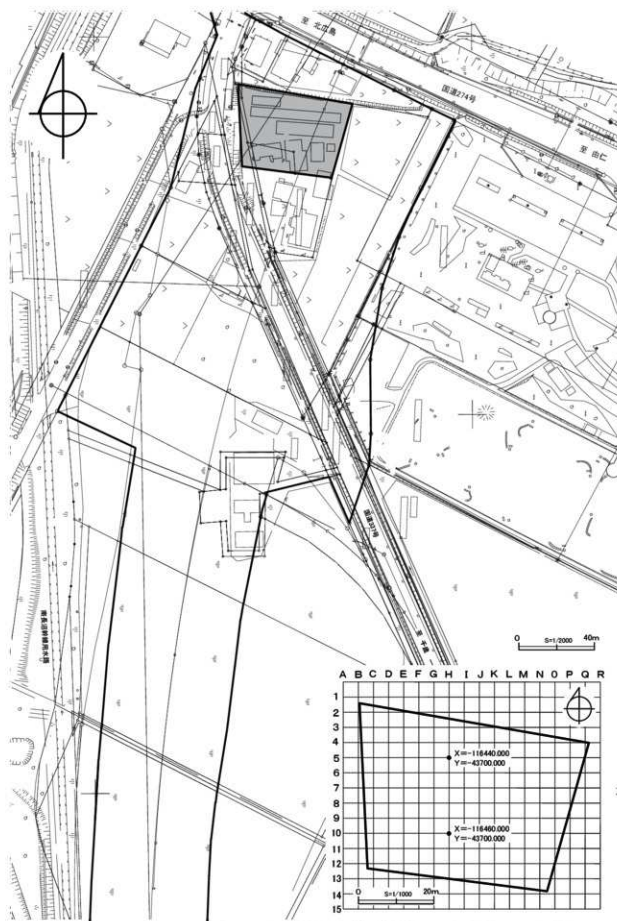


図 I-2 調査範囲・調査区設定図

札幌開発建設部は平成7年北海道教育委員会（以下、「道教委」と記す。）へ埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。その後、平成18年には区域の変更により事前協議書は再提出されている。この区間には幌内D遺跡、(仮)ウレロッチ川右岸遺跡、南六号川左岸遺跡が所在することから、道教委は平成21年9月15日～9月17日に3遺跡の試掘調査（幌内D遺跡については全体の半分程度）を実施した。その結果、(仮)ウレロッチ川右岸遺跡は790m²の工事立会、南六号川左岸遺跡は北東側2,150m²の発掘調査を要する旨、札幌開発建設部に対して回答した。幌内D遺跡については平成21年11月26日に残りの試掘調査を行い、遺構確認2,740m²、発掘調査700m²、工事立会3,330m²の回答がなされた。

南六号川左岸遺跡の発掘調査は当センターが受託し、平成23年8月1日から実施することとなった。調査を開始すると西側に包含層が広がることが確認されたため調査範囲を150m²拡張し（最終面積2,300m²）、そのため期間を2週間延長し、現地調査を11月11日に終了した。

4 調査概要

(1) 調査区の設定

調査区はアルファベットの大字と数字の組み合わせで表示し、規格は4×4mとした。調査区の基準軸の設定については、従来行われてきた用地のセンターラインなどを利用せず、広域での位置比較を容易に可能とするために世界測地系による平面直角座標値に東西、南北方向を一致させた。調査区全体が入るように、南北方向はHラインを-43700.00、東西方向は5ラインを-116440.00に設定した（図I-2）。

ラインは、東西方向をアルファベットの大字とし、東に向かってA～R、南北方向をアラビア数字とし、南に向かって1～14まで付けた。

調査区の呼称は4m四方区画の北西隅（図では左上）のライン交点で示した。例えば、Eラインと3ラインの交点の南東側が「E3区」ということになる。

H5・H10の世界測地系による平面直角座標は以下のとおり。

H5	X = -116440.000	Y = -43700.000
H10	X = -116460.000	Y = -43700.000

(2) 土層

観察方法

土層については、以下の項目について観察・記録した。色調・面積割合については『新版標準土色帖』を用い、土性・堅密度・粘性（粘着性）の区分は『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇話会1984）の基準を用いた。

- ・色調：色相・明度・彩度を記号および数値で表した。
- ・土性：砂土（S）・砂壤土（SL）・壤土（L）・シルト質壤土（SiL）・埴壤土（CL）・軽埴土（LiC）・重埴土（HC）に区分し、必要に応じて記載した。
- ・粘性：なし・弱・中・強に区分した。
- ・堅密度：すこぶるしろう・しろう・軟・堅・すこぶる堅・固結に区分した。
- ・火山噴出物の有無：種類と面積割合を記載した。

その他、主に混入物については種類・大きさなどを記載した。

基本土層（図I-3）

I層：黒褐色（10YR 2/3）砂壤土 粘性中 堅密度すこぶる堅 Ta-a軽石（粒径2mm、亜角礫、未風化）5～7% 砂利礫等含む 表土・耕作土 II層との層界面然

II層：黒色（10YR17/1～2/2） 埴壤土 粘性中～弱 堅密度軟～堅 一部En-a軽石（最大5%）混入 III層との層界渐变 遺物包含層

III層：暗褐色（10YR3/3）～鈍い黄褐色（10YR4/4～5/4） 埴壤土 粘性強 堅密度堅 一部En-a軽石（最大5%）混入 IV層との層界渐变 漸移層

IV₁層：黄褐色（10YR5/6） 埴壤土 粘性強 堅密度堅 En-a軽石（粒径20mm、亜円礫、腐朽～風化）5～7% 軽石は水成堆積物か？ IV2層との層界渐变

IV₂層：明黄褐色（10YR6/8） 壤土 粘性中～強 堅密度堅

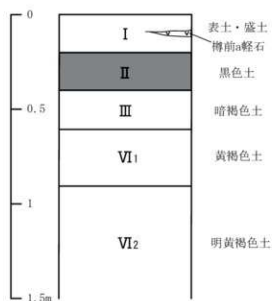
土層（図I-4～6）

調査区は馬追丘陵から西側に延びる石狩低地帯に臨む低い段丘上に位置し、全体的には緩やかに西側に向かって傾斜している。その北側は国道274号線に沿った宅地造成により、西側は国道337号線により削平されている。調査区内でも9ライン以南（F～Mライン）は住宅等の建設のためにIII～IV層まで削平され、9ラインより北側についても耕作が20～35cmの深さに及び、上部は攪乱されていた。自然堆積層であるII・III層は段丘上をほぼ同じ厚さで被覆していたと考えられるが、II層は西側に厚く、東側はLライン以東ではほとんど残存していなかったことから耕作によって本来の地形の傾斜がやや平坦に均されていたとみられる。調査区の北西部、D～Gライン・2～5ラインには沢状地形が検出され（図III-1）、II層に類似した層がやや厚く堆積していた。H-3の掘り上げ土とみられる層（図I-6、4ライン3層）が沢状地形堆積物中に挟入することから沢状地形が埋まる途中で、H-3が構築されたと考えられる。

I層にはTa-a軽石が混じる。I層下位のII～IV層では風倒木痕が複数確認され、その中には一次堆積に近いものがあることからTa-a軽石堆積・倒木の後に耕作が行われていることが確認できる。

II層は遺物包含層で、層厚は15～20cmである。縄文時代早期～擦文文化期の遺物が出土したが、層位的に分離できなかった。長沼町の南側に隣接する千歳市で認められるTa-c軽石はII層中には肉眼的には確認できなかった。

III層は漸移層で、IV層との層界は凹凸が激しく、その下位にはEn-aの風化ローム層であるIV層が厚く堆積する。



図I-3 基本土層図

ライン

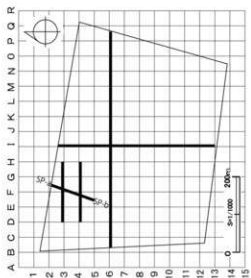
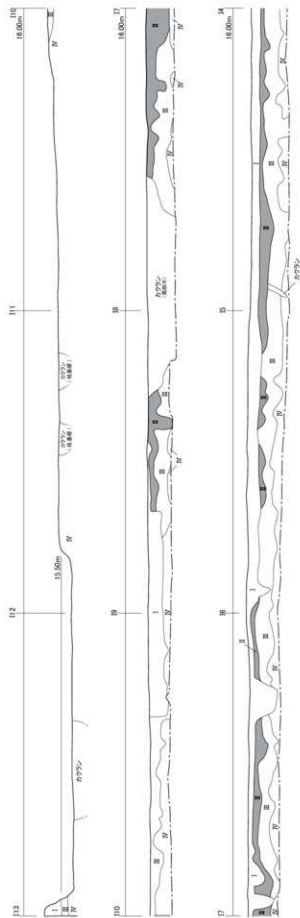
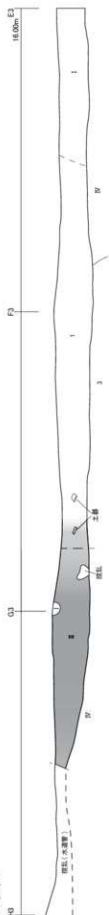
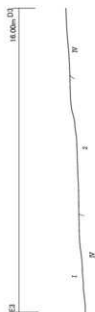


図 I-4 土層断面図 (1)

3ライン



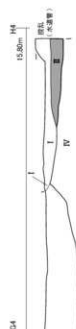
1. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の2mm, 中層に赤褐色の厚さ約20mm最大10mm, 粘化-粘付層(17%) 粘化-粘付層(17%)
2. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)
3. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)
4. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)



4ライン



1. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm, 中層に赤褐色の厚さ約20mm最大10mm, 粘化-粘付層(17%) 粘化-粘付層(17%)
2. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)
3. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)
4. 赤土(0.00327) 粘質土 粘粒強 粘粒強度 上段: $T_v=0.4$ の20mm最大30mm, 粘化-粘付層(17%) 粘付層(17%)



飛状地形断面



図 I-6 土層断面図 (3)

(3) 調査の方法

調査区は住宅の撤去された更地で、調査開始時には草の生い茂る状況であった。まず、重機によって1層を除去し、杭の打設を行った。その後、人力により1層の残りを除去し、II層以下の調査を開始した。包含層調査は調査区全体を早期に把握するために1グリッド置きに掘り下げ(25%調査)、その結果をもとに、包含層が厚く、遺物量の多い北西側を先行して進めた。

また、包含層調査においては遺構の検出に努め、検出した遺構は大型のものは十字ベルトを残し、それ以外のものは半載、断面図作成後、完掘し、図面を作成した。遺物は床面や坑底面の主要なものについては図面に記載し、覆土中のものについては覆土単位で取り上げ、包含層の遺物はグリッド単位で層位ごとに取り上げた。焼土・炭化物集中は土壌を採集し、有機質遺物の回収を目的としてフローテーション法(浮遊物を0.425mmと2mmメッシュで、沈殿物を1mmメッシュの篩で選別)による選別作業を行った。

出土遺物は、現場段階で遺跡名・グリッド(遺構名)・層位・遺物番号・日付をマジックでビニール袋に明記して取り上げた。取り上げに際しては土器片、剥片石器類・礫石器類に袋を分けた。

調査状況や遺構等の確認状況・平面・断面、遺物出土状況については図化作業と写真撮影によって記録した。使用したフィルムは6×7判リバーサル・モノクロ、35mm判リバーサルで、デジタルカメラを補助的に利用した。

(4) 整理の方法

a 土器・石器

取り上げた遺物は①水洗・乾燥、②分類、③遺物カード作成、④遺物台帳作成、⑤注記の順で一次整理を行った。現地では①を完了し、②・③については半分程度終了し、それ以降の作業は発掘終了後に江別の整理作業所で行った。

土器は縄文時代中期～晩期が主体であり、現地での分類はそれぞれⅢ・Ⅳ・Ⅴ群に留めた。また、それらの分類については接合作業を通して修正を行い、さらに特徴的な文様があり、細分可能なものについては細分を行った。

石器は剥片・礫以外を抜き出し、1点につき1つの袋に入れて分離した。それらの袋ごとに遺物カードを作成し、調査区・遺構名・遺物番号・層位・分類名(器種名)・石質・点数を記入した。遺物番号は点取り遺物がある場合にはその番号を優先的に1番から付け、その後剥片石器・礫石器に番号を付けた。これらのカード情報を基に台帳作成を行い、データについてはエクセルで入力を行った。

注記については、土器は約1cm以上のものについてポスターカラーで行い、クリアラッカーで上塗りした。石器は報告書掲載資料について、掲載選定後に同様に行った。注記の順番は遺跡名、調査区・遺構、層位、遺物番号の順番でそれぞれの間にはピリオドをつけている。具体的な注記の要領は以下のとおりである。

遺跡名:「MS」とした。

調査区・遺構名等:包含層出土遺物の場合はアルファベットと数字を連続させ、E12区の場合「E12」と記載し、遺構出土遺物の場合はアルファベットと数字の間にハイフン(-)を入れて「H-1」と記載した。

遺物番号:アラビア数字で表現した。

層位:基本層位にあるものはローマ数字で表現し、覆土や攪乱や床面の場合はカタカナや漢字で「フク」「カク」「床」と表現した。

以上の注記法に従い、E12区Ⅲ層出土の遺物は「E12.Ⅲ」、竪穴住居跡1床面出土の遺物番号3の

遺物は「H-1床3」となる。

以上の一次整理作業後に土器の接合、石器の接合（主に折れ面接合）を行った。土器の接合は分類ごとに進め、接合作業の終了後、まとまった資料には接合個体番号を与え、接合カードと展開写真を撮影してファイルに綴じて管理した。これらの資料は全て接着・復元の前に粘土紐の積み上げ痕である接合痕を観察し、展開写真にその位置、断面形状を記入し、実測時に断面図に追加した。その後、接合個体番号をつけた資料から掲載遺物を選択し、実測、拓本、トレース、写真撮影などの図版作成に関する作業を行った。土器の掲載基準は、実測図は復元できた個体、拓影図は大きく接合したものを優先的に、文様構成の特徴的なものとした。石器は、分類・細分類単位で特徴的なものを掲載した。実測図や拓影図を示した土器・石器などは写真図版にも載せ、掲載遺物一覧表に表示した。

b 遺物の収納

整理後の遺物は、報告書掲載資料と非掲載資料に分け、掲載資料は、掲載番号順にコンテナに収納した。復元土器についてはダンボール箱に収納している。

非掲載資料は土器・石器に分け、それぞれ遺構・包含層出土資料に分け、遺構は全種別とも遺構毎に、包含層出土資料は、土器は分類ごと、発掘区ごとに分けて収納した。石器は、器種ごと、分類ごとに分けて収納した。

最終的にこれらのコンテナ・ダンボール箱に通し番号を付け、収納台帳を作成した。

(5) 遺物の分類

a 土器の分類

土器は（公財）北海道埋蔵文化財センターの一般的な分類に準じ、縄文時代早期～擦文文化期に至るまでⅠ～Ⅶ群に分類し、特徴的な文様などにより可能な破片等については細分類を行っている。

Ⅰ群 縄文早期に属するもの。本群は大きく二つに分類される。

a類 貝殻腹線圧痕文・条痕文のある土器群

b類 縄文・撚糸文・絡条体圧痕文・貼付文のある土器群

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの

a類 胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群

b類 円筒土器下層式・植苗式に相当する土器群

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの

a類 円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当するもの

b類 天神山式、柏木川式、北筒式（トコロ6類）に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの

a類 余市式、タブコブ式、入江式に相当するもの

b類 ウサクマイC式、手稲式、鯨調式、エリモB式に相当するもの

b1類 ウサクマイC式

b2類 手稲式

b3類 鯨調式

c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの

a類 大洞B・BC式、東三川I式、上ノ国式に相当するもの

b類 大洞C₁・C₂式、美々3式に相当するもの

c類 大洞A・A'式、タンネットウL式に相当するもの

VI群 縄文時代に相当するもの

VII群 擦文文化期に相当するもの

b 土製品等の分類

土玉 土製の玉

土製品 土製で、一次・二次的に成形された土器・玉以外のもの

焼成粘土塊 土器や土製品の作成時に副次的に作出され、焼成を受けたと見られる粘土の塊

c 石器類の分類

石鏃 素材を細かい加工により薄身にして、端部に尖頭部を作り出した5cm未満の石器

I類：茎部が作出されるもの 茎部形状によって5種類に分けられる

Ia類：茎部側縁が明瞭に内湾し、茎部が棒状に近いもの

Ib類：茎部側縁がやや内湾し、茎部が短く三角形に近く、尖頭部が長いもの

Ic類：茎部側縁が比較的明瞭に内湾し、茎部が幅広く四角いもの

Id類：基部側縁がやや内湾し、茎部が三角形のもの 全体的な形状は菱形に近い

Ie類：基部側縁が内湾せず、棒状～やや幅広いもの

II類：基部が直線的で五角形を呈する

III類：三角形を呈するもので、形状によって2種類に分けられる

IIIa類：やや幅広いもの

IIIb類：幅の狭いもの

IV類：折損などにより不明のもの

石槍 素材の両面を細かく加工して、尖頭部を作り出した5cm以上の石器

ナイフ 素材の両面を細かく加工して、幅広い四角い基部を作り出した概ね5cm以上の石器

両面調整石器 素材の両面を粗く加工した石器で、石槍・ナイフ以外の石器

つまみ付きナイフ 素材端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出した石器

スクレイパー 素材の側縁を中心に連続的な二次加工を施した石器

石錐 素材の端部に錐状の尖頭部を作り出した石器

楔形石器 素材の両端に両極剥離による対向する剥離がある石器

二次加工ある剥片 素材に二次加工を施したもので、定形的石器に分類されない石器

剥片 石核・石器（ツール）から剥離されたもので、二次的な加工が施されていない石器

石核 目的剥片を剥離したと考えられる石器

石斧 打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器

礫石 礫に幅広く浅い窪み状の擦り面のある石器

たたき石 礫に潰打痕が観察される石器

すり石 小型礫の縁辺や平坦面に擦り面がある石器

台石 扁平礫に打撃痕や擦り痕が観察される石器

原石 石器の石材として利用される石で、人為的と考えられる剥離面のないもの

礫 石器の石材として利用されない石で、剥離、敲打痕、潰打痕、擦り痕などが観察されないもの

(6) 調査結果の概要

遺構は竪穴住居跡1軒、土坑9基、焼土4か所、集石1か所、土器集中5か所、フレイク集中7か所が検出され、北西部で沢状の落ち込みが確認された。

竪穴住居跡は縄文時代中期後半北筒式期で、長径6m、短径4m程の隅丸長方形を呈する。床面の

長軸上には3か所の焼土が検出された。土坑は直径2m程の円形で、底面が皿状、覆土が黒色土主体のものが多い。

遺物は土器等が24,582点、石器等が19,835点、その他が201点、合計44,618点出土した。土器はⅠ群が1点(0.004%)、Ⅱ群が1点(0.004%)Ⅲ群が4,768点(19%)、Ⅲ群a類が167点(0.7%)、Ⅲ群b類が71点(0.3%)、Ⅳ群が3,353点(13.7%)、Ⅳ群b類が3点(0.01%)、Ⅳ群b1類が369点(1.5%)、Ⅳ群b1・2類が15点(0.06%)、Ⅳ群b2類が103点(0.4%)、Ⅳ群b3類が3点(0.01%)、Ⅳ群c類が14点(0.06%)、Ⅴ群が15,617点(64%)、Ⅵ群が1点(0.004%)、Ⅶ群が21点(0.09%)出土している。

最も多いⅤ群土器は晩期前葉がほとんどで、大洞BC式や上ノ国式に並行すると思われる。次に多いのはⅢ群で、萩ヶ岡2式、北筒式が含まれる。次にⅣ群であるが余市式がほとんどで、ウサクマイC式・手稲式の前半段階が少量出土する。それら以外は非常に少量の出土である。

石器は、石鏃・石槍・ナイフ・両面調整石器・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・楔形石器・二次加工ある剥片・剥片・石核・石斧・砥石・たたき石・すり石・台石・原石・礮・垂飾が出土した。石鏃は各時期に相当する各形態がある。剥片石器の大部分には黒曜石が、石斧には緑色泥岩・片岩が利用され、それらの加工に伴う小型の剥片・砕片が約18,524点出土している。(鈴木)

表Ⅰ-1 出土遺物一覧

種別	分類	遺物	仮含層	総計
土器ほか	土器	Ⅰ	1	1
		Ⅱ	1	1
		Ⅲ	236	4,768
		Ⅲ a		167
		Ⅲ b	7	64
		Ⅳ	243	3,099
		Ⅳ b		3
		Ⅳ b 1	10	359
		Ⅳ b 1・2		15
		Ⅳ b 2	3	100
		Ⅳ b 3		3
		Ⅳ c		14
		Ⅴ	394	15,223
		Ⅵ		1
	Ⅶ		21	
	不明		4	
	土製品		4	4
	土玉		1	1
	焼成粘土塊		4	66
	土器ほか 小計		897	23,685
石器ほか	石鏃	Ⅰ a		25
		Ⅰ b		7
		Ⅰ c		2
		Ⅰ d	1	18
		Ⅰ e		9
		Ⅱ		2
		Ⅲ a		5
		Ⅲ b		1
		Ⅳ		14
		石槍	3	38
		ナイフ		1
		両面調整石器	1	54
		つまみ付きナイフ	1	10
		スクレイパー	2	24
	石錐		12	
	楔形石器	7	47	
	二次加工ある剥片	5	181	
	剥片	12,765	5,759	
	石核	3	67	
	石斧	5	58	
	砥石	7	40	
	たたき石	1	28	
	すり石		6	
	台石		4	
	原石		2	
	礮	54	565	
	垂飾		1	
石器ほか 小計		12,855	6,989	19,835
その他	古銭		2	2
	高師小僧	3	6	9
	炭化物	190		190
その他 小計		193	8	201
総計		13,948	30,673	44,618

II 遺跡の位置と周辺環境

1 遺跡の位置と環境

南六号川左岸遺跡のある長沼町は行政区では空知支庁の最南端、地質構造区分上、また、気候・植生・動物分布の境界線として北海道を東西に分ける石狩低地帯、別名札幌・苫小牧低地帯の東縁に位置する。町の東側には南北に馬追丘陵が縦走り、千歳市からさらに安平町に連続している。馬追丘陵は千島弧と東北日本弧の衝突によって形成された日高山脈の前縁をなすもので褶曲群により隆起した地形である。日高山脈西縁断層帯（東斜面の逆断層）が丘陵に沿って走っている（小崎ほか編2003）。周辺の遺跡では千歳市キウス7遺跡（西田ほか1996）・キウス4遺跡（廣瀬ほか2000）などでこれらの断層と関連するとみられる地割れの痕跡が検出されている。

夕張岳に源流を発する夕張川は山間部を西流した後、馬追丘陵の東側に南北に広がる由仁安平低地に入り、北西に流れを変え、石狩低地帯に入ったところで西北西に流れ、江別市で石狩川に合流する。町内の直線的な現夕張川は1936年に完成した治水事業により切り替えられたもので、本来の流路（現「旧夕張川」）は、北長沼で大きく南西に流向を変え、北広島市と江別市の境界で千歳川に合流するものであった。その旧夕張川もさらに時代を遡ると松浦武四郎の安政四年東西蝦夷山川地取調図にはフシコユウハリ（古夕張川）の記載があり、長沼町北十三号と北十四号のほぼ中点の旧夕張川から南に流れ、舞鶴周辺で千歳川に注いでいたことが推定されている（長沼町史編纂委員会1977）。

長沼町は明治の入植以来度重なる水害に悩まされており、夕張川の治水事業のほか、町内は治水・農業のために地形の改変が行われている。千歳川は舞鶴橋周辺から下流5.2kmの蛇行部について1937年に直線化の工事が完成した。北海道開発局は昭和22年長都総合農地開発事業を起工し、南十三号幹線排水路を新設し、本来馬追沼に注いでいた剣淵川を直線的に千歳川に接続し、これにより馬追沼やポンユウバリ沼が干拓され、両沼をつないでいたイカベツ川は廃川となった。また、馬追沼の南西に隣接する長都沼は千歳川と長都沼を分離させる「長都新水路」が1961年に通水し、その後の排水網の整備により湿地の地下水位が低下、1967年に沼の中央に開削された第14号幹線排水路が完成して開拓は完了した。これら一連の灌漑事業によって馬追沼と長都沼は消滅、千歳川・夕張川の水路も戦前に比べ大きく変容している。

長沼町は西側の石狩低地帯と東側の馬追丘陵によって地形的に特徴付けられるが、かつては丘陵の西側を沿うように古夕張川が南流し、標高300m以下の低い馬追丘陵から全長4 km以下の小河川がほぼ1 km間隔で下刻し、古夕張川に流入していたようである（図Ⅱ-2）。

南六号川左岸遺跡は町域の南東部に位置し、馬追山の南部を水源として西流するハイタウシュナイ川左岸に位置する（図Ⅰ-1、図Ⅱ-1・2）。ハイタウシュナイ川は明治29年の地形図ではマオイ川に合流し、馬追沼に流れ込んでいるが、現在は運河兼幹線排水路として開削された南六号川に連結し、北西方向に直線的に流れ、千歳川に注いでいる。本遺跡名はこの南六号川の名に由来している。

2 周辺の遺跡

長沼町は北海道の中央部に広がる石狩低地帯の東部に位置する。石狩低地帯周辺は遺跡が濃密に分布し、地形的に低平な段丘の広がる恵庭市から千歳市にかけては千歳川水系の支流に沿って、馬追丘陵が迫る東側は低地帯に沿った狭い段丘上に分布する特徴がある（図Ⅱ-1）。

長沼町内には58か所の埋蔵文化財包蔵地が記載され（表Ⅱ-1）、そのほかに境内に周堤墓の可能



(国土地理院発行数値地図50000「地図画像」北海道IV)に陸地測量部明治29年製版の5万分の1地形図「長都」を合成)

図Ⅱ-1 石狩低地帯周辺の遺跡

性が指摘されている窪みのある椀内神社が知られている（芝田2000）。中には縄文土器型式の標式遺跡であるタンネットウ遺跡や堂林遺跡、異形環状土器の出土した12区B遺跡、大洞A式期に相当する壺形土器の出土した椀内西村遺跡、後北C₁式完形土器5点が副葬された墓坑の検出された北長沼遺跡など著名な遺跡がある。これらの遺跡の発見や調査は当地出身で北海道考古学研究所の牽引者の一人である野村崇氏の尽力による功績が大きい。これら著名な遺跡の調査は1950年代後半～1960年代前半にかけて行われたが、その後は1981年に12区B遺跡など小規模なものは行われたが、規模の大きい緊急発掘調査は今回の南六号川左岸遺跡及び椀内D遺跡が初めてである。

町内の遺跡は巨視的に見れば石狩低地帯の東縁、馬追丘陵の西裾の段丘上に南北に沿って立地し、その分布はキウス周堤墓群のある南方へと連続している。微視的に見ると馬追丘陵から石狩低地帯に向かって流下する多くの小河川や湧水などの周辺に立地している。

時期の判明している遺跡は37遺跡で、縄文時代中期（14遺跡）、後期（18遺跡）、晩期（13遺跡）が多く、その他は擦文文化期（5遺跡）、統縄文時代（3遺跡）、縄文時代早期（2遺跡）、縄文時代前期（1遺跡）、アイヌ文化期（1遺跡）である。時期別に分布を見ると、縄文早期（登載番号7・55）は町南部のウレロッチ川周辺に、縄文中期（登載番号1・3・6・10・12・14・24・31・36・42・43・48・54・58）、後期（登載番号1～3・6・11・14・16～18・21・28・31・32・39・40・43・55・58）、晩期（登載番号2・7・9・22・25・29・32・34・38・45・47・55・58）は南北ほぼ全域に分布している。統縄文時代（登載番号4・29・46）は南北に点々と、擦文文化期（登載番号1・4・14・15・17）はウレロッチ川周辺と鯉淵川周辺に分布する。標高は15～25mが主体を占めるものの遺跡数の多い縄文時代中期～晩期は25～50mや50m以上の石狩低地帯からやや離れた馬追丘陵内部にも立地するものがある。

縄文時代早期ではタンネットウ遺跡B発掘区で東銅路Ⅲ式～東銅路Ⅳ式を含む「タンネットウE式」土器が出土している（図Ⅱ-4上段左）。縄文時代前期は静内中野式が椀内L遺跡、タンネットウA・B両地点から採集されている。縄文時代中期は椀内A・C・F・H・J・L、12区D、11区A、1区Bなどの遺跡で採集されているが詳細は不明である。縄文後期は椀内K・L・1遺跡で手稲式が、椀内堂林（図Ⅱ-2）、椀内B、16区B、12区A・B遺跡（図Ⅱ-4中段）などで堂林式が採集・出土している。縄文時代晩期はタンネットウ遺跡A発掘区（図Ⅱ-4上段右）で幣舞式～緑ヶ岡式に相当する「タンネットウL式」が、椀内西村遺跡（図Ⅱ-4下段左）では大洞A式相当の壺形土器が出土している。

統縄文時代は北長沼遺跡（図Ⅱ-4下段右）で後北C₁式完形土器5点、石器数点、人骨が出土した墓坑が検出され、椀内D遺跡の平成23・24年度調査で北大I式期とみられる墓坑が多数検出されている（北海道埋蔵文化財センター2012・2013）。平成19年には椀内D遺跡の段丘崖下の沖積地で後北C₂-D式～前期擦文土器が出土している。

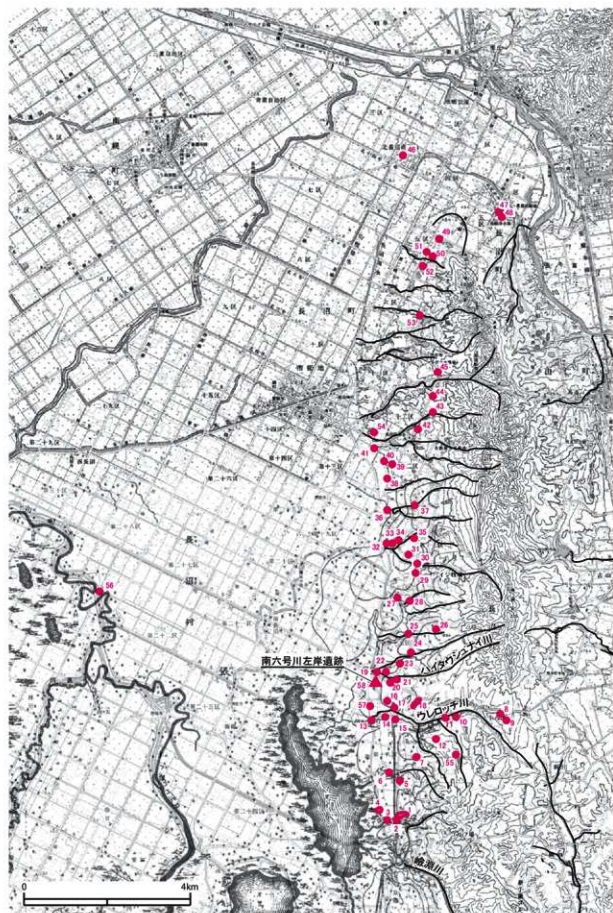
擦文文化期は椀内南遺跡で擦文土器とともに甕の胴部とみられる須恵器片や紡錘車が表面採集されている。また、椀内D遺跡では前半期とみられる墓坑や住居跡が検出され、後半期の土器も少量出土している。

（鈴木）



椀内堂林遺跡

図Ⅱ-2 長沼町内の遺跡（1）

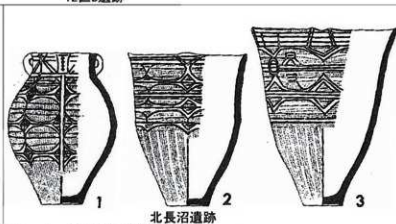
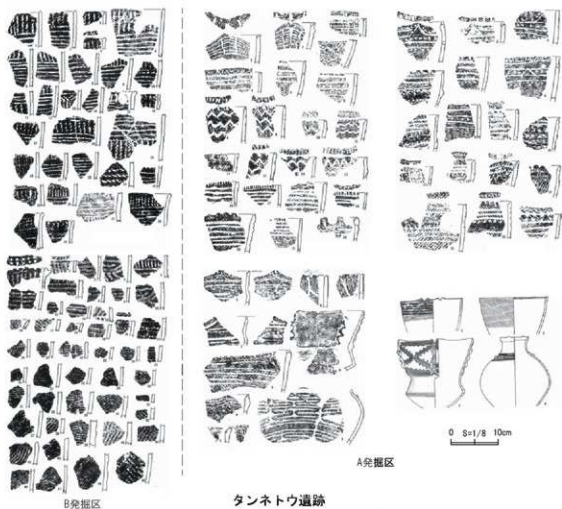


(国土地理院発行数値地図50000(地図画像)「北海道庁」に陸地測量部明治29年製版の5万分の1地形図「長郡」を合成して使用し、馬道丘陵の河川を加筆)

図Ⅱ-3 長沼町の遺跡

表Ⅱ-1 長沼町の遺跡一覧

登録番号	種別	名称	立地(標高:約)	時期	内容・文献
1	集落跡	観内A道跡	低位段丘(25m)	縄文中・後期、弥文期	昭和元年調査
2	遺物包含地	観内B道跡	低位段丘(15m)	縄文後期末・晩期	
3	遺物包含地	観内C道跡	低位段丘(25m)	縄文中・後期	
4	遺物包含地	観内D道跡	低位段丘(7~18m)	縄文、弥文期	平成23・24年度調査
5	遺物包含地	観内E道跡	低位段丘(35m)	縄文時代	
6	遺物包含地	観内F道跡	約20mの低位段丘(20m)	縄文中・後期	
7	遺物包含地	タンネトウ道跡	中位段丘(40~68m)	縄文早期・晩期	昭和32・33・35年調査、野村(1977d)、タンネトウE・L式の構式遺跡
8	遺物包含地	観内G道跡	丘陵(90m)	不明	栗塚石片、胎形形跡器
9	墳墓	観内西村道跡	丘陵(90m)	縄文晩期	大洲A式男の大形器。昭和35年調査
10	遺物包含地	観内H道跡	ウレロッチ川左岸の段丘(25m)	縄文中期	
11	遺物包含地	観内I道跡	ウレロッチ川左岸の段丘(25m)	縄文後期	
12	遺物包含地	観内J道跡	ウレロッチ川に注ぐ小沢の段丘(45m)	縄文中期	
13	遺物包含地	観内K道跡	ウレロッチ川左岸の段丘(18m)	不明	
14	遺物包含地	観内L道跡	ウレロッチ川左岸の低位段丘(18m)	縄文前・中・後期、弥文期	旧称ウレロッチ川左岸道跡。昭和37年調査。手組式多数採集
15	遺物包含地	観内M道跡	小沢の左岸段丘(18m)	縄文時代、弥文期	
16	遺物包含地	観内N道跡	ウレロッチ川に注ぐ小沢の左岸段丘(30m)	縄文後期	
17	遺物包含地	観内南道跡	ウレロッチ川に注ぐ小沢の右岸段丘(30m)	縄文後期、弥文期	観内I道跡の沢内。須恵器・紡錘車
18	遺物包含地	観内堂林道跡	ウレロッチ川に注ぐ小沢の右岸段丘(40m)	縄文後期	昭和35年調査。堂林式の構式遺跡。野村・宇田田(1967)
19	遺物包含地	17区A道跡	低位段丘先端部(13m)	アイヌ期	陶磁器
20	遺物包含地	17区B道跡	低位段丘(25m)	縄文時代	
21	遺物包含地	17区C道跡	舌状台地(25m)	縄文後期	
22	遺物包含地	17区D道跡	舌状台地の先端(20m)	縄文晩期	
23	遺物包含地	17区E道跡	低位段丘(25m)	縄文時代	
24	遺物包含地	17区F道跡	舌状台地(35m)	縄文中期	
25	遺物包含地	17区G道跡	低位段丘(30m)	縄文晩期	
26	遺物包含地	17区H道跡	中位段丘(60m)	縄文時代	
27	遺物包含地	16区A道跡	低位段丘先端部(30m)	不明	造田工事で消滅
28	遺物包含地	16区B道跡	低位段丘(35m)	縄文後期	堂林式
29	遺物包含地	16区C道跡	低位段丘(35m)	縄文晩期、縄文時代	
30	遺物包含地	16区D道跡	30m	縄文時代	
31	遺物包含地	16区E道跡	段丘(30m)	縄文時代中・後期	
32	遺物包含地	16区F道跡	低位段丘先端部(20m)	縄文後・晩期	
33	遺物包含地	16区G道跡	低位段丘(20m)	縄文時代	
34	遺物包含地	16区H道跡	低位段丘(25m)	縄文晩期	
35	遺物包含地	16区I道跡	低位段丘(30m)	縄文時代	
36	遺物包含地	16区J道跡	舌状の低位段丘(20m)	縄文中期	
37	遺物包含地	16区K道跡	低位段丘(25m)	縄文時代	
38	遺物包含地	16区L道跡	低位段丘先端部(20m)	縄文晩期	
39	遺物包含地	12区A道跡	低位段丘(20m)	縄文後期	堂林式
40	遺物包含地	12区B道跡	低位段丘(15~20m)	縄文後期	堂林式。1975年調査。異形環状土器出土(野村編1984)
41	遺物包含地	12区C道跡	富士川左岸の低位段丘(18m)	不明	昭和45年調査。
42	遺物包含地	12区D道跡	中位段丘(35m)	縄文中期	
43	遺物包含地	11区A道跡	中位段丘(70m)	縄文中・後期	
44	遺物包含地	11区B道跡	中位段丘(70m)	縄文時代	
45	遺物包含地	11区C道跡	中位段丘(60m)	縄文晩期	
46	遺物包含地	北長沼道跡	低位段丘(25m)	縄文晩期前期	昭和5年発見。壺形式墳墓から後北C式期の完形土器5点、石器数点、人骨。
47	遺物包含地	1区A道跡	低位段丘(35m)	縄文晩期	
48	遺物包含地	1区B道跡	低位段丘(30m)	縄文中期	
49	遺物包含地	5区1道跡	丘陵(65m)	縄文時代	
50	遺物包含地	5区2道跡	丘陵(55m)	縄文時代	
51	遺物包含地	5区3道跡	丘陵(50m)	縄文時代	
52	遺物包含地	5区4道跡	丘陵(50m)	不明	石片
53	遺物包含地	6区1道跡	丘陵(55m)	不明	石鏝・石斧・加工痕のある石片・石片
54	遺物包含地	12区E道跡	低位段丘(20m)	縄文中期	
55	遺物包含地	ウレロッチ道跡	ウレロッチ川に注ぐ小沢の段丘と丘陵斜面(70~80m)	縄文早・後・晩期	土器・石斧・石片・石鏝・方割石
56	遺物包含地	28区I道跡	千歳川自然堤防(6~7m)	不明	
57	遺物包含地	ウレロッチ川右岸道跡	ウレロッチ川右岸段丘(15m)	不明	土器・石器
58	遺物包含地	南六号川左岸道跡	ハイタウシェナイ川左岸低位段丘(20m)	縄文中・後・晩期	



図II-4 長沼町内の遺跡 (2)

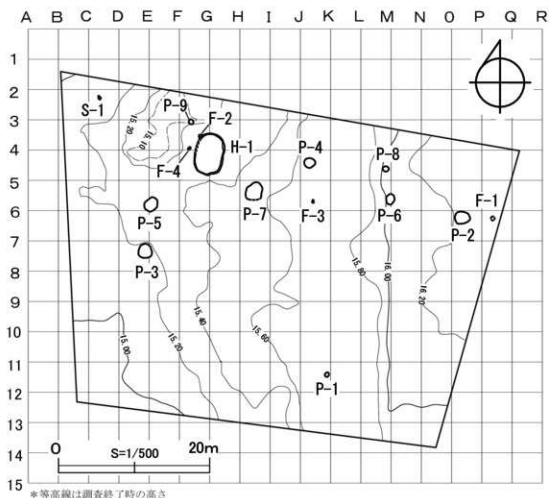
III 遺構と遺構出土の遺物

1 概要

遺構は竪穴住居跡1軒（H-1）、土坑9基（P-1～9）、焼土4か所（F-1～4）、土器集中5か所（PC-1～5）、剥片集中7か所（FC-1～7）、集石1か所（S-1）が検出された。

調査区の北側は現在宅地の造成と国道274号線により削平されているが、それらの北側にはハイタウシュナイ川が西流し、低地帯に流れ込む。西側も同様に国道333号線に削平されているがその先は低地帯で、段丘崖があったと推定される。調査区は北側が馬道丘陵から流下する小河川、西側は石狩低地帯を望む段丘の縁辺部に面する標高15～16mの段丘面上に立地する。遺構は8ラインより北側に偏在し、ハイタウシュナイ川寄りに多い。北西部のH-1西側には住居跡より古い沢状地形があり、その埋没途中にH-1は形成される。

H-1は南北方向に長軸のある住居跡で、床面や覆土下層出土の遺物より縄文時代中期後半北筒式期とみられる。土坑は直径2m程度の円形で、底面が皿状、覆土が黒色土主体のものが多い。



図III-1 遺構位置図

2 竪穴住居跡

竪穴住居跡 1 (H-1) (図Ⅲ-2~7、図版5~7・12)

位置：F3・4、G3・4区、調査区北西部の標高15mの段丘上に位置する。

規模：5.57×3.74/5.26×3.53/0.53m 平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-7°-E

確認・調査：Ⅱ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上面でD~H列、5ライン以北で黒色土の落ち込みを確認した。4ラインに沿ってD~G間にトレンチ調査をしたところ、東側は住居の壁と床面が確認でき、竪穴住居跡であることが判明し、西側は沢状の自然地形であることが確認できた。住居部分については、東西方向は既設のトレンチを利用し、南北方向には直交方向に新たに土層観察用のベルトを設定し、覆土を掘り下げた。覆土上位では燃焼面が認められず、層界が乱れる疑似焼土とみられる赤色土が確認されている。

土層：覆土は自然堆積とみられ、上・中位の覆土1~6が黒色~黒褐色土、下位の覆土7が暗褐色土である。下位の土層は住居廃絶後に、掘り上げ土が流入したものと思われ、その上位は腐植による堆積とみられる。

床面・壁：床面は比高差の少ないベンチ構造で、段差部以外はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。南壁は土坑1 (HP-1) によってやや張り出す形状である。

付属遺構：焼土4か所 (HF-1~4)、炭化物集中2か所 (HCC-1・2)、剥片集中3か所 (HFC-1~3)、土坑4基 (HP-1・2・5・6)、柱穴状小ピット20基 (HP-3・4・7~24) が検出された。

焼土1 (HFC-1) は床面近くの覆土7から住居跡のほぼ中央で検出され、さらに掘り下げると床面から、竪穴の長軸に沿って焼土2~4 (HFC-2~4) が並んで検出された (図Ⅲ-3)。また、炭化物集中1 (HCC-1) はHF-3の周辺に、炭化物集中2 (HCC-2) は北側のベンチ構造内部に分布していた。剥片集中 (HFC-1~3) は南西と南東の壁際、北側のベンチ内部で検出されている。

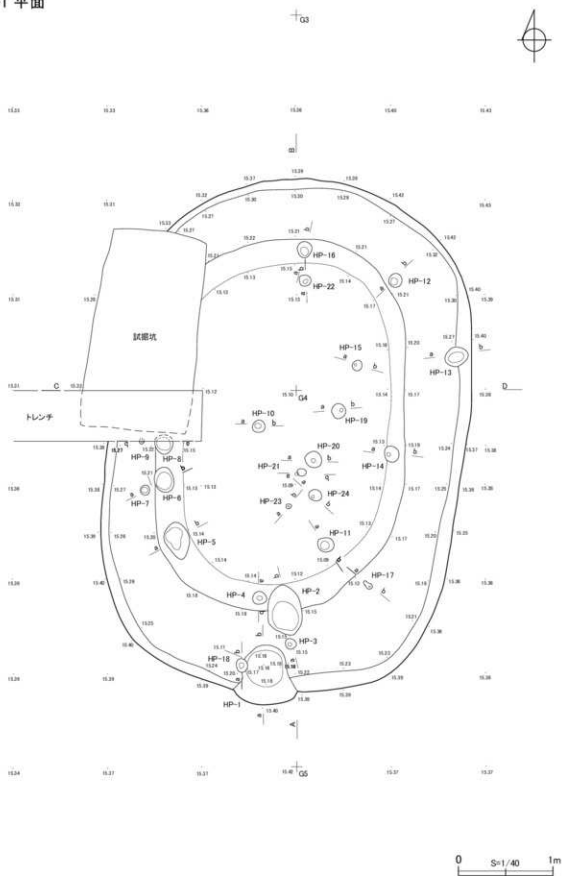
土坑は浅い皿状のもので、南西部のベンチ構造の段差に分布する。柱穴状小ピットは直径10cm以下の細いものと10~20cm程度のものであり、先端は丸いものが多い。細いものはベンチ構造の内側に多く、太いものはベンチ構造の段差から外側に多いが、それらの配列には規則性が見られない。

焼土・炭化物集中については土壌を採集し、フローテーションを行ったが当時の種子は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は3,272点で、土器等が293点、石器等が2,932点、その他、高師小僧3点、炭化物44点である。土器等はⅢ群177点、Ⅲ群b類7点、Ⅳ群108点、焼成粘土塊1点が、石器等は石鏃1点、石槍3点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー1点、二次加工ある剥片3点、剥片2,898点、石核1点、石斧5点、砥石6点、礫13点が出土した。床面からはⅢ群土器18点、石槍2点、剥片225点が出土し、覆土下層にはⅢ群b類が多いことから当住居の形成時期は北筒期と考えられる。また、覆土上層が腐植土で、覆土下位に比べ上位にはⅣ群土器が多いことから、後期前半期余市式期には浅い窪み状で、当時の遺物が廃棄ないし流れ込んだものと思われる。

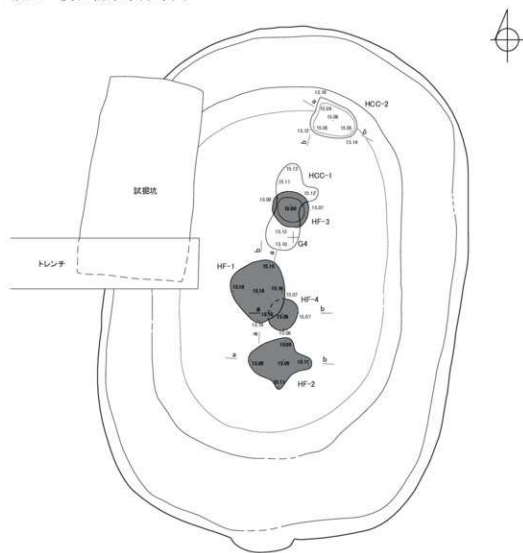
炭化物集中2 (HCC-2) からはⅢ群土器1点、剥片5点が、剥片集中1 (HFC-1、HFCは2mmメッシュの篩使用) からは剥片717点 (黒曜石695点、片岩19点、緑色泥岩2点、砂岩1点)、炭化物3点が、剥片集中2 (HFC-2) からは剥片22点 (黒曜石22点) が、剥片集中3 (HFC-3) からは剥片1,313点 (緑色泥岩1,112点、片岩152点、黒曜石49点)、炭化物36点が、HP-1からはⅢ群土器1点、剥片43点が、HP-2からは剥片1点が、HP-13からは剥片1点が出土している。また、フローテーション資料 (Ⅲ章8、1mmメッシュの篩使用) ではHF-1から剥片60点 (黒曜石42点、緑色泥岩・片岩18点)、

H-1 平面

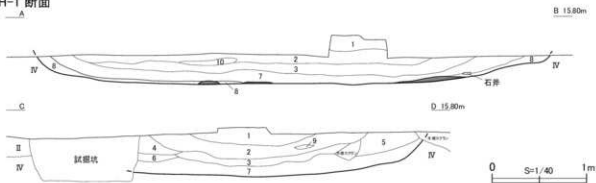


図Ⅲ-2 H-1 (1)

H-1 焼土・炭化物集中分布図



H-1 断面



H-1

1.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Em-a:1% 炭化物1%

2.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Em-a:1%

3.黒色土(10YR1/1) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ層底面

4.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Ⅱ

5.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Em-a:1%

6.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Em-a:1%

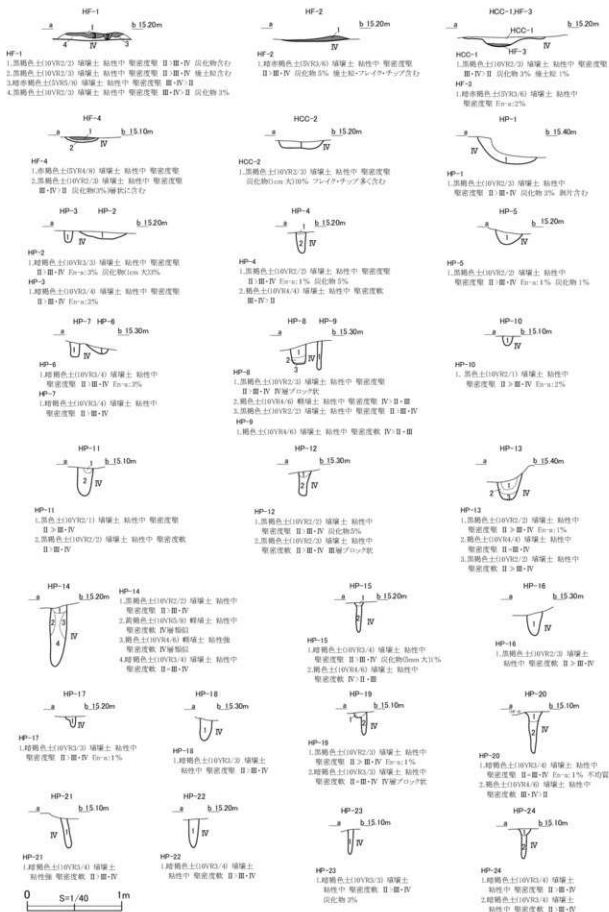
7.暗褐色土(10YR3/4) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Em-a:2%

8.黒褐色土(06YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Ⅱ 炭化物3%

9.黒褐色土(7.5YR2/2) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ Ⅱ

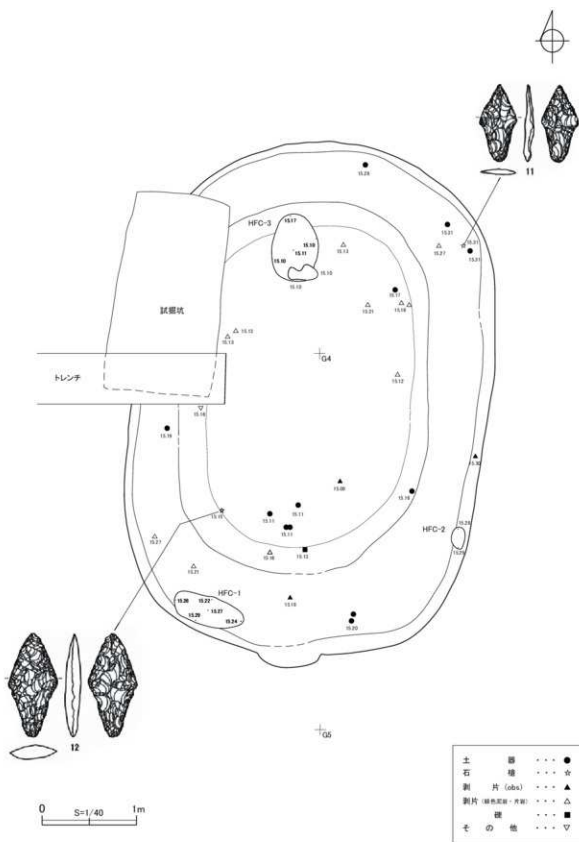
10.赤褐色土(5YR4/8) 埴羅土 粘性中 堅硬度弱 Ⅱ・Ⅳ 層底面土

図Ⅲ-3 H-1 (2)

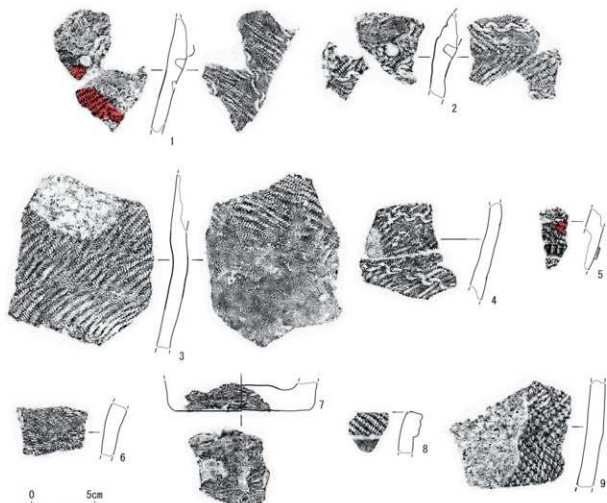


図III-4 H-1 (3)

H-1 床面出土遺物及び剥片集中分布図



図Ⅲ-5 H-1 (4)

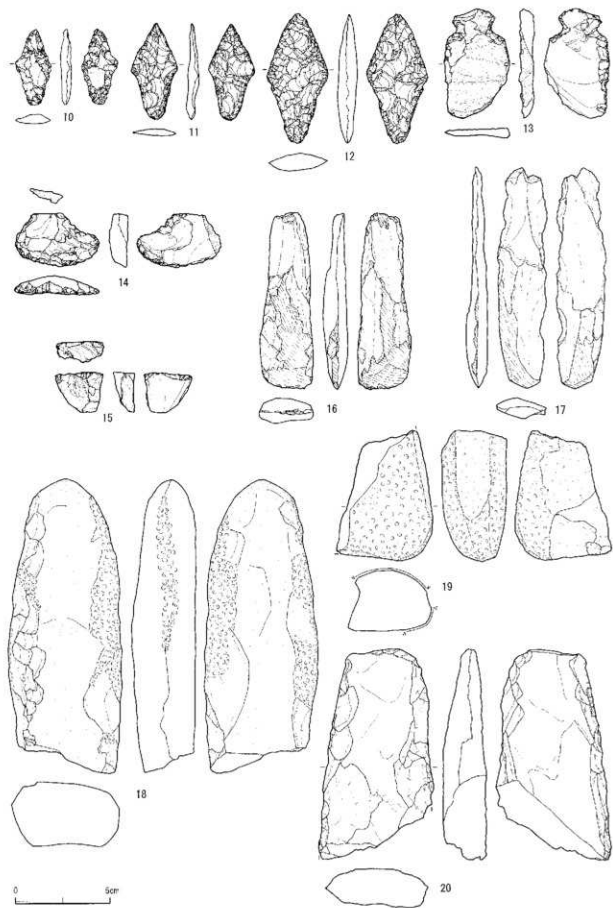


図III-6 H-1出土遺物(1)

HF-2から剥片209点(黒曜石162点、緑色泥岩・片岩47点)、HF-3から剥片160点(黒曜石155点、緑色泥岩・片岩5点)、HF-4から剥片36点(黒曜石25点、緑色泥岩・片岩11点)、HCC-1から剥片273点(黒曜石183点、緑色泥岩・片岩90点)、HCC-2から剥片8,637点(黒曜石4,797点、緑色泥岩・片岩3,840点)が出土した。剥片集中は黒曜石が9割以上を占めるHFC-1・2と緑色泥岩・片岩が9割以上を占めるHFC-3があり、石材による偏差が大きいが、床面近くの焼土や炭化物集中は、それらに比べ石材の偏差が少ない。黒曜石の剥片類は、黒曜石製の黒曜石製作に、緑色泥岩や片岩の剥片類は石斧の加工に関連するものであり、両者に作業対象の偏りが認められる。

掲載遺物：1～7はⅢ群b類土器で、北筒式に相当するもの。1・2は口縁部近くの破片で、断面三角形の肥厚部が剥落している。両者とも内外面に結束第2種縄文が施文されるが、1はLR・LRで、2はLR・RLで羽状である。肥厚部直下には円形刺突が巡り、肥厚部には外傾接合面が確認できる。1の外表面には赤色顔料が付着し、2の口唇部は外反する。3の外表面はLR斜行縄文が施文され、内表面は口縁部のみ同原体を縦に回転している。胴部がややくびれる形状である。4はLR・LR結束第2種縄文が施される。5には幅1cmの貼付帯があり、押し引き文が見られる。6は縄文のみのもの。7は平底の底部で、底角はほぼ直角である。8・9はⅣ群a類土器で、余市式に相当するもの。8は口縁部肥厚帯にRL斜行縄文が施文され、その下位には無文帯がある。9は胴部片でLR斜行縄文とRL斜行縄文が羽状をなす。

10は有茎で菱形に近い石鏡1d類で、尖頭部側縁は内湾する。11・12は石槍で10～12は相似的である。



図Ⅲ-7 H-1出土遺物(2)

13はつまみ付きナイフで、背面は原礫面で覆われ、つまみ部以外は腹面側に部分的な加工が施されるのみである。14はスクレイパーで、角礫面が残り、素材腹面側である正面は二次加工で覆われる。15は扁平な石核で、上面の剥離面打面から正面で剥離が行われる。16~20は石斧。16・17・20は片岩製、18は石質不明、19は玄武岩製である。16・17は同一母岩とみられ、幅2.5cm程の細長い剥片を素材として、刃部を中心とした研磨のみで加工される。18は断面隅丸長方形の棒状の転礫素材で、両縁辺が敲打によって整形される。19は正面と角を中心にして敲打が行われる。20は扁平な素材を利用して縁辺の剥離によって加工される。

黒曜石産地分析の結果（V章2）、11（MS-X12）、12（MS-X11）ともに赤井川と判定された。

11・12は床面出土、1・3・8・9・10・15・19・20は覆土上層（覆土1~6）、2・4~7・13・14・16~18は覆土下層（覆土7・8）出土である。

時期：Ⅲ群b類土器が覆土7・8層から出土していることから縄文時代中期後半北筒式期と考えられる。焼土および炭化物集中の放射性炭素年代測定の結果（V章1）、 $3,960 \pm 30\text{yrBP}$ （MS-D1, H-1 HF-1）、 $3,970 \pm 30\text{yrBP}$ （MS-D2, H-1 HF-2）、 $3,980 \pm 30$ （MS-D3, H-1 HF-4）、 $4,000 \pm 30\text{yrBP}$ （MS-D4, H-1 HCC-1）の年代値が得られている。暦年較正年代（ 2σ ）で概ね2,580~2,460calBCに相当する。（鈴木）

3 土坑

土坑1（P-1）（図Ⅲ-8、図版7）

位置：J11区 規模： $0.60 \times 0.49 / 0.53 \times 0.37 / 0.09\text{m}$ 平面形：楕円形

確認・調査：I層除去後、IV層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はII層の流れ込みとみられる。上部は削平され、坑底付近のみ残存していた。坑底は皿状でなだらかに壁に連続する。遺物は出土しなかった。

時期：覆土中にTa-a軽石が混じらないことから1739年以前と考えられる。

土坑2（P-2）（図Ⅲ-8、図版8）

位置：O6区 規模： $1.97 \times 1.61 / 1.84 \times 1.49 / 0.06\text{m}$ 平面形：楕円形

確認・調査：I層除去後、IV層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はII層の流れ込みとみられる。上部は削平され、坑底付近のみ残存していた。坑底は平坦で壁は斜めに立ち上がる。遺物は覆土から礫1点が出土した。

時期：覆土中にTa-a軽石が混じらないことから1739年以前と考えられる。（鈴木）

土坑3（P-3）（図Ⅲ-8・10、図版8・12）

位置：D7、E7区 規模： $1.84 \times 1.81 / 1.32 \times 1.10 / 0.28\text{m}$ 平面形：不整形円形

確認・調査：包含層調査中、Ⅲ層で黒色土が認められた。南側半分を掘り下げたところ、壁の立ち上がりりと坑底面を確認した。土層断面を記録後、北側も掘り下げ、完掘した。覆土は黒色土主体（覆土第1層）で、覆土第2層はEn-a軽石が混在する層である。坑底の中央は緩やかに窪み、壁は曲線的に立ち上がる。（末光）

遺物は覆土からIV群土器24点、IV群b1類土器4点、V群土器4点、剥片1点、石核1点の計38点が出土した。

掲載遺物：1はIV群a類土器で余市式に相当する。幅1cm程度の貼付帯がある。2・3はIV群b1類

土器で、ウサクマイC式に相当する。平行沈線の上に斜行沈線が施文される。(鈴木)

時期：覆土出土の土器のうち、最も新しい縄文時代晩期と考えられる。(末光)

土坑4 (P-4) (図Ⅲ-8、図版8)

位置：J4区 規模：1.42×1.27/1.05×1.01/0.21m 平面形：円形

確認・調査：包含層調査中、Ⅲ層で黒色土が認められた。東側半分を掘り進めたところ、壁の立ち上がりと坑底面を確認した。土層断面を記録後、反対側部分も掘り下げ、完掘した。覆土は第3層の黒色土層が主体で、覆土上位中央部分の第1層にはⅣ層が混在する。坑底は概して平坦で、壁は曲線的に立ち上がる。(末光)

遺物は、覆土からⅢ群土器2点、Ⅳ群土器6点、Ⅴ群土器6点、剥片3点、礫7点の計24点が出土した。(鈴木)

時期：覆土出土の土器のうち、最も新しい縄文時代晩期と考えられる。(末光)

土坑5 (P-5) (図Ⅲ-8、図版8)

位置：D5・6、E5・6区 規模：1.93×1.58/1.45×1.16/0.33m 平面形：楕円形

確認・調査：包含層調査中、Ⅲ層で黒色土が認められた。南側部分を掘り下げたところ、壁の立ち上がりと坑底面を確認した。土層断面を記録後、残り部分を掘り下げ、完掘した。覆土は黒色土主体(覆土第1層)で、覆土第2・3層は土層断面で中位付近にみられ、その形状から自然堆積と判断される。坑底は若干凹凸があるが概して平坦で、壁の立ち上がりは東側が曲線的、西側は直線的である。(末光)

遺物は、覆土からⅢ群土器3点、Ⅳ群土器12点、Ⅳ群b1類土器2点、Ⅴ群土器1点、剥片3点、礫5点の計26点が出土した。(鈴木)

時期：覆土出土の土器のうち、最も新しい縄文時代晩期と考えられる。(末光)

土坑6 (P-6) (図Ⅲ-8・10、図版9・12)

位置：L5、M5区 規模：1.39×1.17/1.11×0.97/0.08m 平面形：楕円形

確認・調査：包含層調査完了後、Ⅳ層上面で黒色土が認められた。南東側部分を掘り進めたところ、壁の立ち上がりと坑底面を確認した。土層断面を記録後、残りも掘り下げ、完掘した。主体的な覆土は第1層の黒色土層で、En-a軽石をわずかに含む。坑底は凹凸があり中央が若干低く、壁は曲線的に立ち上がる。(末光)

遺物は、覆土からⅣ群土器7点、剥片1点、石核1点、礫2点の計11点が出土した。

掲載遺物：4は石核である。黒曜石製で、左右側面には横方向の剥離が、正面・裏面の小口面には縦方向の剥離面が残る。(鈴木)

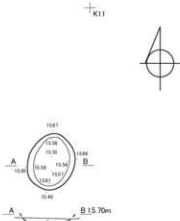
時期：覆土出土土器より、縄文時代後期と考えられる。(末光)

土坑7 (P-7) (図Ⅲ-9・10、図版9・12)

位置：H5区 規模：2.54×2.13/2.19×(1.69)/0.22m 平面形：楕円形

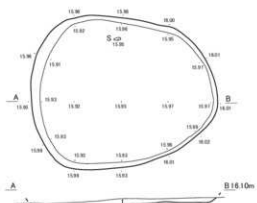
確認・調査：包含層調査終了後、Ⅳ層上面で黒色土とこれを切る範囲確認調査の試掘坑がみられた。試掘坑を掘り下げたところ、これの壁に画然とした層界で黒色土とⅣ層がみられ遺構と判断した。遺構はこれにより南東側部分が破壊されている。南側部分を掘り進め、南西側壁際付近の坑底面近くで剥片集中(PFC-1 0.60×0.38m 覆土第2層)が認められた。これらを記録した後、北側部分を

P-1



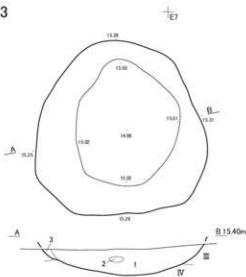
P-1
1.黒褐色土(0YR3/2) 礫層土 粘性弱 剪断度弱 Ⅱ>Ⅲ>Ⅳ

P-2



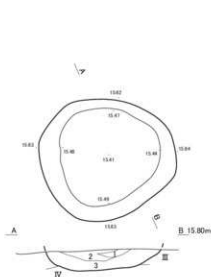
P-2
1.黒色土(0YR1.7/1) 礫層土 粘性中 剪断度弱 Ⅱ=Ⅲ=Ⅳ

P-3



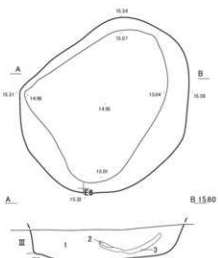
P-3
1.黒色土(0YR1.7/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱
2.黒褐色土(0YR3/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱~弱 Ⅱ=Ⅲ(平均2mm)最大50mm、風化>原
円錐:5%
3.暗褐色土(0YR3/3) 礫層土 粘性強 剪断度弱

P-4



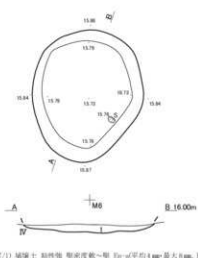
P-4
1.黒色土(0YR2/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱 Ⅳ層ブロック状(5~10%)
2.黒色土(0YR2/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱
3.黒色土(0YR1.7/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱

P-5

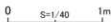


P-5
1.暗褐色土(0YR3/2) 礫層土 粘性強 剪断度弱 Ⅳ層ブロック状
2.黒褐色土(0YR3/2) 礫層土 粘性強 剪断度弱 Ⅳ層ブロック状
3.黒色土(0YR1.7/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱

P-6



P-6
1.黒色土(0YR1.7/1) 礫層土 粘性強 剪断度弱~弱 Ⅱ=Ⅲ(平均4mm)最大8mm、風化>原
円錐:5%



図III-8 土坑(1) P-1~6

剥離や細部調整の際に剥離されたものである。

掲載遺物：5はⅢ群b類土器で、結束第2種縄文が施文される。6・7は土坑内で検出された剥片集中1（PFC-1）出土の楔形石器で両者は接合する。両極剥離によって分割された後に両者とも剥離が行われる。黒曜石産地分析の結果（V章2）、6（MS-X23）、7（MS-X24）は赤井川と判定された。

（鈴木）

時期：覆土出土の土器のうち、最も新しい縄文時代晩期と考えられる。

（末光）

土坑8（P-8）（図Ⅲ-9、図版9）

位置：L4区 **規模：**0.82×0.73/0.61×0.59/0.26m **平面形：**円形

確認・調査：Ⅳ層で黒色土の落ち込みを確認した。半載し、調査を行った。覆土はⅡ層と類似する黒色土が主体で、自然堆積とみられる。坑底は平坦で、壁は直角に近い角度で立ち上がる。遺物は、覆土からⅢ群土器3点、Ⅴ群土器2点の計5点が出土した。

時期：出土遺物・土坑の形状から縄文時代晩期の可能性がある。

土坑9（P-9）（図Ⅲ-9、図版9）

位置：F2・3区 **規模：**0.70×0.63/0.43×0.39/0.43m **平面形：**円形

確認・調査：Ⅳ層で黒色土の落ち込みを確認した。中央やや南側に敷設されていた水道管を外すように半載し、調査を行った。覆土は下部にⅡ層とⅢ・Ⅳ層の混じった土が上位には沢状地形を埋める堆積物と同様な土が堆積している。坑底は平坦で、壁は内傾気味に立ち上がり、坑口部は外反する。

時期：H-1周辺の沢状地形を埋める堆積物があることから縄文時代中期後半前後と考えられる。

（鈴木）

4 焼土

焼土1（F-1）（図Ⅲ-11、図版10）

位置：P6区 **規模：**0.62×（0.57）/0.09m

確認・調査：I層除去後、Ⅳ層上面で検出した。耕作によって削平・攪乱を受けているがほぼ円形に近い形状が推定される。被熱層は中央部が赤褐色で、周囲へ漸遷する。

時期：不明。

焼土2（F-2）（図Ⅲ-11、図版10）

位置：F3区 **規模：**0.52×0.32/0.05m

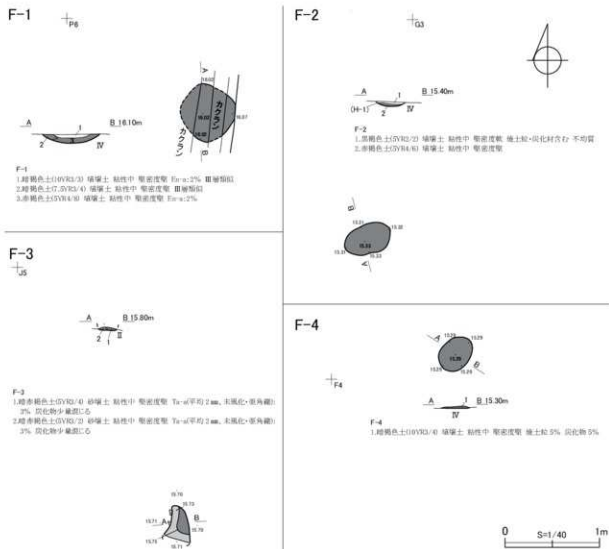
確認・調査：H-1周辺の精査中、Ⅱ層下位で検出した。平面形は楕円形で、ほぼ水平に分布する。H-1の北西部にわずかに重複し、その覆土の上位に分布する。上部には炭化物・焼土粒を含む焼成面が確認できる。

時期：H-1の上位にあること、F-4に類似することから縄文時代後期前葉とみられる。（鈴木）

焼土3（F-3）（図Ⅲ-11、図版10）

位置：J5区 **規模：**0.36×0.27/0.03m

確認・調査：包含層調査中、Ⅱ層上位で確認した。平面は不整形で、南側が一部削平されている。二つの層に分けられ、1層は炭化物を含み、2層は黒色土が混じり、ともにTa-aの混入が認められる。



図Ⅲ-11 焼土F-1～4

これは耕作による影響と思われる。また、焼土近くから出土した土器は、被熱により赤色の色調を帯びており、継続的に使用された炉跡と考えられる。

遺物は、Ⅲ群土器11点、Ⅳ群土器6点の計17点が出土した。

時期：Ⅱ層の上位に位置することから、縄文時代の後半期と推測されるが、出土土器と耕作によるⅡ層上位部分の削平から考えると、縄文時代中期・後期の可能性もある。(未光)

焼土4 (F-4) (図Ⅲ-11、図版10)

位置：F3区 **規模：**0.41×0.31/0.03m

確認・調査：H-1周辺の精査中、H-1西側のⅢ層上面で検出した。平面形は楕円形で、ほぼ水平に分布する。焼成面は確認できなかったが、F-2同様Ⅱ層下部であったと推定される。

時期：放射性炭素年代測定の結果(V章1)、3,770±30yrBP (MS-D4, F-4)の年代値が得られている。暦年較正年代(2σ)で概ね2,290~2,140calBCに相当する。この年代値はこれまでの年代測定結果と照合するとタポコプ式以前の余市式期に相当し、それらがH-1覆土上層や焼土周辺から出土している状況と整合的である。(鈴木)

5 土器集中

土器集中1 (PC-1) (図III-12・13、図版13)

位置：C2区 規模：1.65×0.50m

確認・調査：包含層調査中、風倒木痕内のII層で土器のまとまりがみられた。比較的大きめの破片が散在する状況であった。記録した後、下位の遺構の有無を確認するためトレンチ調査を行ったが、認められなかった。近くには集石(S-1)がある。(末光)

遺物は、IV群土器18点、V群土器1点の計19点が出土した。

掲載遺物：1はIV群a類土器で余市式に相当する。口縁部肥厚帯のほかタガ状の貼付帯が5条ある。地文は口縁部下部の無文帯を挟んで2段ずつRL・LR斜行縄文が順に施文され、羽状を呈する。貼付帯は口縁部下の2条を除くとほぼ一定間隔に配され、それらは羽状縄文の変換点に位置する。口縁部肥厚帯と最上部の貼付帯はLR斜行縄文、それ以外の貼付帯はRL斜行縄文が施文される。胴部は膨らみ、胴上部から口縁部にかけてほぼ直立する。

時期：縄文時代後期前葉が主体である。(鈴木)

土器集中2 (PC-2) (図III-12・13、図版10・13)

位置：E6区 規模：0.25×0.22m

確認・調査：包含層調査中、II層で直径約20cmの円形の窪みと、そこに土器が集中する状況がみられた(上部)。これを記録し取り上げたところ、さらにIII層上面でも破片が認められた(下部)。すべての遺物を記録した後、遺構の存在を予想しトレンチを設け掘り下げたが、認められなかった。

(末光)

遺物は、IV群b2類土器3点、V群土器61点、焼成粘土塊3点、剥片1点、礫1点の計69点が出土した。

掲載遺物：2はIV群b1類土器で、ウサクマイC式に相当する。頸部に屈曲するくびれがあり、無文帯を挟んで口縁部に6条の平行沈線が描かれる。口縁部と胴部はくびれ部で内傾接合する。3～7はV群a類土器である。3・4は同一個体で、口縁部に無文帯があり、RL斜行縄文の上部に左から捲れのある爪形文が2段施文される。5は口縁部無文帯があり、LR斜行縄文の上部に左から捲れのある爪形文が2段施文される。6は浅鉢の口縁部で、無文地に上下が平行沈線で区画された中に括弧文が描かれ、その間に5条の平行沈線が施文される。胴部にはRL斜行縄文が施文される。7は浅鉢の底部で、低い台状の平底である。外面・底面にはRL斜行縄文が施文される。

時期：縄文時代晩期前葉が主体である。(鈴木)

土器集中3 (PC-3) (図III-12・13、図版10・13)

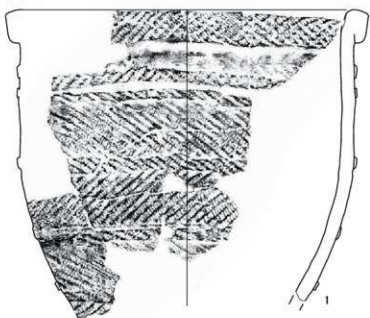
位置：H6区 規模：1.16×1.05m

確認・調査：包含層調査中、II層で土器の破片と礫石器がみられた。土器の出土範囲を四つのまとまりに分けて記録した後、下位の遺構の有無を確認するためトレンチ調査を行ったが、認められなかった。また、2番とした範囲の下位では、剥片がややまとまって出土し、さらに近くには剥片集中(FC-3)がある。(末光)

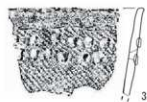
遺物は、IV群土器14点、IV群b1類土器3点、V群土器88点、剥片1点、砥石1点、礫1点の計108点が出土した。

掲載遺物：8はIV群b1類土器で、ウサクマイC式に相当する。胴部が膨らみ、頸部がくびれて口縁部が外傾する器形の胴部片で、ナデ調整後、回転方向を変えながら縄文帯が施文され、その輪帯とそ

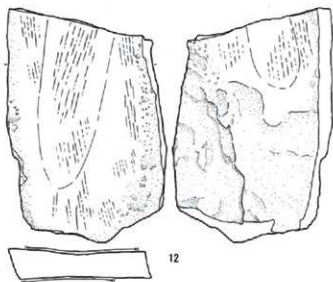
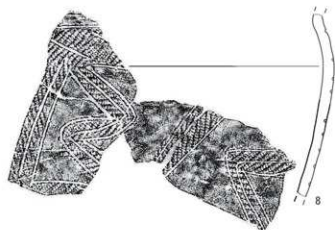
PC-1



PC-2



PC-3



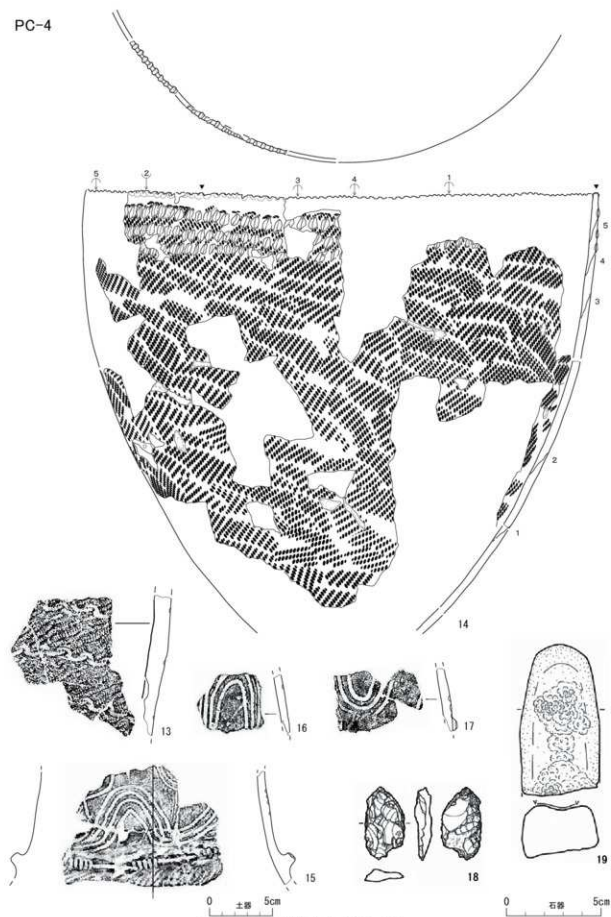
20000



0 5cm

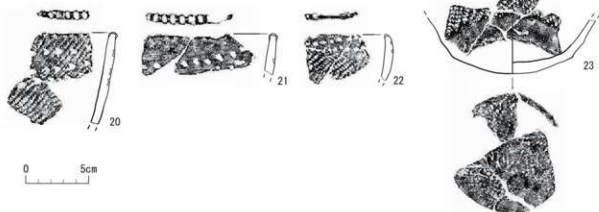
図Ⅲ-13 土器集中出土遺物 (1)

PC-4



図Ⅲ-14 土器集中出土遺物 (2)

PC-5



図III-15 土器集中出土遺物(3)

の中心に沈線が描かれる。無文部は「コ」形が対向して入り組む。9～11はV群a類土器で、9・10は口縁部に無文帯があり、9の口唇は棒状工具によるキザミが施され、10の口縁部の無文帯は胴部に比べ厚さが薄い。11は底部片で、外面・底面にRL斜行縄文が施文され、底角はやや張り出す。

12(分布図の6)は扁平で大型の砥石で、両面に長軸方向に4・5cm幅のやや窪んだ擦り面がある。時期：縄文時代晩期前葉が主体である。(鈴木)

土器集中4(PC-4)(図III-12・14、図版11・13・14)

位置：F6区 規模：0.81×0.46m

確認・調査：包含層調査中、II層で土器の破片がまとまって出土した。これを記録した後、下位の遺構の有無を確認するためトレンチ調査を行ったが、認められなかった。土器は異なる時期のものが混在していた。(末光)

遺物は、III群土器28点、IV群土器36点、IV群b1類土器1点、V群土器138点、両面調整石器1点、剥片4点、たたき石1点、礫3点の計212点が出土した。

掲載遺物：13はIII群a類土器の胴部片で、LR・LR結束第2種縄文が施文される。14～17はV群a類土器。14は鉢で、口縁部に無文帯があり、胴部にはLR斜行縄文が施文される。無文帯の下部には左からの(親指による)爪形文が3列、口唇部には棒状工具によるキザミが施される。口径に比して器高はやや低い。接合面は5か所確認でき、全て内傾接合である。15～17は同一個体で、頸部が内傾する壺の頸部とみられる。連続波状文が上下交互に描かれ、その下部は貼付帯によって区画され、貼付帯上には沈線とキザミが交互に施される。胴部にはLR斜行縄文が施文される。16の下部には外傾接合面が残る。

18は両面調整石器。黒曜石製で角礫面が残り、やや粗い剥離によって両面が加工される。19はたたき石。角柱状の転礫素材で正面上部と下部折れ面付近の2か所に敲打による窪みがある。

時期：縄文時代晩期前葉が主体である。(鈴木)

土器集中5(PC-5)(図III-12・15、図版14)

位置：B4区 規模：1.14×0.75m

確認・調査：包含層調査中、II層で土器破片がまとまっている状況がみられた。これを記録して取り上げた後、下位の遺構の有無を確認するためトレンチ調査を行ったが、認められなかった。(末光)

遺物は、V群土器79点、剥片2点の計81点が出土した。

掲載遺物：20～22はV群a類土器。20・22は右から、21は右下方からの刺突列が、20は縄文地、21・22は無文地の口縁部に巡り、口唇部には棒状工具によるキザミが施される。23はV群で類型は不明。浅鉢の底部で、丸底で、無文帯があり、その上下は稜状である。外面・底部にはLR斜行縄文が施される。
時期：縄文時代晩期前葉である。(鈴木)

6 剥片集中

剥片集中1 (FC-1) (図Ⅲ-16)

位置：I4、J4区 規模：0.37×0.35m

確認・調査：包含層調査中、II層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。微細なものが多く、土ごと取り上げ、水洗選別を行った。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。石器製作が行われたと考えられる。(末光)

遺物は、二次加工ある剥片1点、剥片329点、炭化物6点の計336点が出土した。剥片は全て黒曜石製である。二次加工ある剥片は素材打面に角礫面の残る長さ5.6cmのやや大型のもので、剥片は全て1cm以下の砕片である。ほとんどが小型剥片石器の細かい二次加工によって剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：周辺の出土土器から縄文時代中期～晩期とみられる。(末光)

剥片集中2 (FC-2) (図Ⅲ-16)

位置：I4区 規模：0.59×0.39m

確認・調査：包含層調査中、III層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。二次調整で生じる小さな剥片が少ないことや、同一の石材の剥片であることが特徴である。(末光)

遺物は、剥片57点が出土した。剥片は黒曜石56点、頁岩1点である。頁岩の剥片は長さ4.5cm、黒曜石は1点を除き、茶色のまだらないわゆる「花十勝」の同一母岩で、道東産の黒曜石と思われる。剥片の一部には転礫面が残る。大きさは3cm以下であるが、1cm以下は少ない。小型の原石から剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：周辺の出土土器からは縄文時代中期～晩期とみられ、層位も考慮するとこれらのうちの古い時期である中期と考えられる。(末光)

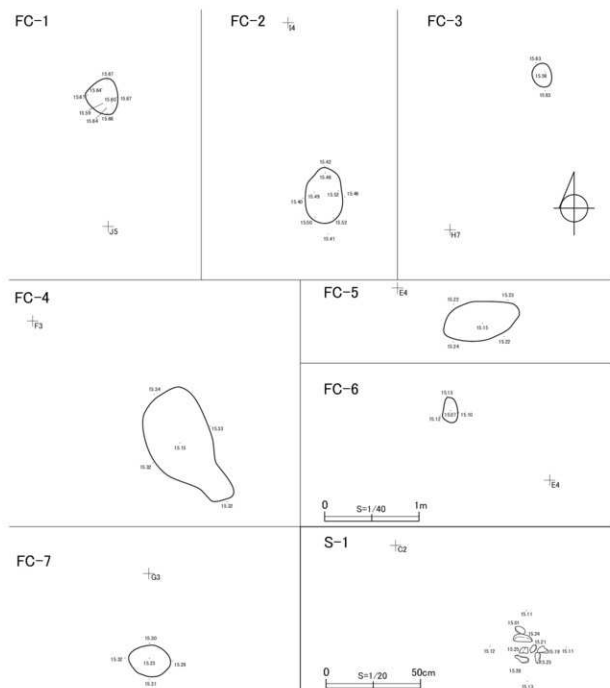
剥片集中3 (FC-3) (図Ⅲ-16)

位置：H6区 規模：0.25×0.21m

確認・調査：包含層調査中、II層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。微細なものが多く、土ごと取り上げ、水洗選別を行った。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。縄文時代晩期の土器集中(PC-3)が本遺構のすぐ西側に位置し、関連があると考えられる。(末光)

遺物は、V群土器10点、スクレイパー1点、剥片574点の計585点が出土した。剥片は黒曜石567点、珩岩5点、泥岩1点、緑色泥岩1点である。スクレイパーは長さ5.4cmで内湾した側縁に加工が施される。黒曜石は2cm以下の砕片がほとんどで、珩岩・泥岩は2cm程度の剥片である。小型の石核から剥離されたか小型剥片石器の二次加工で剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：出土遺物と土器集中(PC-3)の時期から、縄文時代晩期前葉とみられる。(末光)



図Ⅲ-16 剥片集中FC-1～7、集石S-1

剥片集中4 (FC-4) (図Ⅲ-16)

位置：F3区 規模：1.31×0.69m

確認・調査：包含層調査中、Ⅱ層で黒曜石の剥片がまとめて出土した。微細なものが多く、土ごと取り上げ、水洗選別を行った。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。遺物はⅢ層からも出土した。(末光)

遺物は、Ⅲ群土器7点、Ⅳ群土器7点、Ⅴ群土器1点、剥片6,861点、炭化物114点の計6,990点が出土した。剥片は黒曜石6,855点、緑色泥岩4点、メノウ2点である。黒曜石・緑色泥岩ともにほとん

どが1cm以下の破片である。小型剥片石器の二次加工で剥離されたものと思われるが、他の剥片集中に比べ量が多く、剥離頻度が高い。(鈴木)

時期：周辺の出土土器からは縄文時代中期～晩期とみられ、層位も考慮するとこれらのうちの古い時期である中期と考えられる。(末光)

剥片集中5 (FC-5) (図Ⅲ-16)

位置：E4区 規模：0.83×0.42m

確認・調査：包含層調査中、Ⅱ層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。微細なものが多く、土ごと取り上げ、水洗選別を行った。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。石器製作が行われたと考えられる。(末光)

遺物は、Ⅲ群土器2点、剥片1,232点、炭化物16点の計1,250点が出土した。剥片は全て黒曜石である。1cm以下のものがほとんどで、小型剥片石器の二次加工で剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：周辺の遺構と出土遺物から縄文時代中期～後期とみられる。(末光)

剥片集中6 (FC-6) (図Ⅲ-16)

位置：D3区 規模：0.27×0.16m

確認・調査：包含層調査中、Ⅲ層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その範囲を記録した。(末光)

遺物は、Ⅲ群土器1点、二次加工ある剥片1点、剥片75点、炭化物2点の計79点が出土した。剥片は全て黒曜石である。二次加工ある剥片は長さ2.4cmの破損品で、剥片は茶色の「花十勝」と黒色で細かい球顆が混じるものが概半数ずつある。それらはほぼ1cm以下で、小型の剥片石器の二次加工で剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：周辺の出土土器からは縄文時代中期～晩期とみられ、層位も考慮するとこれらのうちの古い時期である中期と考えられる。(末光)

剥片集中7 (FC-7) (図Ⅲ-16)

位置：F3、G3区 規模：0.45×0.33m

確認・調査：包含層調査中、Ⅱ層で黒曜石の剥片がまとまって出土した。微細なものが多く、土ごと取り上げ、水洗選別を行った。遺物が出土しなくなるまで掘り進め、その形状を記録した。石器製作が行われた場所と考えられる。(末光)

遺物は、Ⅴ群土器2点、剥片279点、炭化物3点の計284点が出土した。剥片は黒曜石274点、緑色泥岩3点、片岩2点である。各石材ともほぼ1cm以下で、小型剥片石器の二次加工で剥離されたものと思われる。(鈴木)

時期：周辺の遺構と出土遺物から縄文時代中期～晩期とみられる。(末光)

7 集石

集石1 (S-1) (図Ⅲ-16、図版10)

位置：C2区 規模：0.47×0.30m

確認・調査：Ⅲ層の包含層調査中、礫が数点まとまって出土した。人為的に集められたと判断される。近くには、縄文時代後期の土器集中1 (PC-1) がある。(末光)

遺物は蹠7点が出土した。全て砂岩製。長さは12cm前後、幅5cm前後の蹠で、大きさ・形状ともに類似する。(鈴木)

時期：周辺の遺物からは縄文時代中期～晩期とみられ、さらに土器集中1 (PC-1)の時期から、縄文時代後期の可能性がある。(末光)

8 フローテーション法によって回収された微細遺物

焼土 (F・HF)、炭化物集中 (HCC) について、炭化種子等の有機質遺物の回収を目的としてフローテーション法による微細遺物の回収を行った。17サンプルを採取し、採集した土壌の総量は52.4ℓ、39.1kgである。その結果、自然遺物は炭化材が126.21g回収され、炭化種子は得られなかった。人工遺物は土器の小破片が計200点、石器・微細な剥片が9,380点検出された。特にH-1炭化物集中2 (H-1 HCC-2)には多くの炭化材 (54.11g)のほか、黒曜石微細剥片4,797点、緑色泥岩・片岩微細剥片3,840点が含まれていた。(鈴木)

表III-1 フローテーション結果

試料番号	遺構	層位	体積 (ℓ)	総陸重量 (kg)	浮遊物 (g)	残渣 (g)	土器 (g)	石器 (g)	剥片		縄 (g)	ペンガラ? (g)	炭化材 (g)	種子
									黒曜石 (g)	緑色泥岩・片岩 (g)				
1	H-1 HF-1	焼土	4.2	3.4	29.0	71.8	-	-	0.03 (18.0点)	0.43 (2.0点)	-	-	2.04	-
2	H-1 HF-1	焼土	4.7	3.8	6.8	46.2	-	-	0.49 (20.0点)	0.16 (9.0点)	-	-	2.00	-
3	H-1 HF-1	焼土	3.7	2.8	4.5	62.5	-	-	0.01 (4.0点)	0.05 (7.0点)	26.15 (3.0点)	-	0.59	不明 (2点) 未炭化
4	H-1 HF-2	焼土	3.3	2.4	3.4	46.2	-	-	3.22 (90.0点)	-	-	0.21	1.92	アガサ属 (1点) 未炭化
5	H-1 HF-2	焼土	2.7	1.8	4.2	26.2	-	-	0.01 (6.0点)	0.47 (7.0点)	-	0.01	1.17	-
6	H-1 HF-2	焼土	2.9	2.2	10.9	53.0	15.06 (24.0点)	4.74 (1点、スタレイバー・黒曜石)	1.46 (66.0点)	5.03 (40.0点)	-	0.26	5.76	-
7	H-1 HF-3	焼土	0.5	0.4	1.1	5.9	-	-	0.54 (45.0点)	0.39 (5.0点)	-	-	0.63	-
8	H-1 HF-3	焼土	0.8	0.5	1.3	12.1	0.33 (2.0点)	-	0.39 (110.0点)	-	-	-	0.83	-
9	H-1 HF-4	焼土	3.5	2.2	22.8	14.2	-	-	0.11 (17.0点)	0.21 (5.0点)	-	-	12.49	-
10	H-1 HF-4	焼土	2.2	1.5	28.9	28.2	2.15 (5.0点)	-	0.01 (8.0点)	0.13 (6.0点)	-	-	23.00	-
11	H-1 HCC-1	炭化物集中	4.1	3.2	12.9	58.9	3.02 (16.0点)	-	0.30 (27.0点)	0.39 (56.0点)	-	-	9.76	-
12	H-1 HCC-1	炭化物集中	4.9	4.1	12.9	99.1	0.19 (1.0点)	-	3.90 (156.0点)	0.26 (34.0点)	13.76 (5.0点)	-	9.08	-
13	H-1 HCC-2	炭化物集中	3.2	2.3	40.4	113.2	19.07 (69.0点)	0.63 (1点、石籬片類・黒曜石)	22.17 (1,977.0点)	19.17 (1,153.0点)	-	0.46	21.56	-
14	H-1 HCC-2	炭化物集中	3.2	2.2	45.3	138.2	30.41 (62.0点)	-	34.24 (2,027.0点)	23.85 (1,965.0点)	-	0.15	22.11	-
15	H-1 HCC-2	炭化物集中	2.7	2.0	21.2	62.7	13.93 (14.0点)	-	8.67 (793.0点)	8.86 (722.0点)	-	0.26	10.44	-
16	F-2	焼土	2.9	2.1	4.2	38.5	5.27 (7.0点)	-	-	-	-	-	0.21	ブドウ (1点) 未炭化
17	F-4	焼土	2.9	2.2	4.7	16.8	-	-	0.01 (3.0点)	-	-	-	2.62	-
総計			32.4	36.1	254.6	893.7	89.43 (200.0点)	5.37 (2.0点)	75.56 (5,367.0点)	59.40 (4,011.0点)	39.91 (8.0点)	1.35	136.21	

表Ⅲ-2 遺構一覧

遺構名	位置(発掘区)	検出層位	平面形	検出面 (m)		底面 (m)		深さ (m)	長軸方向	時期
				長軸	短軸	長軸	短軸			
H-1	F3・4, G3・4	Ⅱ層中位	隅丸長方形	5.57	3.74	5.26	3.53	0.29	N-7°-E	縄文中期北筒式期
P-1	J11	Ⅳ	楕円形	0.60	0.49	0.53	0.37	0.09	N-11°-E	1739年以前
P-2	O6	Ⅳ	楕円形	1.97	1.61	1.84	1.49	0.06	N-89°-W	1739年以前
P-3	D7, E7	Ⅲ	不整円形	1.84	1.81	1.32	1.10	0.28	N-1°-E	縄文晩期
P-4	J4	Ⅲ	円形	1.42	1.27	1.05	1.01	0.21	N-82°-E	縄文晩期
P-5	D5・6, E5・6	Ⅲ	楕円形	1.93	1.58	1.45	1.16	0.33	N-51°-E	縄文晩期
P-6	L5, M5	Ⅳ層上面	楕円形	1.39	1.17	1.11	0.97	0.08	N-20°-E	縄文後期
P-7	H5	Ⅳ層上面	楕円形	2.54	2.13	2.19	(1.69)	0.22	N-63°-E	縄文晩期
P-8	L4	Ⅳ層上面	円形	0.82	0.73	0.61	0.59	0.26	N-91°-E	縄文晩期
P-9	F2・3	Ⅳ層上面	円形	0.70	0.63	0.43	0.39	0.43	N-135°-E	縄文中期後半以前
F-1	P6	Ⅳ層上面	円形	0.62	(0.57)	-	-	0.09	-	不明
F-2	F3	Ⅱ層下位	不整楕円形	0.52	0.32	-	-	0.05	-	縄文後期前葉
F-3	J5	Ⅱ層上位	楕円形	0.36	0.27	-	-	0.03	-	縄文後半期
F-4	F3	Ⅲ層上面	楕円形	0.41	0.31	-	-	0.03	-	縄文後期余市式期
PC-1	C2	Ⅱ	-	1.65	0.50	-	-	-	-	縄文後期余市式主体
PC-2	E6	Ⅱ～Ⅲ	-	0.25	0.22	-	-	-	-	縄文晩期前葉主体
PC-3	H6	Ⅱ	-	1.16	1.05	-	-	-	-	縄文晩期前葉主体
PC-4	F6	Ⅱ	-	0.81	0.46	-	-	-	-	縄文晩期前葉主体
PC-5	B4	Ⅱ	-	1.14	0.75	-	-	-	-	縄文晩期前葉
FC-1	I4, J4	Ⅱ層	-	0.37	0.35	-	-	-	-	縄文中～晩期
FC-2	I4	Ⅲ	-	0.59	0.39	-	-	-	-	縄文中期
FC-3	H6	Ⅱ	-	0.25	0.21	-	-	-	-	縄文晩期前葉
FC-4	F3	Ⅱ～Ⅲ	-	1.31	0.69	-	-	-	-	縄文中期
FC-5	E4	Ⅱ	-	0.83	0.42	-	-	-	-	縄文中～後期
FC-6	D3	Ⅲ	-	0.27	0.16	-	-	-	-	縄文中期
FC-7	F3, G3	Ⅱ	-	0.45	0.33	-	-	-	-	縄文中～晩期
S-1	C2	Ⅲ	-	0.47	0.30	-	-	-	-	縄文中～晩期

表Ⅲ-3 遺構出土遺物一覧

種別	遺物名・分類	H-1		H-1・HCC-2	H-1・HFC-1	H-1・HFC-2	H-1・HFC-3	H-1・HP-1	H-1・HP-2	H-1・HP-13	計	P-2	P-3	P-4		
		床面	覆土上	覆土下	覆土	覆土8	床面	覆土	覆土	覆土		覆土	覆土	覆土	覆土	
土器ほか	土器	Ⅲ	18	62	84							177				2
		Ⅲb	3	4												
		Ⅳ	107	1								108		24	6	
		Ⅳb1												4		
		Ⅳb2												4	6	
		Ⅴ														
	検出粘土塊		1								1					
土器ほか小計		18	173	80	1		11	1			293		32	14		
石器ほか	石鏃	Ⅰ1d														
		石鏃	2	1								3				
		両面調整石器				1						1				
		つまみ付きナイフ				1						1				
		スクレイパー				1						1				
		撥ね石器														
		一次加工ある割片		2	1							3				
		割片	225	241	330	5	717	22	1,313	43	1	2,898		1	3	
		石核		1								1			1	
		石斧		2	3							5				
石石		4	2							6						
	たたき石															
	鏃		1	10	2						13	1	4	7		
石器ほか小計		228	262	340	5	717	22	1,313	43	1	2,932	1	6	10		
その他	高麗小冊		3								3					
	灰化物		5				3				36				44	
その他小計		8					3				36				47	
総計		254	435	420	6	720	22	1,360	44	1	3,274	1	38	24		

種別	遺物名・分類	P-5	P-6	P-7	P-7・PFC-1	P-7	P-8	F-3	PC-1	PC-2	PC-3			PC-4	PC-5	
		覆土	覆土	覆土	覆土(B)	計	覆土	II	II	II	II	II	計			
土器ほか	土器	III	3		2		3	11							28	
		III b														
		IV	12	7	5		5		6	18			14	14	36	
		IV b1	2									3	3	3	1	
		IV b2														
	V	1		1		1	2		1	61	88		88	138	79	
土器ほか小計	集成粘土塊									3						
土器ほか小計		18	7	8			5	17	19	67	105		105	203	79	
石器ほか	石器	III d														
		石鏃														
		画面調整石器													1	
		つまみ付きナイフ														
		スクレイパー														
		楔形石器				7	7									
		二次加工ある割片														
		割片	3	1	85	359	444				1	1		1	4	2
		石核		1												
		石斧												1	1	1
		砥石														
たなき石														1		
鏃	5	2	10		10				1	1		1	3	2		
石器ほか小計		8	4	95	366	461			2	2	1	3	9	2		
その他	高脚小冊					5										
	炭化物					5										
木の葉小計					5											
木の葉小計					5											
総計		26	11	103	371	474	5	17	19	69	107	1	108	212	81	

種別	遺物名・分類	FC-1	FC-2	FC-3	FC-4		FC-5	FC-6	FC-7	S-1			総計		
		II	II	II	II	計	II	II	II	II	II	計			
土器ほか	土器	III				6	1	7	2	1				236	
		III b												243	
		IV				3	4	7						10	
		IV b1												3	
		IV b2												3	
	V			10		1	1		2				394		
土器ほか小計	集成粘土塊												4		
土器ほか小計				10	9	6	15	2	1	2			897		
石器ほか	石器	III d												1	
		石鏃												3	
		画面調整石器												1	
		つまみ付きナイフ												1	
		スクレイパー				1								2	
		楔形石器												7	
		二次加工ある割片												5	
		割片	1								1				7
		石核	329	57	574	6,368	493	6,861	1,232	75	279				12,765
		石斧													3
		石斧													5
砥石													7		
たなき石													1		
鏃											6	1	7		
石器ほか小計		320	57	575	6,368	493	6,861	1,232	76	279	6	1	7	12,855	
その他	高脚小冊													3	
	炭化物					56	58	114	16	3	3			190	
木の葉小計					56	58	114	16	3	3			193		
木の葉小計					6									3	
総計		336	57	585	6,433	557	6,990	1,250	79	284	6	1	7	13,945	

*HFCとFCに関しては2mmメッシュの篩を使用。

表III-4 遺構出土掘載土器一覧

棟号	図取	番号	遺構名・調査区	層位	遺物	点数	分類	器形	部位	文様ほか	
III-6	12-1	1	H-1	覆土上	II b	2	II b	深鉢	口縁	①結束第2種 (LR・不明) ②結束第2種 (LR・LR) (縦回転) ③円形刺突30赤彩	
III-6	12-1	2	H-1	覆土下	II b	2	II b	深鉢	口縁	①結束第2種 (LR・RL) ②結束第2種 (LR・RL) ③円形刺突3外縁	
III-6	12-1	3	H-1	覆土上	I	1	II b	深鉢	胴部	①LR②LR (縦回転)	
III-6	12-1	4	H-1	覆土下	II	1	II b	深鉢	胴部	①結束第2種 (LR・LR)	
III-6	12-1	5	H-1	覆土下	I	1	II b	深鉢	胴部	①RL (多条) ②タガ状貼付ヘラ押し30赤彩	
III-6	12-1	6	H-1	覆土下	I	1	II b	深鉢	胴部		
III-6	12-1	7	H-1	覆土下	I	1	II b	深鉢	底部	①無9平底	
III-6	12-1	8	H-1	覆土上	I	1	IV a	深鉢	口縁	①RL (多条)	
III-6	12-1	9	H-1	覆土上	I	1	IV a	深鉢	胴部	①LR・RL	
III-10	12-1	1	P-3	覆土上	I	1	IV a	深鉢	胴部	①RL、タガ状貼付RL	
III-10	12-1	2	P-3	覆土上	I	1	IV b1	深鉢	胴部	①RL (縦回転) ⑤平行・連続状沈線	
III-10	12-1	3	P-5	覆土上	I	1	IV b1	深鉢	胴部	①LR③平行・山形沈線	
III-10	12-1	5	P-7	覆土上	I	1	II b	深鉢	胴部	①結束第2種 (不明)	
III-13	13-1	1			PC-1	II	1	3	IV a	深鉢	口縁 胴部
					PC-1	II	3	7			
					PC-3	II	4	1			
					E6	II	1	1			
①RL・LR・RL・LR、タガ状貼付 (LR・RL・RL・LR・RL)											

種別	国取	番号	遺構名・調査区	層位	遺物番号	点数	分類	形態	部位	文様ほか
Ⅲ-13	13-1	2	PC-2 F7	Ⅱ	1 3	3	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤平行沈線⑥段部内縁
Ⅲ-13	13-1	3	PC-2	Ⅱ	1	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤爪2列(左から)⑦口縁部無文帯有り⑧④と同一個体
Ⅲ-13	13-1	4	PC-2	Ⅱ	1	2	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤爪2列(左から)⑧③と同一個体
Ⅲ-13	13-1	5	PC-2	Ⅱ	1	3	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③棒キザミ⑥爪2列(左から)
Ⅲ-13	13-1	6	PC-2	Ⅱ	2	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③横方向へラナデ⑤平行・括弧状沈線
Ⅲ-13	13-1	7	E6 F6 PC-3	Ⅱ	2 1 3	3	Va	浅鉢	底部	①RL・底RL②底角突出す、平底
Ⅲ-13	13-1	8	G6 H6	Ⅱ	1 1	1	Ⅳb1	深鉢	胴部	①LR⑤沈線縄文輪飾と中央
Ⅲ-13	13-1	9	PC-3	Ⅱ	3	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③棒キザミ⑦口縁部無文帯有り
Ⅲ-13	13-1	10	PC-3	Ⅱ	2	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR⑦口縁部無文帯有り
Ⅲ-13	13-1	11	PC-3	Ⅱ	3	1	Va	深鉢or鉢	底部	①RL・底RL②底角突出す、平底
Ⅲ-14	13-1	13	PC-4 E6 E7	Ⅱ	1 1 3	3	Ⅲa	深鉢	胴部	①結束第2種(LR・LR)
Ⅲ-14	14-1	14	PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 PC-4 E6 E6 E7 E7 F6 F7 F7 不明	Ⅱ	1 2 3 5 6 8 9 10 11 12 13 42	42	Va	鉢	口縁・胴部	①LR③棒キザミ⑥爪3列(左から)⑦口縁部無文帯有り⑧内縁切口径40.8cm
Ⅲ-14	13-1	15	PC-4 F6	Ⅱ	1 3	3	Va	壺	胴部	①LR⑤波状沈線⑦隆帯上・沈線・棒キザミ⑧⑩16・17と同一個体
Ⅲ-14	13-1	16	C5 B4	Ⅱ	1 1	1	Va	壺	胴部	⑤波状⑧外縁⑩⑩15・16と同一個体
Ⅲ-14	13-1	17	D5 PC-5	Ⅱ	2 1	1	Va	壺	胴部	⑤波状⑦隆帯上・棒キザミ・沈線⑩⑩15・16と同一個体
Ⅲ-15	14-2	20	B4	Ⅱ	1	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①LR③棒キザミ④ミガキ(横方向)⑥棒刺突2列(右から)
Ⅲ-15	14-2	21	PC-5 B4	Ⅱ	1 1	1	Va	深鉢or鉢	口縁	①無③棒キザミ⑥棒刺突2列(下から)②口縁部無文帯有り
Ⅲ-15	14-2	22	PC-5 B4 B4 B5	Ⅱ	2 1 1 1	2	Va	浅鉢	口縁	①RL(縦回転)③棒キザミ⑥棒刺突2列(右から)⑦口縁部無文帯有り
Ⅲ-15	14-2	23	PC-5 B4 B4 B5 C5	Ⅱ	1 3 2 1 1	5	V	浅鉢	底部	①LR・底LR⑦底部付近無文帯有り⑧底角有り、丸底⑩⑩径9.6cm

①縄文(外周)②縄文(内面)③口縁④内面⑤沈線・縄線⑥爪形・刺突・キザミ⑦隆帯・貼付ほか⑧縦合面⑨底部形態⑩その他
棒:棒状工具、半竹:半杖竹管状工具、ヘラ:ヘラ状工具、中空:中空工具、さき:先端部がさきくえられた工具、角:先端部角形の工具、爪:爪形文

表Ⅲ-5 遺構出土掘載石器一覧

種別	国取	番号	遺物名	遺構名	層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
Ⅲ-7	12-1	10	石鏃	H-1	Ⅱ-1	29	40	19	5	3.2	黒曜石	
Ⅲ-7	12-1	11	石鏃	H-1	Ⅱ-1	14	52	25	6	5.2	黒曜石	MS-X12
Ⅲ-7	12-1	12	石鏃	H-1	Ⅱ-1	6	69	33	10	16.5	黒曜石	MS-X11
Ⅲ-7	12-1	13	つまみ付きナイフ	H-1	Ⅱ-2	39	58	35	5	12.1	黒曜石	
Ⅲ-7	12-1	14	スタレイバー	H-1	Ⅱ-2	40	28	45	9	10.2	黒曜石	
Ⅲ-7	12-1	15	石核	H-1	Ⅱ-1	33	21	25	10	5.2	黒曜石	
Ⅲ-7	12-1	16	石斧	H-1	Ⅱ-2	43	88	29	13	42.6	片岩	
Ⅲ-7	12-1	17	石斧	H-1	Ⅱ-2	42	117	26	10	36.7	片岩	
Ⅲ-7	12-1	18	石斧	H-1	Ⅱ-2	44	(156)	60	34	505.2	片岩	
Ⅲ-7	12-1	19	石斧	H-1	Ⅱ-1	35	(69)	(51)	32	173.6	玄武岩	
Ⅲ-7	12-1	20	石斧	H-1	Ⅱ-1	34	(112)	61	22	169.6	片岩	
Ⅲ-10	12-1	4	石核	P-6	Ⅱ-1	2	38	13	12	6.5	黒曜石	
Ⅲ-10	12-1	6	楔形石器	P-7・PFC-1	Ⅱ-③	1	24	15	6	1.7	黒曜石	MS-X23
Ⅲ-10	12-1	7	楔形石器	P-7・PFC-1	Ⅱ-③	2	22	14	6	1.5	黒曜石	MS-X24
Ⅲ-13	13-1	12	砥石	PC-3	Ⅲ	6	188	128	24	908.4	砂岩	
Ⅲ-14	13-1	18	両面調整石器	PC-4	Ⅲ	14	39	21	7	6.0	黒曜石	
Ⅲ-14	13-1	19	たたき石	PC-4	Ⅲ	15	(80)	42	28	129.5	砂岩	

IV 包含層出土の遺物

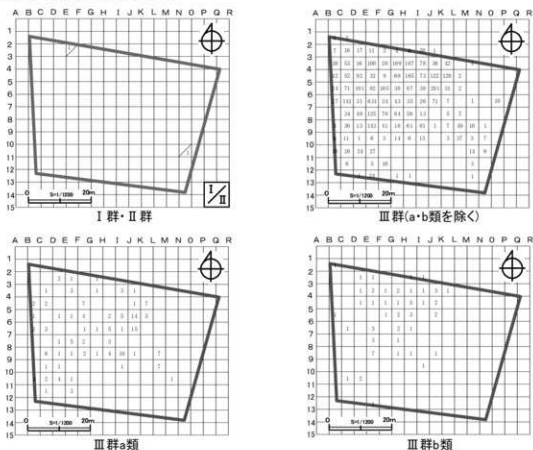
1 概要 (図IV-1~5、表IV-1)

包含層の出土遺物総点数は30,673点で、土器等が23,685点、石器等が6,980点、その他が8点である。調査区内は、南東部は住宅によって包含層が削平され、また、北側では東側のほうが耕作によるII層上部の擾乱の度合いが大きい。包含層が良好に残存する北西側から遺物が多く出土している。

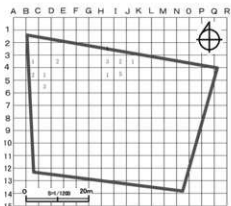
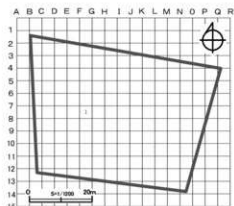
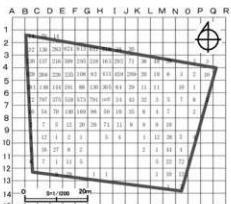
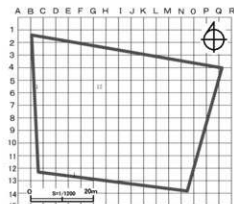
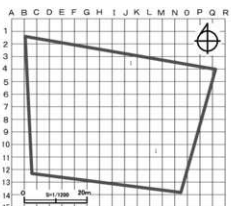
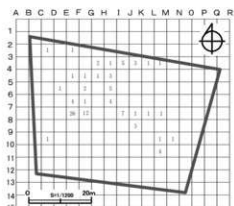
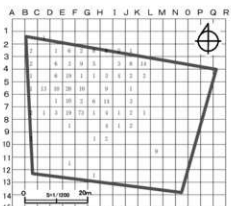
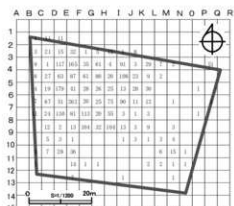
土器の破片点数は、縄文時代早期のI群が1点、前期のII群が1点、中期のIII群が4,543点、III群a類が167点、IIIb類が64点、後期のIV群が3,099点、IV群b類が3点、IV群b1類が359点、IV群b2類が100点、IV群b1・2類が15点、IV群b3類が3点、IV群c類が14点、晩期のV群が15,223点、統縄文時代のVI群が1点、擦文文化期のVII群が21点である。最も多いのはV群で64%を占め、以下III群a・b類を含めたIII群が20%、IV群a~cを含めたIV群が15%である。それ以外は僅少である。主体を占めるIII~V群は全て、北西側全体に分布する。

石器は、石鏃・石槍・ナイフ・両面調整石器・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・楔形石器・二次加工ある剥片・石核・石斧・砥石・たたき石・すり石・台石・原石・垂飾が出土している。石材は剥片石器には黒曜石が90%以上利用される。剥片は黒曜石(88%)と綠色泥岩(4%)・片岩(5%)がほとんどで、遺跡内では黒曜石を利用した剥片剥離または二次加工や綠色泥岩・片岩を利用した石斧の加工が行われたと考えられる。

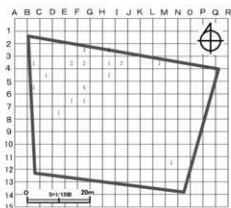
石鏃は形態からIa~Ie、II、IIIa・b類に分けた。各類型は点数が少ないため分布の偏りは検討しにくい、土器同様調査区北西部に全体的に分布する。また、石鏃以外の器種についても石鏃同様、明確な分布の偏りは確認できない。



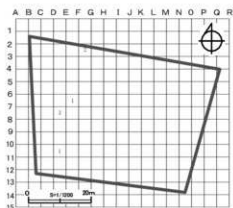
図IV-1 包含層出土土器分布(1)



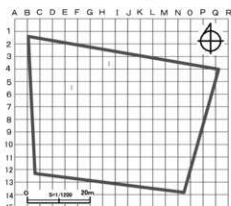
図IV-2 包含層出土土器分布(2)



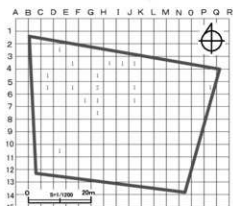
石鏡 Ia類



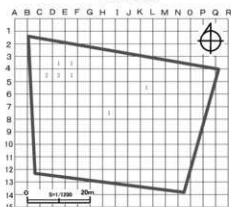
石鏡 Ib類



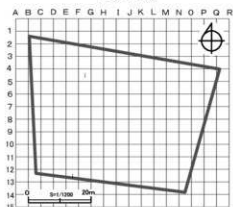
石鏡 Ic類



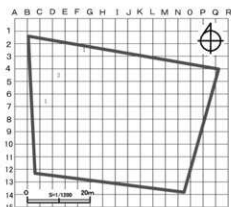
石鏡 Id類



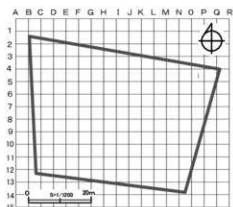
石鏡 Ie類



石鏡 II類

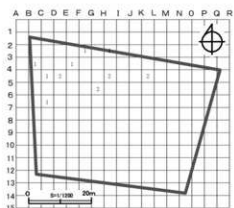


石鏡 IIIa類

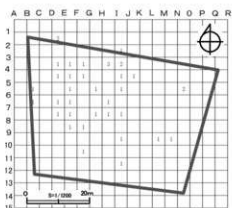


石鏡 IIIb類

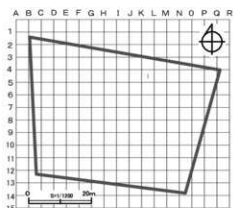
図IV-3 包含層出土石器分布(1)



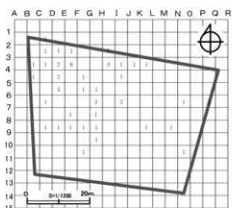
石鏃Ⅳ類



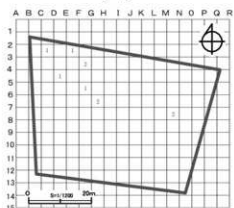
石槍



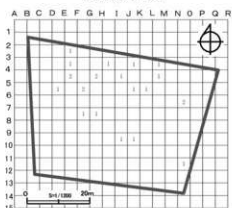
ナイフ



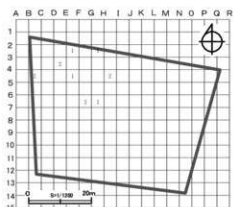
両面調整石器



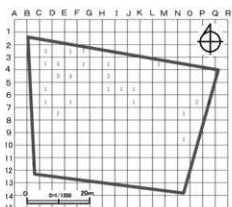
つまみ付きナイフ



スクレイパー

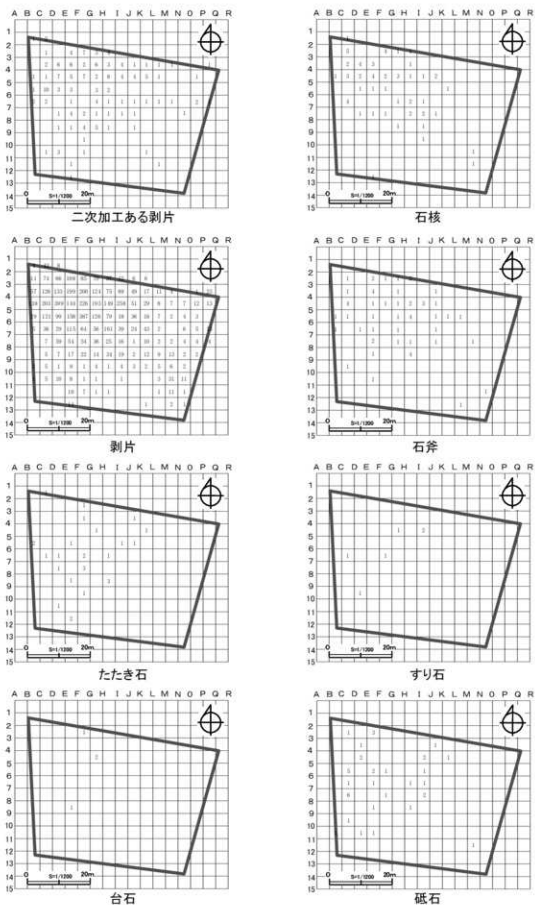


石鏃



楔形石器

図Ⅳ-4 包含層出土石器分布(2)



図IV-5 包含層出土石器分布(3)

2 土器・土製品

I 群 (図IV-6-1、図版14-3)

1は撫糸文が施文されたものである。上部に両傾の接合面がある。I群b類とみられる。

II 群 (図IV-6-2、図版14-3)

2は太い原体で横走する縄文が施された後、節が擦り消され、太い沈線状である。II群a類とみられる。

III 群a類 (図IV-6-3～図IV-7-32、図版14-3・15-1)

3～32は萩ヶ岡2式に相当するもの。3～16は口縁部、17～31は胴部、32は底部である。3～7は山形突起部で、口唇部は厚く、突起部から垂下する貼付があり、3は鎖状である。貼付は縦位の他、口唇部下位に横環し、口唇部肥厚帯と2段になるものが多く、その他胴部に横環するものもある。施文具として半截竹管状工具が多用され、口唇部や貼付上に押し引き（横方法の場合、左に押しながら右方向に進行し、縦方向の場合、上に押しながら下方向に進行する）や直交方向へのキザミ（貼り付けの高部から低部へ）が施される。胴部には同工具内側を利用して断面形が半円形に盛り上がる沈線が2本1組で横環するものが多い。また、半截竹管状工具の外側断面円形部を利用して押し引き・キザミの見られるもの（7・19）もある。51は口唇部に縄文が施され、突起上に縄面圧痕が、その両脇に半截竹管状工具のキザミがある。地文の縄文は節が細長く密接する多条のLR斜行縄文がほとんどであるが、一部RL斜行縄文（12・18・22・25）もある。地文の施文後、貼り付けなどが行われる。14～16は縄文のみのもので、14は山形突起があり、14・15は口唇部にヘラ状工具によるキザミが施される。26～28は先端がさざくれ立った工具により波状沈線や平行沈線が描かれる。29・30は結束第1種羽状縄文が施され、31はLR斜行縄文にRL横走縄文が重ねられる。32は底角がやや張り出す底部である。本類土器の口唇部や内面には顕著なミガキが施される。器形は全て深鉢で、底角の張り出す底部から斜めに立ち上がり、胴部がやや丸みを帯び、口縁部が外反する形状である。

III 群b類 (図IV-7-33～図IV-8-63、図版15-1・16-1)

33～63は北筒式に相当するもの。33～49は口縁部片。33～46は口縁部が断面三角形に肥厚し、35・36・42～44は山形の小突起があり、突起下部は縦に肥厚する。33～38は口縁部に平刀状の工具による押し引き文が施文されたもので、33・35～37は2段、34は3段施され、38は2本1対の工具が、41は先端の尖る2本1対の工具が利用される。42～48は縄文のみのもので、42はRL・LRの結束第2種羽状縄文が施文される。47・48は肥厚帯が無く、48はLR・RLの結束第2種羽状縄文が施文され、口縁部はほぼ直立する。49は他に比べ薄く、細い貼付帯が口縁部を巡る。口唇部は33・36・37には口縁部と同様の押し引きが、35・38・39には棒状工具による刺突が、41・42には縄文が施文される。口縁部の内面にも縄文のあるものが多く、33にはLR・LRの結束第2種の縄文が斜位回転により施文され、34・42にはLR・RLの結束第2種の縄文が横位回転により施文される。また、36・37には内面にも押し引き文がある。40の上部には外傾の接合面が残る。33～47には直径1cm程度の円形刺突がある。

50～59は胴部片で口縁部同様、50～52は平刀状の工具により、53は二股に分かれた工具による押し引き文が横環し、54には平刀状工具による沈線文が横環する。55はRL・LR結束第2種羽状縄文が施文される。56は綾絡文が2列施文され、上下には外傾接合面が残る。

60～63は底部。58～60は同一個体で、縄を束ねたと思われる原体が利用される。底部は底角の張り出しは無く、平底と中央がわずかに窪んだ上げ底のものがある。

地文の縄文はLR縄文もしくは結束第2種羽状縄文が主体であるが、LR原体を縦位に回転させたもの(50・51)もある。口縁部の内外面(34・37)、口縁部の内面(36)、胴部の外面(50・51)に赤色顔料が付着するものがある。

器形は全て深鉢で、ほぼ平底の底部から斜めに立ち上がり、胴部がややふくらみ、口縁部がわずかに外反する。口縁部は内湾するもの(45)もある。

IV群a類(図IV-8-64~図IV-9-79、図版16-1)

64~73は余市式のうちいわゆる伊達山式・小野幌式に相当するもので、64~68はタガ状の貼付帯をもつものである。64は口縁部肥厚帯の下位にRL斜行縄文を1段、その下位(ちょうど3段目の貼付帯の下位にあたる)にはLR斜行縄文を複数段施文する。貼付帯は3段あり、胴部上半部に限定され、口縁部肥厚帯と貼付帯にはLR斜行縄文が施文され、口縁部肥厚帯下部の無文帯には細い棒状工具による刺突列が巡る。65は地文にRL斜行縄文が施文され、口縁部肥厚帯と2段の貼付帯にはRL斜行縄文が施文される。66は2段の貼付帯があり、地文は64同様、その上位はRL斜行縄文が、下位はLR縄文が施文され、貼付帯上はLR斜行縄文が施文される。67は2段ある貼付帯は細く、下位の地文と貼付帯上にはLR斜行縄文が施される。68の地文は貼付帯を挟んで上位がRL斜行縄文、下位がRL斜行縄文で、貼付帯はRL斜行縄文である。66~68は貼付帯下位に貼付帯のない部分があり、貼付帯は64同様に胴部上半に限定されるものと推定される。

69~73はタガ状の貼付帯の無いもので、口縁部肥厚帯のあるものである。69・70は同一個体で、口縁部に幅1.5cm程の肥厚帯があり、その4cm程下位に段状の継ぎ目がある。段の下位には中空の工具による円形刺突列が巡る。また、口縁部には矢印形の貼付がある。上段の粘土が下段の地文に被さることから下段の施文後、上段の粘土貼付を行い、さらに縄文施文、矢印形の貼付、貼付上の縄文施文、円形刺突の順で整形されている。縄文は地文がLR斜行縄文で、口縁部肥厚帯・口唇部にはRL斜行縄文、矢印状貼付にはLR横走縄文が施文される。71には口縁部に下方からの円形刺突がある。72は口縁部に幅1.5cmの粘土紐を貼り付け、肥厚帯を形成し、2本の縄線が施される。73は口縁部が段状で、RL斜行縄文が外面・口唇部に施文される。

74・75はタブコブ式に相当するもので、段やタガ状の貼付は無く、外面には口縁部に1段RL斜行縄文が、その下位にLR斜行縄文が施文され、内面にはLR横走縄文とRL縦走縄文が施文され、口唇部にはLR斜行縄文が施される。表面は両面とも縄文が見えなくなるほどナデ調整される。

76は胴部で、厚さは2cmを超える。77~79は底部で、3cm程度の厚みがあり、外面にはLR斜行縄文が施文される。平底で78はわずかに底角が張り出す。

IV群b類(図IV-9-80~図IV-10-104、図版16-1・17-1)

IV群b類はb1~b3類に細分される。80~89はb1類で、ウサクマイC式に相当するもの。80は胴部が開き気味に立ち上がり、頸部がくびれて口縁部が外反する器形で、口縁部は6~7か所の波頂部を持つ波状口縁である。全面的にヘラナデ調整され、口縁部・胴上部・口唇部にはLR斜行縄文が施文され、胴中下部にはLR縄文が無文帯を意識してその輪郭に沿って回転方向を変えながら施文される。幅1cm程度の頸部無文帯上位の沈線で区画された口縁部には波状口縁に対応した連続山形文が5条あり、胴上部に断続する鋸歯状の沈線が横位に展開する。胴中下部には沈線が無文部の縁取りを行い、「コ」状の無文部が入り組む文様である。胴上部には外傾接合面が確認できる。81は口縁部上下に2本ずつの平行沈線で区画された地文部に流水状の沈線が描かれる。82・83は平行沈線で区画された内部

に斜行する交互沈線文が見られ、84は波頂部下部に縦位の沈線と波頂部を結ぶ大きな弧線が加えられる。80～82・84は口唇部直下まで、また、口唇部にも縄文が施文される。85は頸部に内屈するくびれがあり、無文帯を挟んで口縁部に平行沈線が描かれる。口唇部は無文で、波頂部にはキザミがある。86は波頂部にキザミがあり、その下部には山形の沈線が3条描かれ、その頂部には棒状工具による刺突がある。山形沈線の内部には縄文が施文される。87は三叉状の沈線が描かれ、88は地文のみの波状の口縁部である。80～88の口縁部は外傾し、ほぼ直線的に立ち上がる。89は胴部で、地文部の下位に沈線が描かれ、縄文の下部は擦り消される。

90～98はb2類で、手稲式に相当するもの。90は口唇部直下に5mm程度の狭い擦り消し帯があり、その下部の斜行縄文上に対向する縦位の弧線文が施され、さらに波頂部を結ぶ大きな弧線が描かれ、玉抱き三叉文風である。文様はウサクマイC式であるが口縁部無文帯と若干内湾する口縁部形状からb2類とした。91～98は平行沈線に縦位の蛇行文(92・93・95～97)ないし括弧文(91・94・98)が施文されたもので、93～95には口唇直下にミガキによる無文帯があり、91・92にはない。口縁部は全て外傾し、91・93・94は内湾して、92・95・96はほぼ直線的に立ち上がる。96は頸部のくびれ部に無文帯があり、97の上部には外傾接合面が残る。98はくびれ部直下に相当し、縄文帯と無文帯が交互で、上部の頸部接合部は外傾接合面である。b2類としたこれらは、文様は手稲式に相当するものの、口唇部直下無文帯がないものや、あっても非常に狭く、口唇部に縄文の施文されるものがあり、また、口縁部が直線的に立ち上がるものや頸部のくびれがあるものがほとんどであることからウサクマイC式期から手稲式期の過渡的な時期と思われる。

99～102はb1ないしb2類に相当するものである。99・100は胴部片で、LR斜行縄文施文後、下部がミガキによって調整される。101・102は無文の平底の底部で、斜めにほぼ直線的に立ち上がる。

b1・b2類共にLR斜行縄文が施文され、b1類は内面・胴下部、b2類は口唇直下・口唇部・内面・胴下部がミガキ調整される。

103・104はb1類で、蛇濤式に相当するもの。103の口唇部は切り出し形で、口唇下部の内外面には沈線が1条引かれ、口唇外面にはキザミ列が施される。LR斜行縄文とRL斜行縄文が交互に施文され、羽状を呈する。104は無文帯下部が段状で、キザミ列によって区画された下部にはRL斜行縄文とLR斜行縄文が羽状に施文される。

IV群c類 (図IV-10-105～107、図版17-1)

105は内面からの突瘤と平行沈線が見られる。106・107は同一個体の注口土器と見られるもの。胴部は屈曲し、口縁部は斜めに開き、口縁・胴上部には縄文地に平行沈線が描かれ、胴下部は無文である。

V群 (図IV-10-108～図IV-15-218、図版17-1～21-1)

本群にしたものは爪形文・刺突文・沈線文・縄文・無文がある。爪形文には突瘤を伴うものは無く、口縁部に無文帯があるのが特徴である。後期後葉から晩期前葉へ①突瘤が減少し、爪形文が増加する傾向があり、②東三川I式古段階から新段階へ沈線で区画された無文帯が出現することから東三川I式新段階以降とみられ、深鉢の器形から見ると上ノ国式に相当すると思われる。一部晩期後葉(V群c類)とみられるものが含まれるが、ほとんどはこの時期(V群a類)に相当するものと思われる。

108～148は深鉢ないし鉢であるが、器高/口径が1以下とみられるものがほとんどである。

108～115は爪を利用して施文した爪形文のあるもの。108～112は親指、113～115は人差し指を用い、それぞれ左、右からやや斜めに表面を挟るように施文する。その際、押し出された粘土は反対側に盛

り上がる。109にはその際に押さえた人差し指の爪の痕跡が残り、113・114には親指の爪の痕跡が残る。108～110・114は1段、111は2段、112は3段施文される。115は爪形文の上位無文帯に右からの刺突列が2列巡る。口唇部は108・109・114には棒状工具によるキザミ、111・112には右から斜めに刺突、113には縄文が施され、115は棒状工具により斜格子状にキザミが施される。108～110・113は爪形文上部の口縁部に無文帯がある。

116～122は棒状工具による刺突列が巡るもので、116～119は右から、120～122は下方から刺突される。117・121・122は2段、118～120は3段、116は4段で、122には縦にも刺突列が施される。118・120・121は地文がRL縦走縄文である。これらは口縁部付近でわずかに内屈し、ほぼ垂直に立ち上がる。120は口唇部に貼付状の突起があり、突起上はナデにより窪む。117・118は口縁部に無文帯がある。口唇部は、117には棒状工具による斜格子状キザミが、118にはヘラ状工具によるキザミが施され、ナデ調整のみのものもある。

123～133は沈線文の施文されるもの。123～125は同一個体で1条の沈線で区画された口縁部に交互に対向する連弧文が、126は上下が沈線で区画された中に対向する蛇行文が描かれる。127・128は弧状と縦横の沈線が組み合う。129・130は平行沈線のみで、131は沈線に下方からの刺突が加えられ、132は斜行・横走沈線とその下部に下方からの刺突が施される。133はくびれた頸部に沈線が施され、口縁部にはヘラ状工具によるキザミ列が2段巡る。口唇部は内外面交互にキザミが施される。胴部には細かいRL縦走縄文が施文される。

134・135は縄線文が巡るもので、口唇部は134には縄文が、135には縄によるキザミが施される。

136～148は縄文のみのもので、136は口唇部にヘラ状工具によるキザミが、137～140は棒状工具によるキザミが、141～144は刺突が141・142には右から、143・144には左から施される。136には口唇部に貼付状の突起がある。137～140・143～146の口縁部には無文帯があり、無文帯は下位の胴部に比べやや薄い。これらはほぼ直線的に立ち上がるものが多い。142下部には内傾の接面がある。

149～183は浅鉢・皿である。149は口縁部無文地帯にヘラ状工具によるキザミが3段施文され、口唇部には棒状工具によるキザミが右から施される。150～155は縄文のみのもので、口唇部は棒状工具によるキザミが150・151、154の突起部に施され、155には縄文が施文される。150の底部は平底で、外面同様、RLR縄文が施文される。150・151・153・154は口縁部に無文帯があり、無文部は薄い。152はRL縦走縄文である。器形は器高の低いものは内湾し、高いものは直線的に立ち上がる。

156～176は口縁部突起のあるもの。156・157は同一個体で平底の底部から斜めに直線的に立ち上がり、口唇部は低い山形に貼り付けられ、肥厚し、沈線とキザミが加えられる。158は2個1対の低い突起があり、口唇部の突起上には刺突が、突起間には斜めの刺突が、左右には深い短沈線が施される。159は弧状の沈線が描かれ、平坦に潰された突起口唇上にキザミ列が2列、突起下には2個の穿孔がある。160は円形の突起で沈線と刺突によって装飾される。161・162は2個1対の小型山形突起があり、161は口唇部内面にキザミが、162は突起上に刺突が施される。

163～165は口唇部に縄側面圧痕のあるもので、晩期後葉（V群c類）と思われる。163は縦の貼付により縦に肥厚し、その口唇には縄の圧痕が同心円状に施される。肥厚した角の頂部とその両側にはキザミが、角の下には穿孔が1か所ある。164は口唇部が肥厚し、縄側面圧痕が施文される。165は円形に貼り付けられた突起内面に渦巻き状の縄の圧痕があり、その下部には穿孔がある。

166～176は口縁部が部分的に内側に折り込まれ、上面観がいびつになるもの。166は低い山形突起を内側に折り込み、その外側の内面と折込部の口唇外面にキザミが施される。167の折込部外側内面には沈線・刺突がある。168は台形状の低い突起が並び、片側が折り込まれ、口唇には棒状工具によ

るキザミがある。169は折込部の外面に弧状に沈線が施文され、口唇にはヘラ状工具によるキザミが施される。170は細かく折り込まれ、花卉状で、口唇内側には棒状工具によるキザミがある。171は突起が折り込まれ、外面の縁辺、口唇部には刺突が施される。172・173は同一個体で口縁部は内外からの交互のキザミによって折り込まれる。176は突起を内側に折り込むように貼付け、その外面に沈線と刺突を施す。177～180は胴部片で、177はRL縦走縄文地に沈線とその下部に下方からの刺突が施される。178はわずかに内屈する位置にキザミのある隆帯が巡り、その上位には沈線が描かれる。179はLR縄文原体を縦に回転させた斜行縄文地にささくれ立った先端の工具で沈線が描かれる。180は無文で底部から内湾して直線的に斜めに立ち上がる。181は皿で、底部からはほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともヘラナデにより調整される。内傾接合で底部は高台が付くと思われる。182・183は同一個体で、皿に近い形状である。無文で口縁部には2か所小型の突起が付けられ、その頂部と突起間に刺突が施される。底部は低い高台が付きその外面には角のある工具による刺突が右から行われる。

184～193は壺である。184は口縁部で、無文で頸部が内傾し、沈線を挟んで口縁部は外反する。185は頸部で、厚手で肩部から外屈し、外傾気味に立ち上がる。頸部にはキザミと沈線のある隆帯が1条巡る。186～190は肩部。186～188は同一個体で、平行沈線で区画された間に交互弧線文、右からの刺突列とキザミ列が巡る。186は頸部と肩部との屈曲部で山形の沈線文のある突起が付く。189は鋸歯状の沈線と沈線のある隆帯がある。190は無文地に平行沈線と弧状の沈線が描かれる。191～193は胴部片で、191は肩から胴部にかけて屈曲し、その上部には2条の細い沈線が巡る。肩部は原体を横に回転させたRL斜行縄文で、胴部は原体を縦に回転させたものである。192は外面が丁寧に磨かれ、かさぶた状の剥落が見られる。193は肩部にはLR斜行縄文地に3条の平行沈線が描かれ、胴部は無文である。

194～208は深鉢または鉢の底部である。194～205は低い高台ないし上げ底状で194～200は高台状に下方ないし外側に張り出す。底部付近に200・201は右からの、202は左からの爪形文が1列巡る。204は3条の沈線が巡る。206は凸底で底角が明瞭、207は平底で、底角は不明瞭である。194・204・208を除いて底面に縄文が施文される。208は小型土器の底部で低い高台が付く。

209～213は高台である。209は縄文地に対向する連弧文が描かれ、台下部に左からの刺突列が2条巡る。台上部には透かし孔が穿孔される。210は無文地に上下2条の沈線によって区画された内側に対向する連弧文が描かれ、その内部にはヘラ状工具によるキザミが充填される。ほぼ中央に透かし孔が穿孔される。211は縄文地に円形刺突が縦位に施文される。台上部に接合面があり、台と上部をそれぞれ作成し、接合している。209～211は内傾して立ち上がり、中央部が張る特徴的な形状である。209・211は上部の鉢が高台の輪郭に沿って打ち欠かれる。212・213は高台の接続部で213には透かし孔がある。

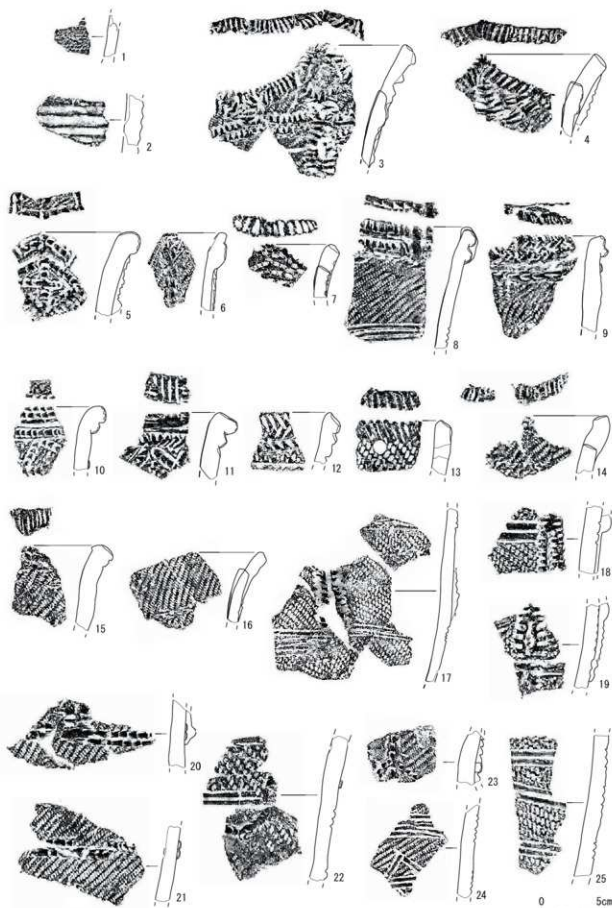
214～218はミニチュア土器。214は浅鉢で、RL縦走縄文が施文され、凸底の底面にもRL縄文が施される。底角は明瞭で底部付近に中空の棒状工具による刺突列が1列巡る。215は棒状工具による右からの刺突列が4段巡り、直線的に斜めに立ち上がる。高台の可能性もある。216は無文の鉢、217は蛇行する沈線とその下部に刺突が見られる。218は球胴形である。

本群の地文はLR斜行縄文が6割程度を占め、残りがRL斜行縄文とRL縦走縄文である。

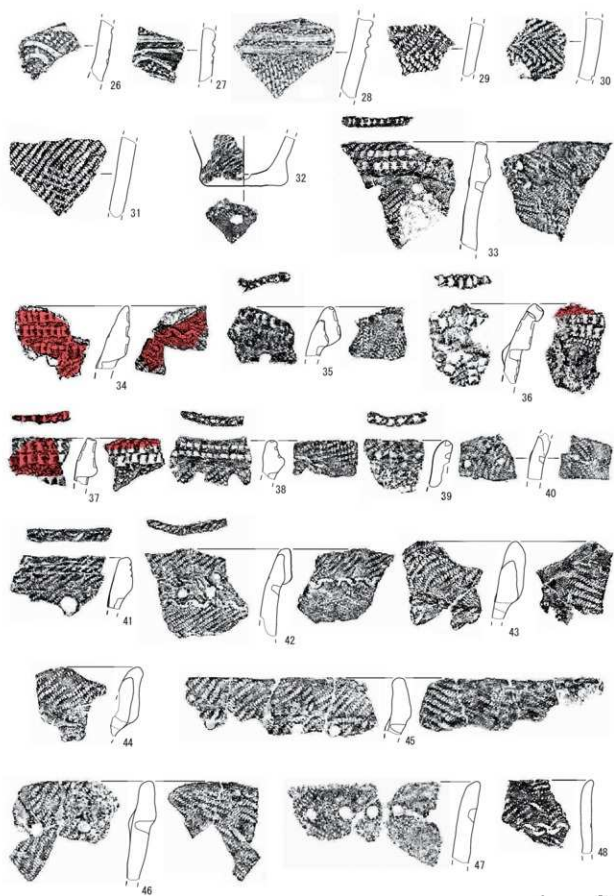
Ⅵ群 (図Ⅳ-15-219、図版21-1)

219は沈線とその間に帯縄文が施文される。

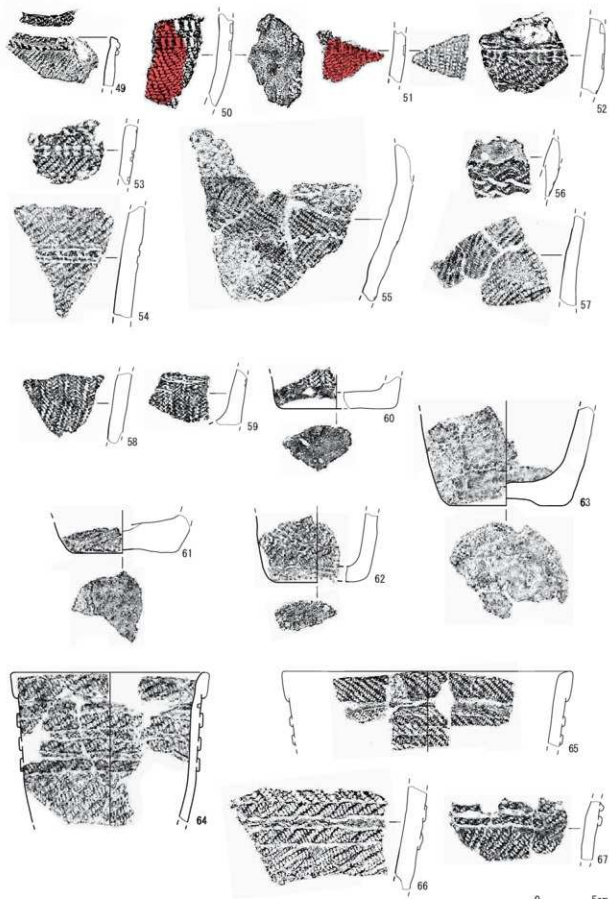
Ⅶ群 (図Ⅳ-15-220～223、図版21-1)



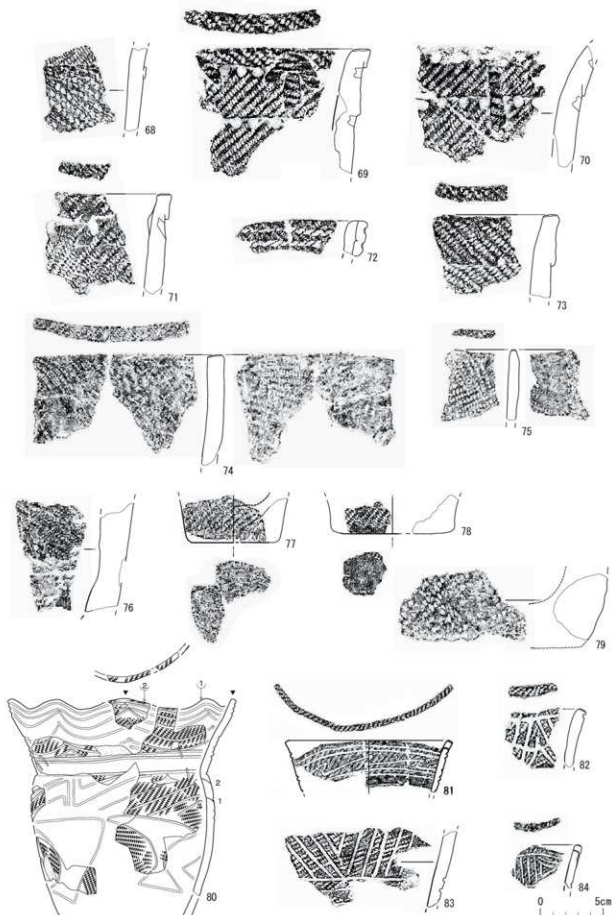
図IV-6 包含層出土土器(1)



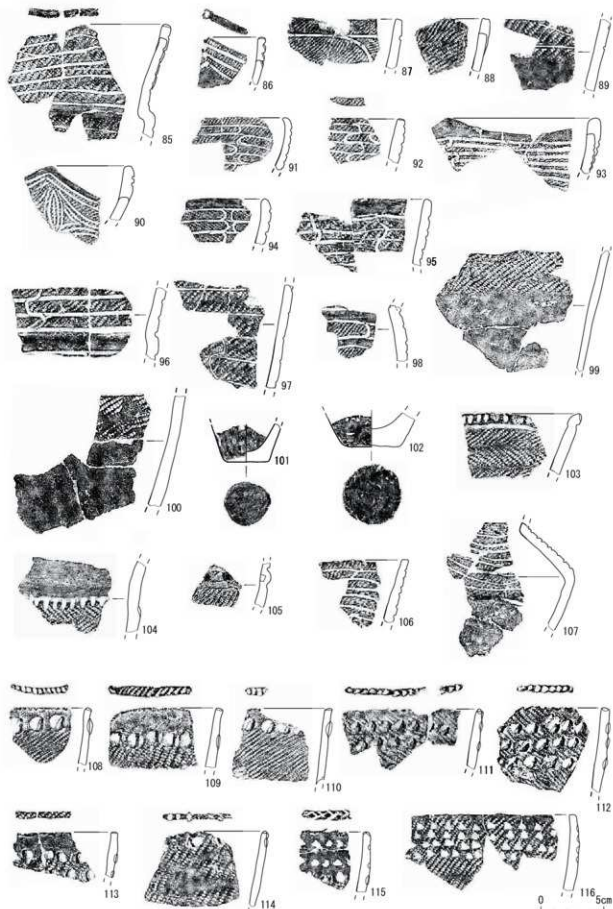
図IV-7 包含層出土土器 (2)



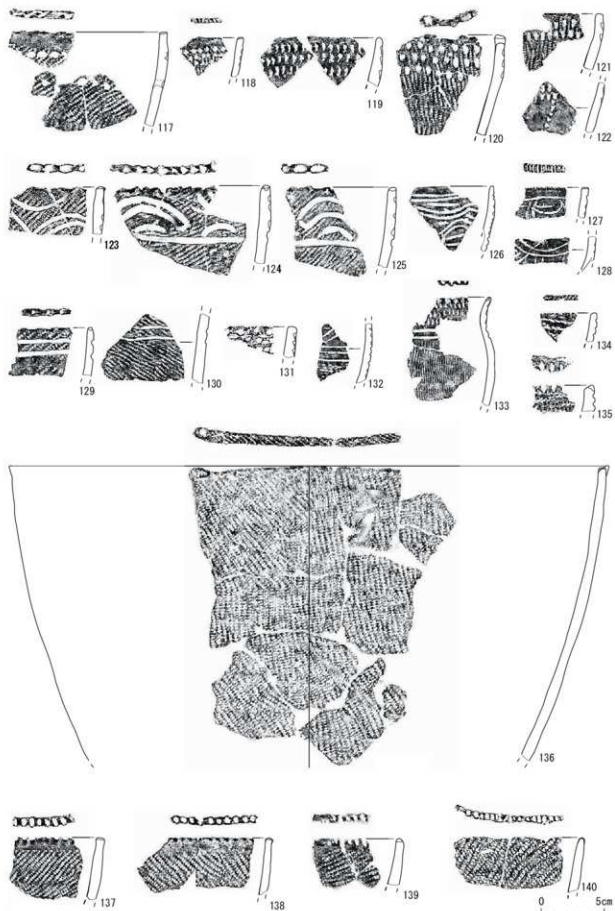
図IV-8 包含層出土土器 (3)



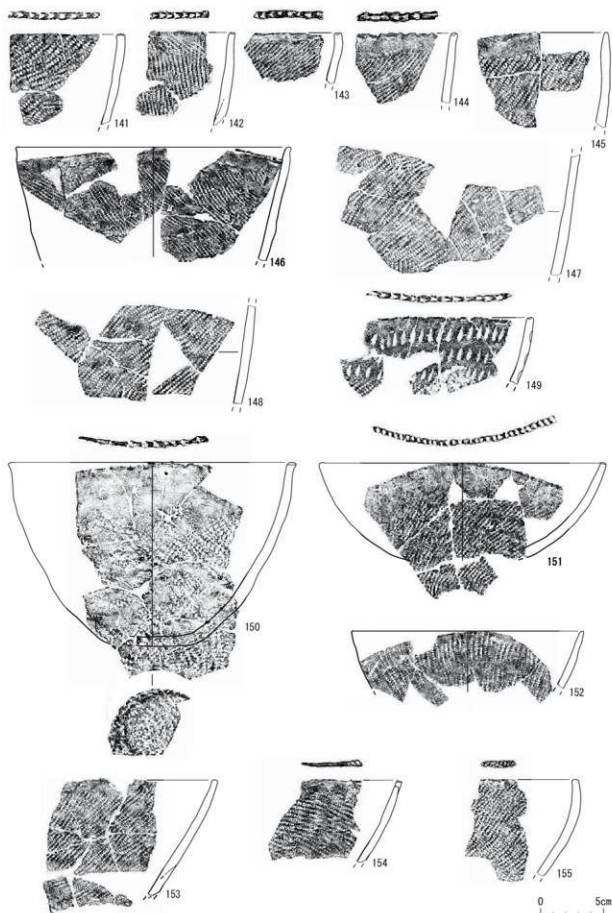
図IV-9 包含層出土土器(4)



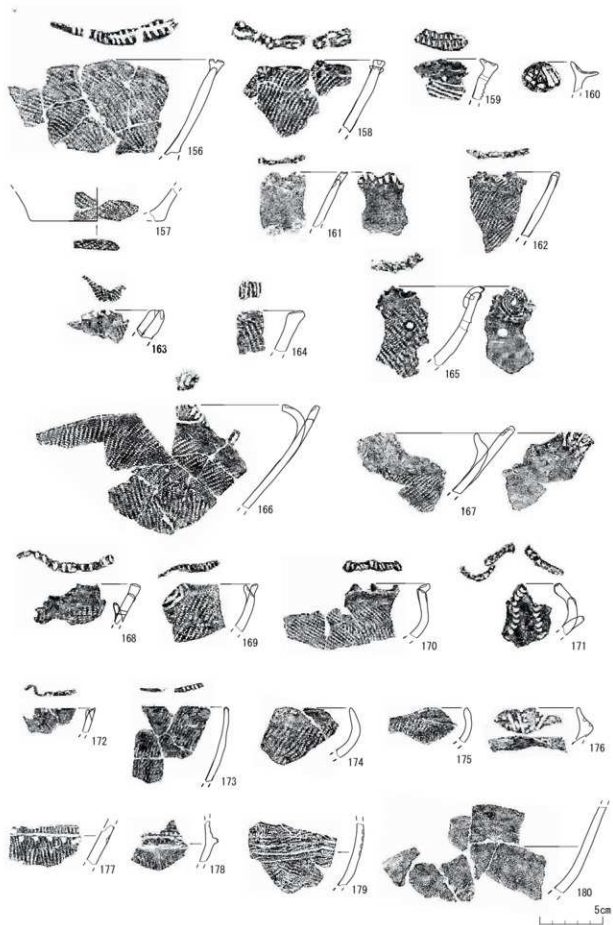
図IV-10 包含層出土土器 (5)



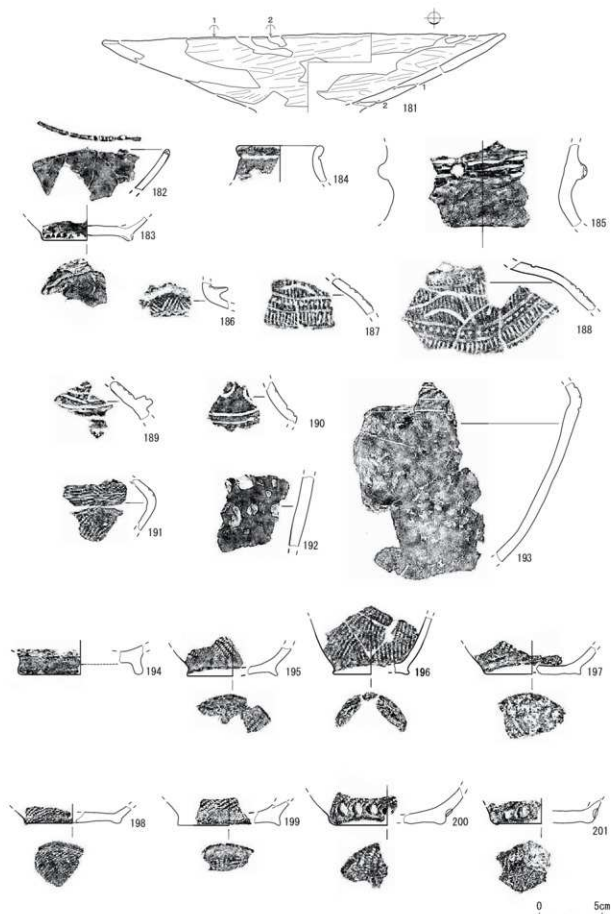
図IV-11 包含層出土土器(6)



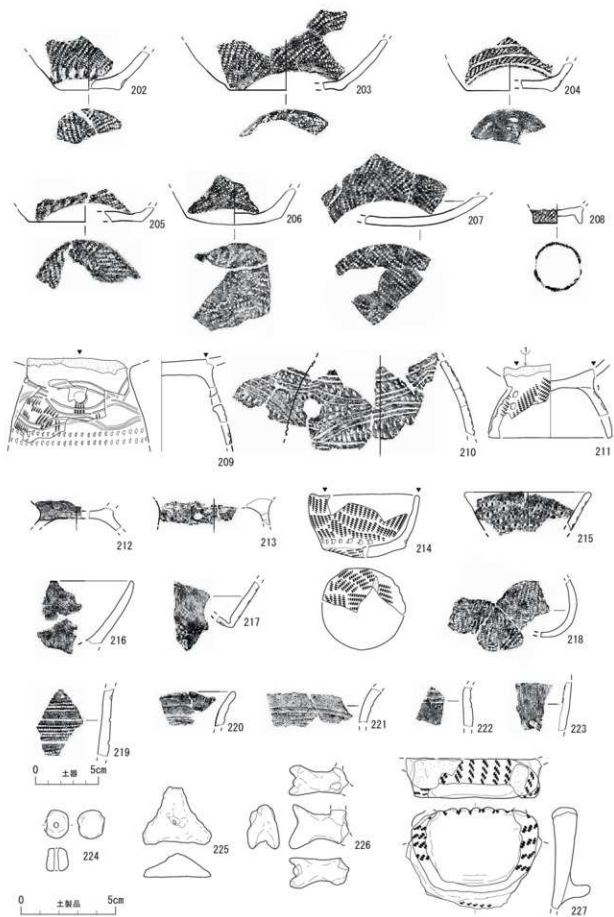
図IV-12 包含層出土土器(7)



図IV-13 包含層出土器 (8)



図IV-14 包含層出土土器 (9)



图IV-15 包含層出土土器 (10)

全て堯の破片で、220・221は口縁部、222・223は胴部片である。220・221はヨコナデが、222・223には縦のハケメが残る。

土製品等 (図IV-15-224-227、図版21-1)

224は土玉。225は三角形土製品で、土器の外側を打ち欠いて三角形に整形している。三辺はやや内湾し、正面中央にはわずかに外面が残る。Ⅲ群a類の時期とみられる。226はイヌのような形状である。227は平坦な板状のものに粘土紐を「コ」状に貼り付け、その上部と板の上面に縄の圧痕が施文される。

3 石器・石製品

石鏃 (図IV-16-1-24、図版21-2・22-1)

83点出土し、I a類が25点、I b類が7点、I c類が2点、I d類が18点、I e類が9点、II類が2点、Ⅲa類が5点、Ⅲb類が1点、IV類が14点である(図IV-1)。I a類1点(メノウ)、IV類1点(頁岩)を除き黒曜石である。24点を図示した。

1~24は全て黒曜石製。1~3・5~8は有茎で基部が棒状のI a類。1~3は尖頭部と基部の長さがほぼ一致し、ほぼ正三角形の尖頭部の側縁は内湾する。6~8は1~5に比べ尖頭部が長い。9・10はI b類。尖頭部が長く、側縁は内湾し、基部は三角形に近い。11はI c類で、基部の側縁は平行でやや長く、基端部は折損している。4・12~17はI d類で、菱形に近く、石槍と形態が類似し、大きさは連続的である。4は縁辺のみ加工が施され、両面に素材面が残る。18・19はI e類で、18は基部がやや細く、19は最大幅が基部よりである。20はII類。五角形で非常に薄い。21~23は無茎でやや幅広いⅢa類。21・22の側縁は外湾し、基部はやや内湾する。24は無茎で幅の狭いⅢb類で、三辺とも直線的である。

黒曜石産地分析の結果(V章2)、1は赤井川(MS-X4)、2は上土幌(MS-X9)、8は赤井川(MS-X6)、10は赤井川(MS-X3)、15は赤井川(MS-X2)、17は上土幌(MS-X8)、19は秩父別3(MS-X1)、20は所山(MS-X7)、23は白滝2(MS-X5)、24は赤井川(MS-X10)と判定された。分析数が少なく、類型との相関は判断しにくい、赤井川産が多く、そのほか上土幌・置戸・秩父別・白滝など多様な産地の黒曜石が利用される。

石槍 (図IV-16-25~図IV-17-36、図版22-1)

38点出土している。片岩1点を除き、黒曜石である。12点を図示した。

25~31は長さ5~6cmで類似した形状である。26の尖頭部には側縁に平行な細かい線状痕がある。30には裏面に素材面と大型の平坦剥離面があり、それらの表面に傷が多い。32~34は8cmを超える大型のもので、32は基部が不明瞭な柳葉形である。正面右下・左上、裏面左側に傷の多い面が残り、それらを切る傷の少ない面で構成される多段階表面変化が認められ、産地分析では所山産の結果が得られた。遠隔地の石材であること、傷の多いことから道具として保持された期間が長かったことが推定される。33は片岩製で、正面には自然面が残り、周縁は粗い加工がなされる。34は尖頭部周辺に縁辺に平行する線状痕が残る。35・36は折損品で、35は裏面に平坦剥離面が残り、正面はやや幅の狭い奥行きのある剥離面で構成され、断面は三角形に近い。裏面の古い面に傷が残る。36はやや大型の木葉形の尖頭器の折損品で、正面には比較的粗い剥離面があり、裏面はその打面としての細かい剥離面と素材面で構成され、加工の初期段階とみられる。折れ面は被熱によるものである。

黒曜石産地分析の結果、29は上土幌(MS-X13)、31は赤井川(MS-X15)、32は所山(MS-X14)、34は赤井川(MS-X18)、35は白滝1(MS-X17)、36は白滝1(MS-X16)と判定された。大型の石器には所山・白滝の遠隔地の石材が利用される傾向がある。

ナイフ (図IV-17-37、図版22-1)

1点出土し、頁岩である。1点を図示した。37は頁岩製で、上端は四角く、ナイフの基部とみられる。両面ともに押圧と考えられる剥離面で加工される。

つまみ付きナイフ (図IV-17-38-40、図22-1)

10点出土している。黒曜石5点、頁岩5点である。3点を図示した。38-40は頁岩製で、38は横長剥片、39は縦長剥片、40は石刃素材である。38は縁辺部のみ両面加工が、39は背面全体を覆う加工が、40は背面の縁辺のみ押圧剥離状の加工が施される。

スクレイパー (図IV-17-41・42、図版22-1)

24点出土し、黒曜石21点、頁岩3点である。2点を図示した。41・42は黒曜石製で、41は角礫面が残り、茶色が混じる石質で、42は灰色の縞状の石質で、ともに道東産の黒曜石の可能性が高い。41は石刃素材で角度のある二次加工が施され、右側縁下部の両面には線状痕が残る。42は主に左側縁に加工が施される。

石錐 (図IV-17-43-46、図版22-1)

12点出土し、黒曜石5点、メノウ3点、頁岩3点、安山岩1点である。4点図示した。43はメノウ、44-46は頁岩製である。43は三角形に、44は棒状に尖頭部が作出され、両者ともその稜が磨減している。45・46は急角度の加工によって断面四角形の棒状に加工されたもので、尖頭部の端部の反対側の太い側の稜が磨減する。

楔形石器 (図IV-17-47-54、図版22-1)

47点出土し、全て黒曜石である。8点を図示した。48には転礫面、49-50-52-53には角礫面が残る。上下方向に対向するリングの密な平坦剥離面があり、左右方向にみられるもの(50)もある。薄く平らなもの(47-51)が多いが、プリズム状のもの(52-54)もあり、後者は打面と作業面があり、石核の最終段階とみられる。51は裏面に傷の多い平坦剥離面があり、両面調整体から変化した可能性がある。原礫面が残るものが多く、素材原石はそれほど大きくないと思われる。

黒曜石産地分析の結果、47は上土幌(MS-X20)、48は赤井川(MS-X19)、50は赤井川(MS-X21)、51は所山(MS-X22)と判定された。原礫面の有無に関わらず赤井川産が多い。

二次加工ある剥片

181点出土している。黒曜石162点、頁岩8点、メノウ4点、珪岩3点、片岩2点、泥岩1点、緑色泥岩1点である。剥片の一部に加工のあるもので不定形なものである。

剥片

5,759点出土している。黒曜石5,046点、片岩256点、緑色泥岩243点、頁岩52点、珪岩47点、凝灰岩34点、メノウ31点、泥岩20点、安山岩10点、砂岩9点、チャート8点、玄武岩1点、碧玉1点、流紋岩1点である。剥片石器の素材剥離や二次加工の際に剥離されたものと石斧の加工で剥離されたものがあり、前者は黒曜石・頁岩・珪岩・メノウなど、後者は緑色泥岩・片岩である。前者では黒曜石の比率(96%)が圧倒的に高く、それらの剥片は小さい。小さい原石から剥離されたものか大型の原石から加工されたツールから剥離されたものと考えられる。

石核 (図IV-17-55-図IV-18-68、図版22-1・23-1)

67点出土している。黒曜石61点、メノウ2点、珪岩2点、凝灰岩1点、頁岩1点である。14点を図示した。55-67は黒曜石、68はメノウ製で、55-57・59-61・63-67には角礫面、62・68には転礫面が残る。55-57は両面に剥離面のある薄手のもので、55は正面と裏面で剥離方向を90度転移させ、56は円盤状に、57は打面と作業面を入れ替えて剥離が進行する。58-67は70度前後の剥離角の作業面を持つ

立体的な石核で、60・63～67は原礫面打面である。58は方向の異なる剥離面が各面に残り、59は正面には上下方向の、裏面には上からの剥離面が残る。60は背縁からの剥離が左右側面にあり正面の小口面には上下の剥離面がある。61は原石の折損後、折れ面を打面として剥離が行われ、62は正面に上面からの剥離と原礫面打面からの剥離が対向する。62の裏面に残る転礫面は平坦に近く、比較的大型の原石であったと思われる。63は原礫面打面からの剥離が正面・左側面に残り、64～67は正面が主要な作業面で、67は左側面での剥離後に打面が転移される。68は小型の転礫をほぼ二分割したもので剥片剥離の前段階と考えられる。

黒曜石産地分析の結果、57は赤井川（MS-X28）、59は赤井川（MS-X30）、60は赤井川（MS-X25）、61は赤井川（MS-X29）、62は上土幌（MS-X27）、64は赤井川（MS-X26）と判定された。小型の角礫は赤井川産で、やや大型の転礫は上土幌産である。

石斧（図Ⅳ-18-69～図Ⅳ-19-79、図版23-1）

58点出土し、緑色泥岩43点、片岩12点、砂岩1点、蛇紋岩1点、泥岩1点である。11点を図示した。69・72・74～77は緑色泥岩、70・73・78は片岩、79は砂岩製、71は石質不明である。69～77は長さ10cm前後のもので、形態が類似する。69～72はほぼ全面研磨が行われ、73～75には原礫面や素材面が残り、研磨は刃部を中心に部分的に行われる。71・72には刃部の破損が見られる。76は全体的に二次的な剥離によって覆われ、正面中央に原礫面、裏面中央に研磨面がある。加工途中で折損したものとと思われる。77は扁平な転礫で側縁のみ二次加工が施される。これらの石斧の加工は剥離による整形後、研磨が行われるが、相対的に薄いものには素材面や原礫面が残り、厚いものは研磨の比率が高いことから素材の厚さに応じて研磨による加工の度合いが異なると考えられる。

78は長さ13cmの大型のもので、剥離による整形後、研磨が行われる。79は厚みのある素材が利用され、剥離と敲打によって整形されるが、その段階で折損している。

たたき石（図Ⅳ-19-80～図Ⅳ-20-83、図版23-1・24-1）

28点出土し、全て砂岩である。4点を図示した。80・81は扁平な転礫、82・83はやや厚みのある転礫素材である。81の裏面を除いて、中軸からやや右に傾いた軸上2か所に窪みがあり、それらは手で保持して尖ったものを叩いた痕跡とみられ、上下・表裏を持ち替えながら使用したものと推定される。80・82は他と同様、窪みが表裏に2か所あることから折損品ではなく、この形態で機能していたものと思われる。

すり石（図Ⅳ-20-84～86、図版25-1）

6点出土し、全て砂岩である。3点を図示した。84・85は断面三角形の薄い縁辺を擦り面として利用したもの。86は半楕円形の扁平な礫を素材として両側縁に敲打によってノッチ状の縁辺を作出し、下縁中央部には敲打による剥離面が残る。平面的には北海道石冠に類似する。

台石（図Ⅳ-20-87、図版24-1）

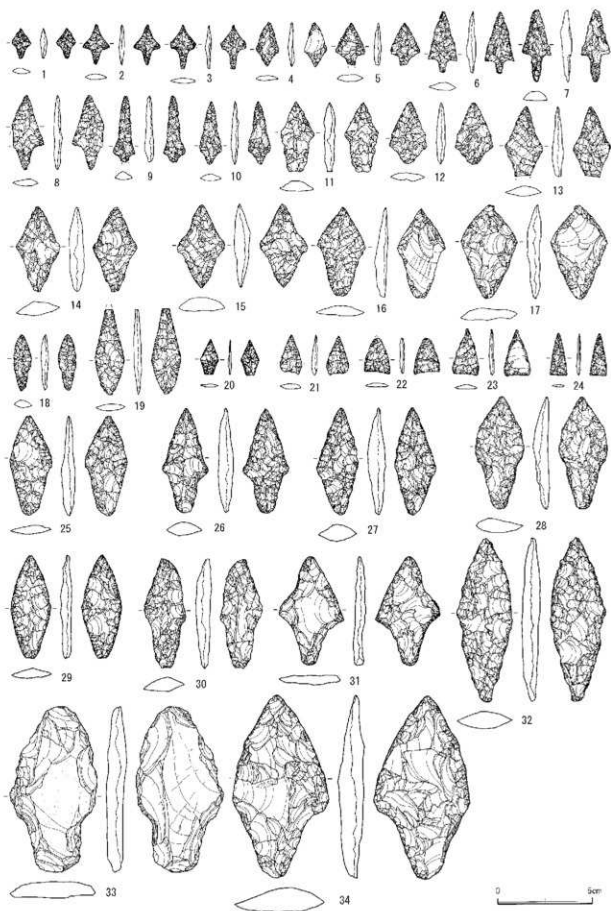
4点出土し、全て砂岩である。1点を図示した。87はやや厚手の扁平な礫素材である。

砥石（図Ⅳ-21-88～90、図版24-1）

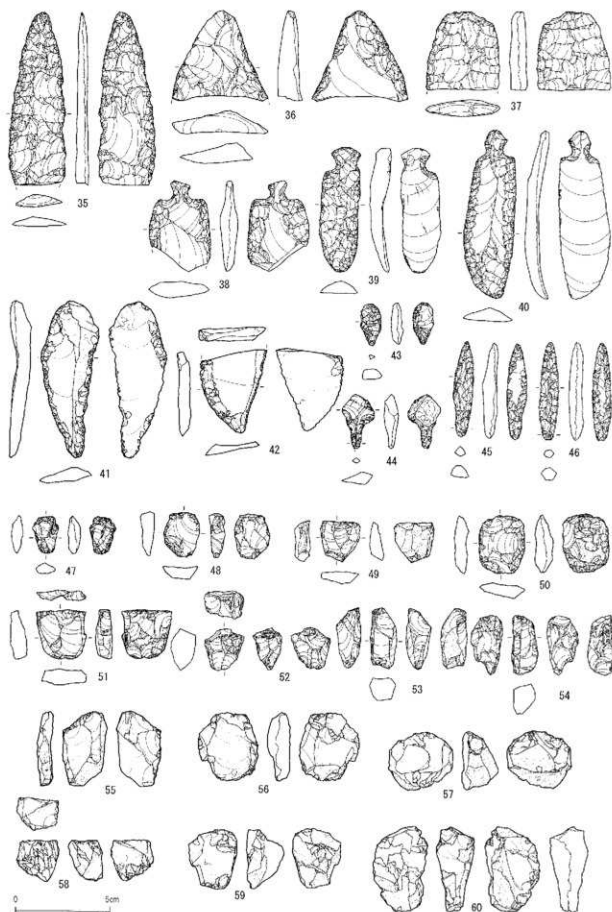
40点出土し、砂岩39点、凝灰岩1点である。3点を図示した。88は凝灰岩、89・90は砂岩製である。88・89は角柱状で、複数の擦り面がある。90は薄手で扁平な素材で両面に擦り面がある。

垂飾（図Ⅳ-21-91、図版24-1）

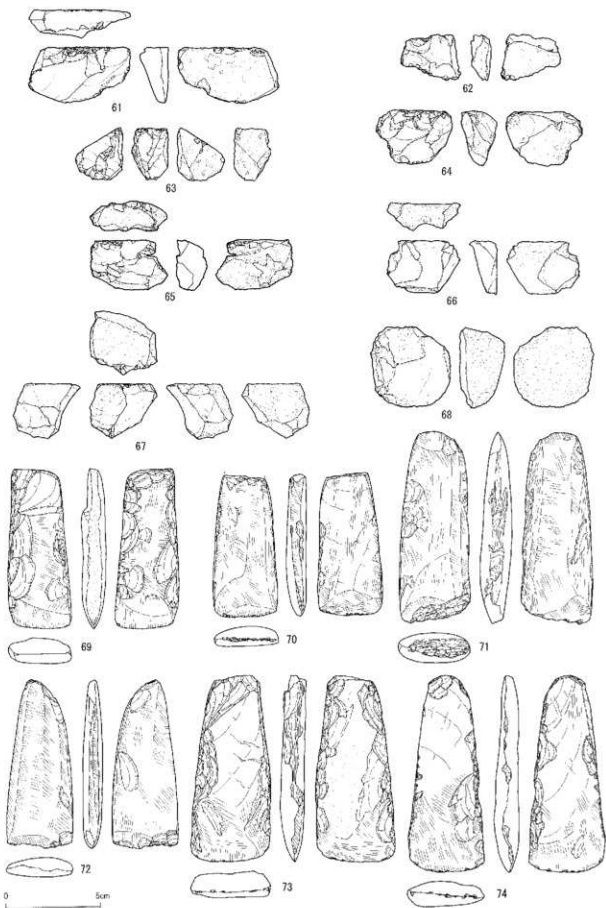
1点出土している。1点を図示した。91は滑石製で、断面四角形、平面形は弧状である。やや粗い擦痕が全面的に残り、右側縁は長軸方向に、それ以外の面は短軸方向の研磨で整形される。上端には両側から穿孔された穴がある。



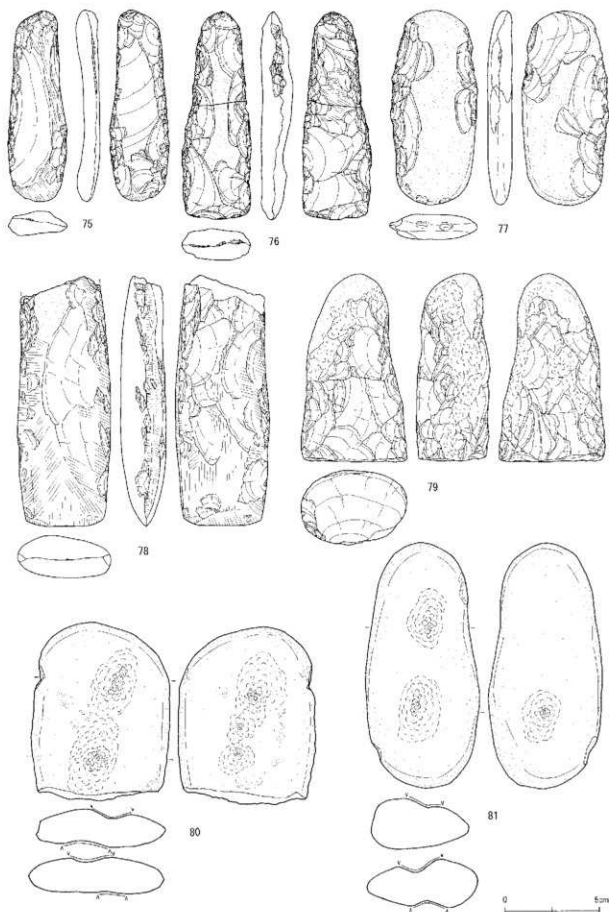
図IV-16 包含層出土石器 (1)



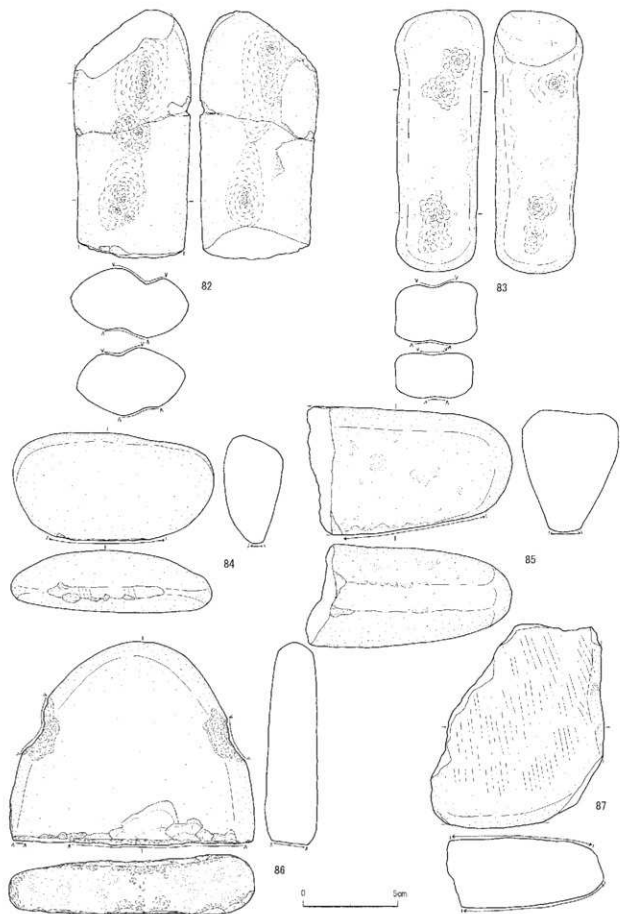
図IV-17 包含層出土石器(2)



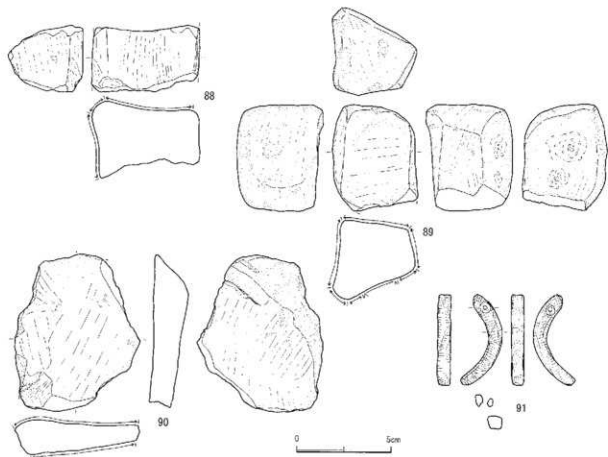
図Ⅳ-18 包含層出土石器 (3)



図IV-19 包含層出土石器(4)



図Ⅳ-20 包含層出土石器 (5)



図IV-21 包含層出土石器 (6)

礫 (図版24-1)

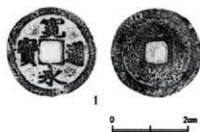
564点出土している。1点を写真で掲載した。92は泥岩製で、やや大型の環状の自然礫である。

4 金属製品

寛永通宝 (図IV-22-1、図版24-1)

1点出土している。

(鈴木)



図IV-22 包含層出土金属製品

表Ⅳ-1 包含層出土遺物一覧

種別	分類	石材	層位				総計	
			I	II	III	B 調		
土器ほか	土器	I			1		1	
		II		1			1	
		III	435	3,332	775	1	4,543	
		III a	15	108	44		167	
		III b	10	45	9		64	
		IV	438	2,048	608	5	3,099	
		IV b		2	1		3	
		IV b 1	56	282	21		359	
		IV b 2	18	72	10		100	
		IV b 1・2		15			15	
		IV b 3	3				3	
		IV c	3	11			14	
		V	5,159	9,215	849		15,223	
		VI		1			1	
不明	20	1			21			
					4	4		
	土製品		1	1	2		4	
	土玉				1		1	
	焼成粘土塊		13	47	2		62	
土器ほか	小計		6,171	15,181	2,323	10	23,685	
石器ほか	石鏃	I a	黒曜石	10	13	1		24
			メノウ		1			1
		I b	黒曜石	1	6			7
		I c	黒曜石		1	1		2
		I d	黒曜石	4	9	5		18
		I e	黒曜石	3	4	2		9
		II	黒曜石		1	1		2
		III a	黒曜石	1	3	1		5
		III b	黒曜石	1				1
		IV	黒曜石	7	6			13
			頁岩		1			1
		石槍	黒曜石	8	23	6		37
			片岩		1			1
		ナイフ	頁岩	1				1
	両面調整石器	黒曜石	18	25	5		48	
		珪岩	1	1			2	
		メノウ		1			1	
		安山岩	1				1	
		頁岩			1		1	
		緑色泥岩		1			1	
	つまみ付きナイフ	黒曜石		5			5	
		頁岩		4	1		5	
	スクレイパー	黒曜石	8	11	1	1	21	
		頁岩	1	2			3	
	石鏟	黒曜石		5			5	
		メノウ		3			3	
		頁岩		2	1		3	
		安山岩		1			1	
		黒曜石	16	23	8		47	
	楔形石器 二次加工ある剥片	黒曜石	58	86	18		162	
		頁岩	2	5	1		8	
		メノウ	1	3			4	
		珪岩	2	1			3	
片岩			1	1		2		
泥岩			1			1		
緑色泥岩			1			1		

種別	分類	石材	層位			B 調	総計
			I	II	III		
	割片	黒曜石	1,581	2,602	863		5,046
		片岩	52	118	86		256
		緑色泥岩	64	123	56		243
		頁岩	17	26	9		52
		珪岩	9	31	7		47
		凝灰岩	2	24	8		34
		メノウ	4	23	4		31
		泥岩	6	10	4		20
		安山岩	4	4	2		10
		砂岩	1	7	1		9
		チャート	2	5	1		8
		玄武岩			1		1
		碧玉	1				1
石核	黒曜石	13	40	8		61	
	メノウ		2			2	
	珪岩	1	1			2	
	凝灰岩		1			1	
	頁岩			1		1	
石斧	緑色泥岩	6	29	8		43	
	片岩	1	8	3		12	
	砂岩		1			1	
	蛇紋岩	1				1	
	泥岩	1				1	
砥石	砂岩	4	31	4		39	
	凝灰岩			1		1	
	砂岩	4	21	3		28	
たたき石	砂岩	4	21	3		28	
すり石	砂岩	2	3	1		6	
台石	砂岩	1	2	1		4	
原石	黒曜石		1			1	
	メノウ		1			1	
礫	砂岩	36	284	50	2	372	
	安山岩	11	52	12		75	
	緑色泥岩	4	16	6		26	
	片岩	4	16	3		23	
	泥岩	2	15	4		21	
	凝灰岩	1	10	2		13	
	流紋岩		8	1		9	
	軽石		4	2		6	
	メノウ		4	1		5	
	チャート		2	2		4	
	珪化木		3			3	
	花崗岩			1		1	
	珪岩		1			1	
	礫岩		1			1	
	不明		5			5	
垂飾	滑石			1		1	
	小計	1,980	3,786	1,211	3	6,980	
その他	古銭	1	1			2	
	高師小僧	4		2		6	
その他 小計	5	1	2	0	8		
総計		8,095	18,968	3,536	12	30,673	

表IV-2 包含層出土掲載土器一覧

洞窟	図版	番号	調査区	層位	点数	分類	器形	部位	文様はか
N-6	143	1	E2	Ⅱ	1	1b	深鉢	胴部	①熱めさ向組
N-6	143	2	N10	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	②縄文施文後ナデ
N-6	143	3	H5 K4	Ⅱ	1 4	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR ②平竹キザミ③隆帯無面 平竹削突、突起下縁状貼付
N-6	143	4	L9	Ⅰ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR ②ヘウキザミ③隆帯無面 平竹削突
N-6	143	5	表探	Ⅰ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR ②平竹キザミ・縄痕・LR③隆帯上 平竹押引き・削突
N-6	143	6	D8	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR (多葉) ②口唇外面 平竹沈線③隆帯上 平竹押引き
N-6	143	7	J6	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①無②キザミ③隆帯上 押引き
N-6	143	8	H8	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR (多葉) ②平竹押引き③平竹 平行沈線
N-6	143	9	C4	Ⅱ	2	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR③隆帯上・無面 平竹押引き・削突
N-6	143	10	F7	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR③隆帯上 平竹押引き
N-6	143	11	K5	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	②平竹キザミ・沈線③隆帯無面 平竹 (狭) 削突、平竹 (幅広) 押引き
N-6	143	12	L9	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①RLR ②平竹キザミ③平竹 平行沈線④隆帯無面 平竹削突
N-6	143	13	C11	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①RL ②ヘウキザミ
N-6	143	14	J5	Ⅱ	2	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR (多葉) ②ヘウキザミ
N-6	143	15	I5	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR (多葉) ②ヘウキザミ
N-6	143	16	H7	Ⅱ	2	Ⅱa	深鉢	口縁	①LR
N-6	143	17	D10	Ⅱ	4	Ⅱa	深鉢	胴部	①RLR (多葉) ②平竹 平行沈線③隆帯無面 平竹削突
N-6	143	18	K5	Ⅰ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①RLR ②平竹 (幅広) 平行沈線③隆帯無面 平竹 (幅狭) 削突
N-6	143	19	I5	Ⅱ	2	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR ②種 (平竹の外周) 平行沈線③隆帯無面 種 (平竹の外周) 削突
N-6	15-1	20	F4	Ⅱ	5	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR (多葉) ②隆帯上・無面 平竹押引き・削突
N-6	15-1	21	J4 K5	Ⅱ	1 2	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR (多葉) ②隆帯上 平竹押引き
N-6	15-1	22	J3 J5	Ⅱ	1 3	Ⅱa	深鉢	胴部	①RLR ②平竹 平行沈線③隆帯貼付
N-6	15-1	23	J5	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR (多葉) ②隆帯上 平竹押引き
N-6	15-1	24	G3	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR (多葉) ②平竹 平行・山形沈線
N-6	15-1	25	E7 E8 E10	Ⅱ	1 1 1	Ⅱa	深鉢	胴部	①RLR (多葉) ②平竹 平行沈線
N-7	15-1	26	B4	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR ②平行・波状沈線
N-7	15-1	27	F8	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR ②平行・波状沈線
N-7	15-1	28	C6	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR ②ミガキ (縦方向) ③幅広 平行・波状沈線
N-7	15-1	29	H9	Ⅰ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①結束第1種 (LR・RL)
N-7	15-1	30	I2	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①結束第1種 (LR・LR)
N-7	15-1	31	H4	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	胴部	①LR・RL (多葉)
N-7	15-1	32	I8	Ⅱ	1	Ⅱa	深鉢	底部	①LR ②直角張出す・平底
N-7	15-1	33	E6	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	①結束第2種 (LR・不明) ②結束第2種 (LR・LR) (縦回転) ③ヘウ押引き④円形削突⑤肥厚帯 ヘウ押引き2列
N-7	15-1	34	D3 G3	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②結束第2種 (LR・RL) ③円形削突④肥厚帯ヘウ押引き3列⑤赤彩
N-7	15-1	35	E3	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	②LR ③種削突④円形削突⑤肥厚帯 ヘウ押引き2列
N-7	15-1	36	G5 G5	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR (縦回転) ③ヘウ押引き④円形削突⑤肥厚帯 ヘウ押引き内外面2列、外面縦溝あり
N-8	15-1	37	J4	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②ヘウ押引き③円形削突④肥厚帯 ヘウ押引き内外面2列⑤赤彩
N-8	15-1	38	B1	Ⅰ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR 横走気味 (縦回転) ③円形削突④肥厚帯 ヘウ2本1対の工具による押引き
N-8	15-1	39	J3	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	③種削突④円形削突
N-8	15-1	40	D10	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	胴部	①LR ②LR (縦回転) ④円形削突⑤外縁
N-8	15-1	41	H6	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	胴部	①結束第2種 (LR・LR) ②LR ③円形削突④肥厚帯 種2本1対押引き
N-8	15-1	42	F5	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	①結束第2種 (LR・LR) ②結束第2種 (LR・RL) ③円形削突
N-8	15-1	43	D4 F4	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR (縦回転) ③円形削突
N-8	15-1	44	E8 H4	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ③円形削突
N-8	15-1	45	H4 H5 C10	Ⅱ	1 2 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR (縦回転) ③円形削突
N-8	15-1	46	E7 E8	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR (縦回転) ③円形削突
N-8	15-1	47	E6 K4	Ⅱ	3 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①結束第1種 (LR・RL) ③円形削突
N-8	15-1	48	H	Ⅱ	1	Ⅱb	深鉢	口縁	①結束第2種 (LR・RL)
N-8	15-1	49	D2 I2	Ⅱ	1 1	Ⅱb	深鉢	口縁	①LR ②LR ③隆帯上LR

①縄文 (外面) ②縄文 (内面) ③口唇④内面⑤沈線・縄痕⑥爪形・削突・キザミ⑦隆帯・貼付は⑧接合部⑨底部形態⑩その他
種: 棒状工具、平竹・半截竹管状工具、ヘラ・ヘウ状工具、中空・中空工具、さき・先端部がさく穴立った工具、角・先端部三角形の工具、爪・爪形文

種別	図版	番号	調査区	層位	点数	分類	形状	部位	文様はか			
Ⅷ-8	15-1	50	D10	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR(縦回転)②LR縦走(斜回転)③ヘラ押引き2列並赤彩			
		51	J4	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR縦走(縦回転)②LR(斜回転)③ヘラ押引き1列並赤彩			
Ⅷ-8	15-1	52	E8	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR、縁飾②内形刺突③ヘラ押引き1列			
		53	H4	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①筋束第2種(不明・LR)②ヘラ2本1列押引き2列			
Ⅷ-8	15-1	54	G4	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR③ヘラ 平行沈線			
										G3	Ⅱ	1
										G4	Ⅱ	2
										G4	Ⅱ	1
Ⅷ-8	16-1	56	F6	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR・縁飾②外縁			
		57	G4	Ⅱ	4	Ⅲb	深鉢	胴部	①LR			
Ⅷ-8	16-1	58	K5	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①東ね縄			
		59	J4	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	胴部	①東ね縄			
Ⅷ-8	16-1	60	K4	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	底部	①東ね縄②平底			
		61	G6	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	底部	①LR②底部中央やや窪む			
Ⅷ-8	16-1	62	E6	Ⅱ	1	Ⅲb	深鉢	底部	①筋束第1種(RL・LR)②平底			
		63	D3	Ⅱ	5	Ⅲb	深鉢	底部	①無②底部中央窪む			
Ⅷ-8	16-1	64	I3	Ⅱ	11	Ⅳa	深鉢	口縁-胴部	①RL・LR②タガ状貼付・口縁LR			
		65	C7	Ⅱ	4	Ⅳa	深鉢	口縁	①RL②タガ状貼付RL			
Ⅷ-8	16-1	66	C2	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	胴部	①RL・LR②タガ状貼付LR			
		67	C2	Ⅱ	2	Ⅳa	深鉢	胴部	①LR②タガ状貼付LR			
Ⅷ-9	16-1	68	K3	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	胴部	①LR・RL②タガ状貼付RLR			
		69	D5	Ⅱ	2	Ⅳa	深鉢	口縁	①LR③RL④段下部中空形刺突2列⑤口縁RL、矢印状貼付LR横走(斜回転)			
Ⅷ-9	16-1	70	D5	Ⅱ	3	Ⅳa	深鉢	口縁	①LR⑥中空形刺突2列⑦縦の貼付上LR(縦回転)			
		71	E3	Ⅱ	3	Ⅳa	深鉢	口縁	①LR③LR④段下部中空形刺突(斜下から)			
Ⅷ-9	16-1	72	O6	Ⅱ	3	Ⅳa	深鉢	口縁	①RL②LR縦線2条			
		73	E3	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	口縁	①RL③RL			
Ⅷ-9	16-1	74	F6	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	口縁	①RL・LR②LR横走(斜回転)、RL縦走(斜回転)③LR④縄文文後、ナゲ調整(外面斜方向、内面横方向)			
		75	H5	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	口縁	①RL・LR②LR(縦回転)③縄文文後、ナゲ調整(内面横方向)			
Ⅷ-9	16-1	76	D3	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	胴部	③不明			
		77	J6	Ⅱ	2	Ⅳa	深鉢	底部	①LR②平底			
Ⅷ-9	16-1	78	J6	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	底部	①LR②底角やや突出す、平底			
		79	D10	Ⅱ	1	Ⅳa	深鉢	胴部	①LR			
Ⅷ-9	17-1	80	F7	Ⅱ	24	Ⅳb1	深鉢	口縁-胴部	①LR③LR④口縁部:連続山形、胴部:連続扇状沈線・縄文帯輪郭⑤波状口縁⑥外縁⑦口径18.1cm			
										F7	Ⅱ	1
										E4	Ⅱ	5
Ⅷ-9	16-1	81	F3	Ⅱ	1	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③LR④ミガキ⑤平行・流水状沈線			
		82	E4	Ⅱ	2	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③LR④ミガキ⑤山形沈線			
Ⅷ-9	16-1	83	F3	Ⅱ	3	Ⅳb1	深鉢	胴部	①LR⑤山形沈線			
		84	K3	Ⅱ	1	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③LR④ミガキ⑤縦位平行・弧状沈線⑥波状口縁			
Ⅷ-10	17-1	85	E7	Ⅱ	5	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③ミガキ、波頭部棒キザ④ミガキ⑤平行沈線⑥山形突起、段部無文			
		86	H7	Ⅱ	1	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③ミガキ、波頭部棒キザ④ミガキ⑤山形沈線⑥波状口縁、波頭部沈線交点棒刺突(下から)			
Ⅷ-10	17-1	87	J3	Ⅱ	2	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤横走・弧状沈線			
		88	J8	Ⅱ	1	Ⅳb1	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑥波状口縁			
Ⅷ-10	17-1	89	H6	Ⅱ	2	Ⅳb1	深鉢	胴部	①LR③横走・弧状沈線④縄文文後、ミガキ			
		90	E3	Ⅱ	1	Ⅳb2	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤玉指き三又文風沈線⑥波状口縁、口縁部無文帯有り(ミガキ)			
Ⅷ-10	17-1	91	H5	Ⅱ	2	Ⅳb2	浅鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤平行・括弧状沈線			
		92	J8	Ⅱ	1	Ⅳb2	深鉢	口縁	①LR③LR④ミガキ⑤平行・縦位絶行沈線			
Ⅷ-10	17-1	93	H5	Ⅱ	1	Ⅳb2	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤平行・縦位絶行沈線⑥波状口縁、口縁部無文帯有り(ミガキ)			
										H6	Ⅱ	2
										G2	Ⅱ	1
Ⅷ-10	17-1	94	G2	Ⅱ	1	Ⅳb2	深鉢	口縁	①RL③ミガキ④ミガキ⑤平行・括弧状沈線⑥口縁部無文帯有り(ミガキ)			
		95	J7	Ⅳ	1	Ⅳb2	深鉢	口縁	①LR③ミガキ④ミガキ⑤平行・縦位絶行沈線⑥口縁部無文帯有り(ミガキ)			
Ⅷ-10	17-1	96	F5	Ⅱ	5	Ⅳb2	深鉢	胴部	①LR⑤平行・縦位絶行沈線⑥口縁部無文帯有り			
		97	E7	Ⅱ	2	Ⅳb2	深鉢	胴部	①LR⑤平行・縦位絶行沈線			
Ⅷ-10	17-1	98	G3	Ⅱ	1	Ⅳb2	深鉢	胴部	①LR③ミガキ⑤平行・括弧状沈線⑥口縁部無文帯・縄文交互⑦口縁部絶行接合部外縁			
		99	I3	Ⅱ	5	Ⅳb2	深鉢	胴部	①LR④縄文文後、ミガキ			
Ⅷ-10	17-1	100	F3	Ⅱ	4	Ⅳb2	深鉢	胴部	①LR④縄文文後、ミガキ			

所属	版数	番号	調査区	層位	点数	分類	形状	部位	文様ほか
N-10	17-1	101	E12	Ⅱ	2	Bb②	深鉢	底部	①無文平底
N-10	17-1	102	F3	Ⅱ	1	Bb②	深鉢	底部	①無文平底
N-10	17-1	103	赤塚	Ⅰ	1	Bb③	深鉢	口縁	①LR・RL・1区②ミガキ③ミガキ④横走沈線⑤口唇外面棒キザミ
N-10	17-1	104	L10	Ⅰ	1	Bb③	深鉢	胴部	①LR・LR④横走沈線⑤段上棒キザミ(下から)
N-10	17-1	105	B5	Ⅰ	1	Bc	深鉢	胴部	①LR④刺突(内面から)
N-10	17-1	106	G5	Ⅱ	3	Bc	注口	口縁	①LR(縦回転)⑤平行沈線⑥107と同一個体
N-10	17-1	107	G5	Ⅱ	5	Bc	注口	胴部	①LR(縦回転)⑤平行沈線⑥胴・胴部接合部外縁⑦106と同一個体
N-10	17-1	108	B4	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ④ヘラナデ(横方向)⑤爪1列(左斜上)⑦口縁部無文帯有り
N-10	17-1	109	F3	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ(斜)⑤爪1列(左から)、押さえ痕⑦口縁部無文帯有り
N-10	17-1	110	K3	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ⑤爪1列(左から)⑦口縁部無文帯有り⑧内縁
N-10	17-1	111	F3	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①RL③棒刺突(右から)⑤爪2列(左斜上から)
N-10	17-1	112	J4	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①RL③棒刺突(右から)⑤爪3列(左斜上から)
N-10	18-1	113	H5	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①LR③LR⑤爪(2)列(右から)、押さえ痕⑦口縁部無文帯有り
N-10	18-1	114	F2	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ⑤爪1列(右から)、押さえ痕
N-10	18-1	115	H4	Ⅱ	2	V	深鉢	口縁	①不明③棒キザミ(交互)⑤上2列棒刺突(右斜下から)、下1段爪(右から)⑦口縁部無文帯有り
N-10	18-1	116	B5	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR⑥棒刺突4列(右下から)
N-11	18-1	117	B5	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ(交互)④ミガキ⑥棒刺突2列(右から)⑦口縁部無文帯有り
N-11	18-1	118	E2	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③ヘラキザミ⑤棒刺突3列(右から)⑦口縁部無文帯有り
N-11	18-1	120	B4	Ⅰ	3	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③棒キザミ⑤棒刺突3列(下から)
N-11	18-1	121	P6	Ⅱ	2	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③棒刺突(右から)④ヘラミガキ⑥棒刺突2列(下から)
N-11	18-1	122	G6	Ⅱ	1	V	深鉢	胴部	①無文棒刺突(下から) 縦状
N-11	18-1	123	D5	Ⅱ	2	V	深鉢	口縁	①LR③押圧による小成状⑤交互対向連弧状沈線
N-11	18-1	124	H4	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒刺突(右から)⑤交互対向連弧状沈線⑦125と同一個体
N-11	18-1	125	F8	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③押圧による小成状⑤交互対向連弧状沈線⑦124と同一個体
N-11	18-1	126	E5	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①無④ヘラナデ⑤交互対向連弧状沈線
N-11	18-1	127	D5	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①無④ヘラキザミ⑤横走・弧状沈線
N-11	18-1	128	F2	Ⅱ	1	V	深鉢	胴部	①無⑤弧状組合せ沈線
N-11	18-1	129	H7	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒刺突(右から)⑤平行沈線
N-11	18-1	130	H	Ⅱ	1	V	深鉢	胴部	①RL④ヘラナデ⑤平行沈線
N-11	18-1	131	M10	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)⑤平行沈線⑥棒刺突(3)列(下から)
N-11	18-1	132	F2	Ⅰ	1	V	深鉢	胴部	①RL⑤平行・斜行沈線⑥棒刺突(下から)
N-11	18-1	133	G6	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③内外面棒キザミ(交互)⑤平行沈線⑥ヘラキザミ3列
N-11	18-1	134	H	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①無③LR⑤縄線(LR)3条
N-11	18-1	135	L10	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③縄キザミ(RL)④ヘラナデ⑤縄線(RL)2条
N-11	18-1	136	F3	Ⅰ	1	V	鉢	口縁	①RL④ヘラキザミ(斜)⑦小突起
N-11	18-1	137	H6	Ⅱ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ④ヘラミガキ⑦口縁部無文帯有り
N-11	18-1	138	E6	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①RL③棒キザミ④ヘラナデ
N-11	18-1	139	C6	Ⅱ	3	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ(一部)
N-11	18-1	140	F2	Ⅱ	2	V	深鉢	口縁	①LR③棒キザミ
N-12	18-1	141	E6	Ⅱ	3	V	深鉢	口縁	①LR③棒刺突(右から)④ミガキ
N-12	18-1	142	P6	Ⅱ	2	V	深鉢	口縁	①RL縦走(縦回転)③棒刺突(右から)④ヘラミガキ⑤内縁
N-12	18-1	143	G2	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒刺突(左から)⑦口縁部無文帯有り
N-12	18-1	144	G2	Ⅰ	1	V	深鉢	口縁	①LR③棒刺突(左から)⑦口縁部無文帯有り
N-12	18-1	145	G6	Ⅱ	3	V	深鉢	口縁	①LR⑦口縁部無文帯有り
N-12	18-1	146	F2	Ⅱ	8	V	深鉢	口縁	①RL⑦口縁部無文帯有り
N-12	18-1	147	H5	Ⅰ	3	V	深鉢	胴部	①LR④ヘラミガキ⑦148と同一個体

①縄文(外面) ②縄文(内面) ③口唇④内面⑤沈線・縄線⑥爪形・刺突・キザミ⑦隆帯・貼付は⑧接合部⑨底部形状⑩その他
 棒: 棒状工具、平竹: 手敷竹管状工具、ヘラ: ヘラ状工具、中空: 中空工具、さき: 先端部がさきくえられた工具、角: 先端部角形の工具、爪: 爪形文

神国	図版	番号	調査区	層位	点数	分類	形状	部位	文様はか	
IV-12	19-1	148	H4	I	1	V	深鉢形	胴部	① LR④ヘラミガキ⑩147と同一個体	
				H5	I					3
				H5	II					4
IV-12	19-1	149	C5	II	1	V	浅鉢	口縁	① LR③棒刺突(右から)⑥ヘラキギミ3列⑦口縁部無文地帯有り	
				C6	II					3
				E7	II					1
				G2	II					10
IV-12	19-1	150	H2	II	1	V	浅鉢	口縁～ 底部	① RL,R,底 RL,R③棒キギミ(一部)⑦口縁部無文有り	
				E2	II					4
IV-12	19-1	151	F2	II	1	V	浅鉢	口縁～ 胴部	① LR③棒キギミ⑦口縁部無文有り	
				E3	II					1
				F2	II					2
				D10	II					1
IV-12	19-1	152	H4	II	2	V	浅鉢	口縁	① RL 縦走(斜回転)④ヘラミガキ	
				H5	I					2
IV-12	19-1	153	F3	II	12	V	浅鉢	口縁	① LR④ヘラミガキ⑦口縁部無文有り⑥内縁	
IV-12	19-1	154	F7	II	2	V	浅鉢	口縁	① RL③突起部棒キギミ⑦口縁部無文有り	
IV-12	19-1	155	F5	I	2	V	浅鉢	口縁	① LR③ LR	
IV-13	19-1	156	G6	II	8	V	浅鉢	口縁	① LR③突起部棒キギミ、沈線⑩157と同一個体	
IV-13	19-1	157	G6	II	2	V	深鉢	底部	① RL,底 RL,⑨底角張出す,平底⑩156と同一個体	
IV-13	19-1	158	B4	II	1	V	浅鉢	口縁	① LR③形沈線,棒刺突(左から)④ヘラナデ⑦2個の突起	
				G6	II					3
IV-13	19-1	159	B3	I	1	V	浅鉢	口縁	①無③棒刺突2列(内側から)⑤弧状沈線⑦突起部下穿孔2か所	
IV-13	19-1	160	D6	I	1	V	浅鉢	口縁	①無③棒刺突・沈線⑦内形突起	
IV-13	19-1	161	B4	II	1	V	浅鉢	口縁	①無③棒刺突(左から),内面棒刺突(下から),突起棒キギミ⑦2個の突起	
IV-13	19-1	162	E3	II	1	V	浅鉢	口縁	① LR③突起上棒刺突④ヘラナデ(横方向)⑦突起2か所縦文飾文後付足す	
IV-13	19-1	163	N11	I	1	V	浅鉢	口縁	① RL③厚部同心円状縦線,外面棒キギミ⑦縦位厚部穿孔	
IV-13	19-1	164	L3	II	1	V	浅鉢	口縁	① RL③縄キギミ④ヘラミガキ	
IV-13	19-1	165	H4	II	1	V	浅鉢	口縁	① RL③縄キギミ④ミガキ⑦突起部下穿孔	
IV-13	19-1	166	B4	I	2	V	浅鉢	口縁	① LR③内外面棒キギミ,ヘラナデ④ヘラナデ⑦口縁部無文有り,口縁部一部内側に折り込む	
				II	11					
				B4	II					1
IV-13	19-1	167	D5	I	1	V	浅鉢	口縁	① LR③突起部内面棒刺突・短沈線⑦口縁部無文有り	
				D5	II					1
IV-13	19-1	168	H4	II	1	V	浅鉢	口縁	① RL 縦走(斜回転)③棒キギミ④ヘラミガキ⑦突起部下穿孔,口縁部無文有り,台形状突起,突起横内側に折り込む	
IV-13	19-1	169	G2	II	1	V	浅鉢	口縁	① LR③ヘラキギミ⑤弧状沈線⑦沈線部内側に折り込む	
				G2	I					1
IV-13	19-1	170	G6	I	1	V	浅鉢	口縁	① RL③突起部内面棒キギミ⑦突起3か所外反,口縁部無文有り	
				G6	I					1
				H3	I					1
IV-13	19-1	171	I5	II	1	V	浅鉢	口縁	①無③棒刺突(左右から)⑥棒刺突1列(左から)⑦突起部内側に折り込む	
				H3	I					1
IV-13	19-1	172	F2	II	2	V	浅鉢	口縁	① RL③棒キギミ(内外面交互)⑦口唇部キギミで内側に折り出す,口縁部無文有り⑩173と同一個体	
				F6	II					1
IV-13	19-1	173	G6	II	3	V	浅鉢	口縁	① LR③棒キギミ(一部)⑦口縁部無文有り⑩172と同一個体	
				H6	II					1
IV-13	19-1	174	G2	II	2	V	浅鉢	口縁	① LR⑦口縁部無文有り	
IV-13	19-1	175	B4	II	1	V	浅鉢	口縁	① LR④ヘラナデ⑦突起部内側に折り込む	
IV-13	19-1	176	E6	II	1	V	浅鉢	口縁	①無③突起外面縦位沈線⑥突起内面 棒刺突⑤内縁	
IV-13	19-1	177	M10	II	1	V	浅鉢	胴部	① RL 縦走(斜回転)③平行沈線⑤沈線下 棒刺突(下から)	
IV-13	19-1	178	D7	I	1	V	浅鉢	胴部	① RL 縦走(斜回転)③平行沈線⑤沈線間・隆帯上 棒刺突	
IV-13	19-1	179	G6	II	2	V	浅鉢?	胴部	① LR(縦回転)⑤平行沈線	
IV-13	20-1	180	E3	II	7	V	浅鉢	胴部	①無	
IV-14	20-1	181	D10	II	3	V	台付皿	口縁～ 胴部	①無③内外面ヘラナデ⑥内縁⑩口径 32.0cm	
				E2	I					1
				E2	II					26
				E3	I					1
				F2	II					3
				F3	I					1
				F3	II					5
IV-14	20-1	182	B4	II	5	V	浅鉢	口縁	①無③ミガキ④ミガキ⑥突起部 棒刺突(左から)⑦外面ミガキ⑩143と同一個体	
				B4	I					1
IV-14	20-1	183	B4	I	1	V	浅鉢	底部	①無③ミガキ⑥底部付近 角刺突1列(右から)⑦外面ミガキ⑩142と同一個体	
IV-14	20-1	184	M3	I	1	V	壺	口縁	①無③口唇下1条横走沈線	

時期	図版	番号	調査区	層位	点数	分類	形状	部位	文様ほか
N-14	20-1	185	F2	Ⅱ	1	V	壺	肩部	①無④ヘラミガキ⑤隆帯上・平行沈澱・キザミ
N-14	20-1	186	E2	Ⅰ	1	V	壺	肩部	①不明⑤断続山形沈澱⑥187・188と同一個体
N-14	20-1	187	F2	Ⅱ	2	V	壺	肩部	①LR・縦走(斜回転)②平行・交互対向弧線状沈澱③沈澱間角刺突(右下から)、ヘラミガキ④186・188と同一個体
N-14	20-1	188	F2	Ⅱ	3	V	壺	肩部	①LR・縦走(斜回転)②平行・交互対向弧線状沈澱③沈澱間角刺突(右下から)、ヘラミガキ④186・187と同一個体
			G2	Ⅱ	1				
N-14	20-1	189	F2	Ⅱ	1	V	壺	肩部	①不明⑤断面状、隆帯上横走沈澱
N-14	20-1	190	I3	Ⅱ	1	V	壺	肩部	①無⑤平行・弧状沈澱
N-14	20-1	191	F2	Ⅱ	1	V	壺	肩部	①肩部RL、胴部RL・縦走(斜回転)②平行沈澱
N-14	20-1	192	D2	Ⅱ	1	V	壺	胴部	①無⑦外面ミガキ、かさぶた状剥落
N-14	20-1	193	E5	Ⅱ	4	V	壺	胴部	①LR(肩のみ)④ヘラナデ⑤平行沈澱
N-14	20-1	194	G6	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①不明⑨低い高台
N-14	20-1	195	G6	Ⅰ	1	V	蓋形片	底部	①RL、底RL④ミガキ⑨低い高台
			G7	Ⅱ	1				
N-14	20-1	196	B4	Ⅰ	2	V	蓋形片	底部	①RL④ヘラナデ⑨低い高台
			B4	Ⅱ	3				
N-14	20-1	197	E3	Ⅰ	1	V	蓋形片	底部	①LR⑨底内張出す、平底
N-14	20-1	198	C4	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①LR、底LR④ヘラナデ⑨上げ底気味
N-14	20-1	199	G6	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①LR、底LR⑤内縁⑨上げ底気味
N-14	20-1	200	B4	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①LR、底LR④ミガキ⑤底部付近爪1列(右から)、押さえ軌⑨上げ底気味
N-14	20-1	201	B5	Ⅰ	1	V	蓋形片	底部	①LR、底LR⑤底部付近爪1列(左から)、押さえ軌⑨上げ底気味
N-15	20-1	202	E3	Ⅱ	2	V	蓋形片	底部	①LR、底LR④ヘラナデ⑥爪1列(右から)
			B10	Ⅰ	1				
N-15	20-1	203	C6	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①LR、底LR④ヘラナデ(横方向)⑨上げ底気味
			D10	Ⅱ	2				
N-15	20-1	204	C1	Ⅰ	1	V	蓋形片	底部	①LR④ヘラナデ⑤平行沈澱⑨凹底
N-15	20-1	205	B4	Ⅱ	2	V	蓋形片	底部	①LR、底LR⑨平底
N-15	20-1	206	G2	Ⅱ	2	V	蓋形片	底部	①LR、底LR⑨凸底
N-15	20-1	207	F2	Ⅱ	4	V	皿	底部	①RL、底RL⑨丸底
N-15	21-1	208	F2	Ⅱ	1	V	蓋形片	底部	①LR⑨低い高台
N-15	20-1	209	B4	Ⅱ	5	V	皿	台部	①LR⑤対向底状沈澱⑥棒刺突2列(左から)⑦高台透かし孔有り高台
			E6	Ⅱ	1				
			E6	Ⅱ	1				
			G6	Ⅱ	1				
N-15	21-1	210	F2	Ⅱ	8	V	皿	台部	①無④ヘラナデ⑤平行・対向連続弧線状沈澱⑥沈澱間ヘラミガキ⑦光増⑧高台透かし孔有り高台
N-15	21-1	211	G6	Ⅱ	3	V	皿	台部	①LR⑥凹形刺突列(縦位)②本体・高台接続部
			H6	Ⅱ	2				
N-15	21-1	212	B4	Ⅱ	3	V	皿	台部	①無④内底面ミガキ⑤高台
N-15	21-1	213	E3	Ⅱ	1	V	皿	台部	①無⑧高台透かし孔有り高台
N-15	21-1	214	G6	Ⅰ	1	V	口縁～底部	口縁	①LR・縦走(斜回転)④ヘラナデ⑥底部付近棒刺突1列(右から)⑦凸底⑧口径8.8cm、器高5.0cm、底径6.6cm
			G6	Ⅱ	2				
N-15	21-1	215	B4	Ⅱ	3	V	口縁～胴部	口縁	①無④ヘラナデ⑤平行・対向連続弧線状沈澱⑥棒刺突4列(左から)、捲れ有り
N-15	21-1	216	H5	Ⅰ	2	V	口縁～胴部	口縁	①無④ヘラナデ
N-15	21-1	217	G6	Ⅱ	1	V	口縁～胴部	底部	①無⑤能行沈澱⑥棒刺突(斜めから)
N-15	21-1	218	E6	Ⅰ	1	V	口縁～胴部	底部	①LR
			G6	Ⅱ	2				
N-15	21-1	219	F7	Ⅱ	1	M	漆片	胴部	①LR・帯縄文⑤平行沈澱⑥棒刺突
N-15	21-1	220	C5	Ⅰ	1	M	漆片	口縁	⑦外面ヘラナデ
			D3	Ⅰ	1				
N-15	21-1	221	B4	Ⅰ	1	M	漆片	胴部	⑦外面ヘラナデ
			C4	Ⅰ	1				
N-15	21-1	222	C5	Ⅰ	1	M	漆片	胴部	⑦外面ヘラナデ、横毛目
N-15	21-1	223	I3	Ⅲ	1	M	漆片	胴部	⑦外面横毛目
N-15	21-1	224	D2	Ⅲ	1				土玉
N-15	21-1	225	L-9	Ⅰ	1				土製品
N-15	21-1	226	N5	Ⅲ	1				土製品
N-15	21-1	227	L8	Ⅲ	1				⑨LRL・キザミ

①縄文(外面) ②縄文(内面) ③口唇④内面⑤沈澱・縄線⑥爪形・刺突・キザミ⑦隆帯・貼付かさね接合面⑧底部形態⑨その他
種:棒状工具、平竹・半截竹管状工具、ヘラ・ヘラ状工具、中空・中空工具、さき・先端部がさくえられた工具、角・先端部角形の工具、爪・爪形文

表IV-3 包含層出土掘載石器一覽

種別	図版	番号	遺物名	調査区	層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
IV-16	21-2	1	石鏃	E6	Ⅱ	2	16	10	4	0.3	黒曜石	MS-X4
IV-16	21-2	2	石鏃	I3	Ⅱ	2	22	14	3	0.4	黒曜石	MS-X9
IV-16	21-2	3	石鏃	C4	I	1	23	13	3	0.5	黒曜石	
IV-16	21-2	4	石鏃	H3	Ⅱ	2	24	12	3	0.6	黒曜石	
IV-16	21-2	5	石鏃	B3	Ⅱ	2	(22)	16	4	0.9	黒曜石	
IV-16	21-2	6	石鏃	F5	Ⅱ	1	33	15	5	1.4	黒曜石	
IV-16	21-2	7	石鏃	B5	Ⅱ	1	38	16	5	1.8	黒曜石	
IV-16	21-2	8	石鏃	F3	Ⅱ	2	40	(17)	4	1.6	黒曜石	MS-X6
IV-16	21-2	9	石鏃	D7	Ⅱ	1	(35)	11	5	1.1	黒曜石	
IV-16	21-2	10	石鏃	D10	Ⅱ	1	34	12	4	0.9	黒曜石	MS-X3
IV-16	21-2	11	石鏃	E5	Ⅱ	2	37	18	6	3.2	黒曜石	
IV-16	21-2	12	石鏃	E3	Ⅱ	5	33	20	4	2.1	黒曜石	
IV-16	21-2	13	石鏃	E5	Ⅱ	1	(37)	20	6	3.0	黒曜石	
IV-16	21-2	14	石鏃	C5	Ⅱ	1	45	23	8	5.7	黒曜石	
IV-16	21-2	15	石鏃	D2	Ⅲ	1	45	26	9	5.9	黒曜石	MS-X2
IV-16	21-2	16	石鏃	G4	Ⅱ	1	47	26	6	5.0	黒曜石	
IV-16	21-2	17	石鏃	G6	Ⅲ	1	50	30	7	8.2	黒曜石	MS-X8
IV-16	21-2	18	石鏃	E3	Ⅱ	3	30	9	4	0.8	黒曜石	
IV-16	21-2	19	石鏃	C4	Ⅱ	2	(46)	16	4	2.3	黒曜石	MS-X1
IV-16	22-1	20	石鏃	F4	Ⅲ	1	19	10	1	0.2	黒曜石	MS-X7
IV-16	22-1	21	石鏃	D4	Ⅲ	5	21	12	3	0.6	黒曜石	
IV-16	22-1	22	石鏃	表採		1	(19)	19	2	0.6	黒曜石	
IV-16	22-1	23	石鏃	F2	Ⅱ	1	25	14	3	0.8	黒曜石	MS-X5
IV-16	22-1	24	石鏃	O4	I	1	22	9	2	0.3	黒曜石	MS-X10
IV-16	22-1	25	石槍	I3	I	3	53	22	7	6.0	黒曜石	
IV-16	22-1	26	石槍	D1	Ⅱ	1	55	24	8	7.1	黒曜石	
IV-16	22-1	27	石槍	M9	Ⅱ	1	57	22	10	8.2	黒曜石	
IV-16	22-1	28	石槍	B5	Ⅱ	2	59	26	7	9.1	黒曜石	
IV-16	22-1	29	石槍	D6	Ⅱ	1	55	22	6	5.7	黒曜石	MS-X13
IV-16	22-1	30	石槍	E7	Ⅱ	1	(58)	22	8	8.5	黒曜石	
IV-16	22-1	31	石槍	F4	Ⅲ	2	58	35	5	7.3	黒曜石	MS-X15
IV-16	22-1	32	石槍	E4	Ⅱ	2	87	30	10	20.6	黒曜石	MS-X14
IV-16	22-1	33	石槍	B6	Ⅱ	1	88	47	10	42.3	片岩	
IV-16	22-1	34	石槍	I5	Ⅱ	1	98	51	13	48.4	黒曜石	MS-X18
IV-17	22-1	35	石槍	I3	Ⅲ	4	(92)	31	7	17.5	黒曜石	MS-X17
IV-17	22-1	36	石槍	H3	Ⅲ	5	(49)	(51)	12	22.2	黒曜石	MS-X16
IV-17	22-1	37	ナイフ	K4	I	2	(42)	39	8	17.1	頁岩	
IV-17	22-1	38	つまみ付きナイフ	F3	Ⅱ	4	(48)	33	9	13.6	頁岩	
IV-17	22-1	39	つまみ付きナイフ	C2	Ⅲ	2	66	22	6	9.5	頁岩	
IV-17	22-1	40	つまみ付きナイフ	F3	Ⅱ	5	89	28	8	19.3	頁岩	
IV-17	22-1	41	スクレイパー	K5	Ⅱ	2	83	31	11	17.1	黒曜石	
IV-17	22-1	42	スクレイパー	E4	Ⅱ	4	(44)	36	5	6.2	黒曜石	
IV-17	22-1	43	石鏃	G6	Ⅱ	6	22	11	6	1.5	メノウ	
IV-17	22-1	44	石鏃	H4	Ⅲ	4	(29)	17	6	2.2	頁岩	
IV-17	22-1	45	石鏃	B4	Ⅱ	2	51	10	8	4.7	頁岩	
IV-17	22-1	46	石鏃	F6	Ⅱ	4	49	10	7	4.5	頁岩	
IV-17	22-1	47	楔形石器	E4	Ⅲ	8	20	14	7	1.5	黒曜石	MS-X20
IV-17	22-1	48	楔形石器	C6	Ⅱ	4	23	19	7	3.1	黒曜石	MS-X19
IV-17	22-1	49	楔形石器	D3	Ⅲ	7	22	21	7	3.7	黒曜石	
IV-17	22-1	50	楔形石器	E6	I	4	31	25	8	6.1	黒曜石	MS-X21
IV-17	22-1	51	楔形石器	F3	Ⅱ	6	26	27	8	7.4	黒曜石	MS-X22
IV-17	22-1	52	楔形石器	C5	Ⅱ	2	22	21	15	5.8	黒曜石	
IV-17	22-1	53	楔形石器	H5	I	1	32	19	13	6.0	黒曜石	
IV-17	22-1	54	楔形石器	C2	Ⅱ	3	32	17	16	7.1	黒曜石	
IV-17	22-1	55	石核	E5	Ⅲ	6	40	24	6	6.0	黒曜石	
IV-17	22-1	56	石核	G4	I	6	36	32	10	12.3	黒曜石	
IV-17	22-1	57	石核	H6	Ⅲ	4	31	34	18	17.5	黒曜石	MS-X28
IV-17	22-1	58	石核	D3	Ⅲ	17	22	22	14	8.3	黒曜石	
IV-17	22-1	59	石核	J4	Ⅱ	5	32	26	20	19.3	黒曜石	MS-X30
IV-17	22-1	60	石核	C4	Ⅱ	9	45	20	25	19.3	黒曜石	MS-X25

棟号	図版	番号	遺物名	調査区	層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
N-18	23-1	61	石核	I7	II	3	30	54	15	130	黒曜石	MS-X29
N-18	23-1	62	石核	G6	II	11	24	32	10	7.3	黒曜石	MS-X27
N-18	23-1	63	石核	H7	III	5	28	19	19	120	黒曜石	
N-18	23-1	64	石核	D3	II	14	29	19	16	17.4	黒曜石	MS-X26
N-18	23-1	65	石核	E7	II	7	27	41	13	16.3	黒曜石	
N-18	23-1	66	石核	C2	II	8	28	39	12	130	黒曜石	
N-18	23-1	67	石核	C2	II	10	29	36	23	30.8	黒曜石	
N-18	23-1	68	石核	H3	II	14	43	42	21	30.7	メノウ	
N-18	23-1	69	石斧	H5	II	5	84	34	12	60.6	緑色泥岩	
N-18	23-1	70	石斧	B6	II	3	(75)	39	10	52.0	片岩	
N-18	23-1	71	石斧	E2	III	10	102	38	16	108.1	不明	
N-18	23-1	72	石斧	H8	II	2	90	36	10	53.5	緑色泥岩	
N-18	23-1	73	石斧	G3	II	4	91	42	11	85.3	片岩	
N-18	23-1	74	石斧	C4	I	10	105	40	13	75.0	緑色泥岩	
N-19	23-1	75	石斧	E7	II	9	102	31	11	46.5	緑色泥岩	
N-19	23-1	76	石斧	J5	II	4	111	37	16	84.6	緑色泥岩	
					III	4						
N-19	23-1	77	石斧	E4	III	15	104	46	13	96.5	緑色泥岩	
N-19	23-1	78	石斧	E8	II	4	(133)	50	22	254.1	片岩	
N-19	23-1	79	石斧	D6	II	2	100	56	38	326.8	砂岩	
N-19	23-1	80	たたき石	H8	II	6	(95)	73	20	219.6	砂岩	
N-19	23-1	81	たたき石	K4	III	7	131	60	27	288.2	砂岩	
N-20	24-1	82	たたき石	D7	I	9	(132)	63	37	420.5	砂岩	
					II	5						
N-20	24-1	83	たたき石	H8	III	7	139	47	33	327.9	砂岩	
N-20	24-1	84	すり石	F6	III	7	57	107	31	266.2	砂岩	
N-20	24-1	85	すり石	D9	II	1	68	(109)	51	579.7	砂岩	
N-20	24-1	86	すり石	G4	I	10	108	130	29	630.3	砂岩	
N-20	24-1	87	台石	G4	III	12	(108)	(92)	38	507.9	砂岩	
N-21	24-1	88	砥石	E2	III	13	(35)	57	(41)	85.7	凝灰岩	
N-21	24-1	89	砥石	F7	II	5	(57)	45	43	134.0	砂岩	
N-21	24-1	90	砥石	H8	II	9	(83)	(66)	22	101.2	砂岩	
N-21	24-1	91	垂飾	G4	III	1	48	22	7	5.7	滑石	
N-21	24-1	92	礫	F5	II	-	81	69	35	120.3	滑石	

表IV-4 包含層出土掲載金属製品一覧

棟号	図版	番号	遺物名	調査区	層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別	備考
N-22	24-1	1	古鏡	C5	II上面	-	24	24	1		銅製品	寛永通宝

V 自然科学的分析等

1 放射性炭素年代測定

南六号川左岸遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

南六号川左岸遺跡は、北海道夕張郡長沼町883-27外(北緯42°57'3"、東経141°42'52")に所在する。測定対象試料は、H-1 HF-1出土木炭 (MS-D1: IAAA-112579)、H-1 HF-2出土木炭 (MS-D2: IAAA-112580)、H-1 HF-4出土木炭 (MS-D3: IAAA-112581)、H-1 HCC-1出土木炭 (MS-D4: IAAA-112582)、F-4 (F3区) 焼土出土木炭 (MS-D5: IAAA-112583) の合計5点である(表V-1)。

H-1は堅穴住居跡で、焼土HF-2、HF-4、HCC-1は床面、焼土HF-1は床面上位10cmの覆土中に形成されていた。伴出遺物より縄文時代中期後半と推定される。焼土F-4は遺物包含層のⅡ層中に形成されていた。伴出遺物より縄文時代後期前葉から晩期前葉と推定されている。5点の試料はすべて調査現場にて土ごと採取され、フローテーションにより回収された。

2 測定の意義

H-1、F-4の形成時期を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表V-1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表V-1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表V-1に、補正していない値を参考値として表V-2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表V-1に、補正していない値を参考値として表V-2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表V-2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、H-1 HF-1のMS-D1が $3960 \pm 30\text{yrBP}$ 、H-1 HF-2のMS-D2が $3970 \pm 30\text{yrBP}$ 、H-1 HF-4のMS-D3が $3980 \pm 30\text{yrBP}$ 、H-1 HCC-1のMS-D4が $4000 \pm 30\text{yrBP}$ 、F-4(F3区)焼土のMS-D5が $3770 \pm 30\text{yrBP}$ である。H-1の焼土から出土した4点の値は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で重なり、近い年代を示す。暦年較正年代(1σ)は、MS-D1が $2566 \sim 2461\text{cal BC}$ 、MS-D2が $2563 \sim 2466\text{cal BC}$ 、MS-D3が $2565 \sim 2471\text{cal BC}$ 、MS-D4が $2566 \sim 2479\text{cal BC}$ 、MS-D5が $2275 \sim 2141\text{cal BC}$ の間に各々複数の範囲で示される。MS-D1~D4は縄文時代中期末葉から後期初頭頃に相当する年代値で、出土遺物から推定される時期におおむね近い結果となっている。MS-D5の値は後期前葉頃に相当し、遺物から推定される時期と矛盾しない。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表V-1 放射性炭素年代測定結果 (1)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112579	MS-D1	H-1 HF-1	木炭	AAA	-28.75 ± 0.74	3960 ± 30	61.07 ± 0.23
IAAA-112580	MS-D2	H-1 HF-2	木炭	AAA	-21.41 ± 0.49	3970 ± 30	61.01 ± 0.22
IAAA-112581	MS-D3	H-1 HF-4	木炭	AAA	-31.84 ± 0.54	3980 ± 30	60.89 ± 0.23
IAAA-112582	MS-D4	H-1 HCC-1	木炭	AAA	-22.33 ± 0.87	4000 ± 30	60.77 ± 0.22
IAAA-112583	MS-D5	F-4 (F3) 焼土	木炭	AAA	-26.83 ± 0.49	3770 ± 30	62.51 ± 0.21

[#4887]

表V-2 放射性炭素年代測定結果 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112579	4020 ± 30	60.60 ± 0.21	3962 ± 30	2566calBC-2526calBC (29.3%) 2572calBC-2512calBC (38.9%)	2572calBC-2512calBC (36.7%) 2505calBC-2432calBC (47.0%) 2424calBC-2401calBC (4.9%) 2381calBC-2348calBC (6.8%)
IAAA-112580	3910 ± 30	61.46 ± 0.21	3969 ± 28	2563calBC-2534calBC (31.1%) 2493calBC-2466calBC (37.1%)	2574calBC-2454calBC (91.1%) 2419calBC-2407calBC (1.7%) 2376calBC-2351calBC (2.7%)
IAAA-112581	4100 ± 30	60.04 ± 0.22	3984 ± 30	2565calBC-2525calBC (39.4%) 2496calBC-2471calBC (28.8%)	2577calBC-2462calBC (95.4%)
IAAA-112582	3960 ± 30	61.10 ± 0.19	4001 ± 28	2566calBC-2523calBC (48.7%) 2497calBC-2479calBC (19.5%)	2575calBC-2470calBC (95.4%)
IAAA-112583	3800 ± 30	62.28 ± 0.20	3773 ± 27	2275calBC-2255calBC (14.5%) 2208calBC-2190calBC (15.8%) 2181calBC-2141calBC (37.8%)	2289calBC-2134calBC (92.7%) 2079calBC-2061calBC (2.7%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

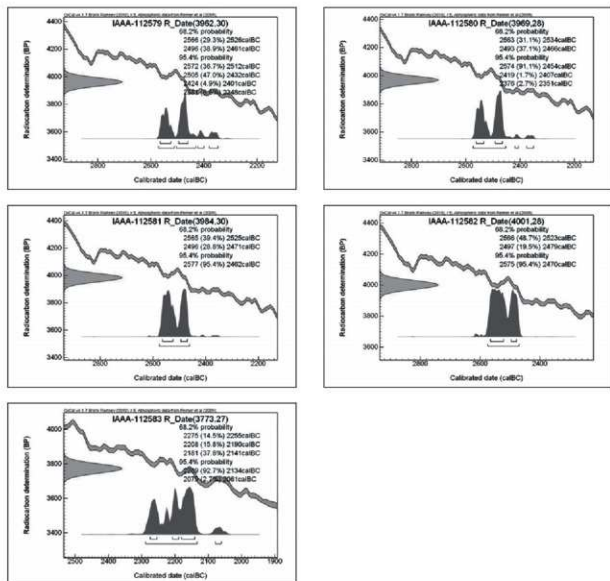


図 V-1 暦年較正年代グラフ

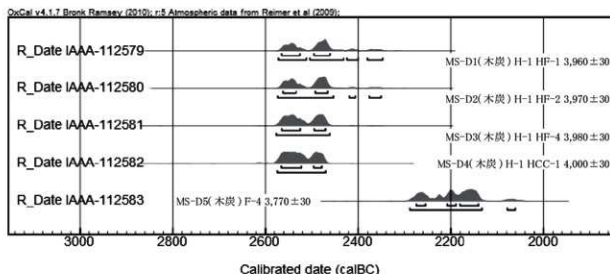


図 V-2 較正年代一覧

2 南六号川左岸遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

夕張郡長沼町に所在する南六号川左岸遺跡は、南六号川左岸の段丘上に立地する。ここでは、本遺跡より出土した縄文時代中期の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、南六号川左岸遺跡より出土した黒曜石製石器30点である(表V-3)。

試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジを用いて、測定面表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 2) $Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 3) $Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$
- 4) $\log(Fe\text{強度} / K\text{強度})$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 $\times 100 / Fe\text{強度}$ の判別図と

表V-3 分析対象

分析No.	器種	発掘区	遺構	層位	遺物番号	重量(g)	備考
MS-X1	石鏃	C4		II	2	2.3	
MS-X2	石鏃	D2		II	1	5.9	
MS-X3	石鏃	D10		II	1	0.9	
MS-X4	石鏃	E6		II	2	0.3	
MS-X5	石鏃	F2		II	1	0.8	
MS-X6	石鏃	F3		II	2	1.6	
MS-X7	石鏃	F4		III	1	0.2	
MS-X8	石鏃	G6		III	1	8.2	
MS-X9	石鏃	I3		II	2	0.4	
MS-X10	石鏃	O4		I	1	0.3	
MS-X11	石槍		H-1	床面	6	165	
MS-X12	石槍		H-1	床面	14	5.2	
MS-X13	石槍	D6		II	1	5.7	
MS-X14	石槍	E4		II	2	20.6	
MS-X15	石槍	F4		III	2	7.3	
MS-X16	石槍	H3		III	5	22.2	
MS-X17	石槍	I3		III	4	17.5	
MS-X18	石槍	I5		II	1	48.4	
MS-X19	楔形石器	C6		II	4	3.1	
MS-X20	楔形石器	E4		III	8	1.5	
MS-X21	楔形石器	E6		I	4	6.1	
MS-X22	楔形石器	F3		II	6	7.4	
MS-X23	楔形石器		P-7-PFC-1	B層	1	1.7	
MS-X24	楔形石器		P-7-PFC-1	B層	2	1.5	
MS-X25	石核	C4		II	9	19.3	
MS-X26	石核	D3		II	14	17.4	
MS-X27	石核	G6		II	11	7.3	
MS-X28	石核	H6		III	4	17.5	
MS-X29	石核	I7		II	3	13.0	
MS-X30	石核	J4		II	5	19.3	

横軸Sr分率-縦軸log (Fe強度/K強度)の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。この方法は、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊である出土遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響をまぬかれなるといわれる(望月, 1999)。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、log (Fe強度/K強度)の値が減少する。また、風化試料の場合でも、log (Fe強度/K強度)の値が減少する(同上)。そのため、試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選び、測定した。測定結果が判別群からかけ離れた値を示した場合は、測定面を変更するか、あるいはメラミンフォーム製スポンジで再度表面の洗浄を行った後、何回か再測定を行って検証した。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表V-4に判別群一覧とそれぞれの原石採取地点および点数を、図V-3に各原石の分布図を示す。

3. 分析結果および考察

図V-4および図V-5に黒曜石原石の判別図に遺物をプロットした図を示す。各図は視覚的にわかりやすくなるため、各判別群を楕円で取り囲んである。試料30点のうち、2点が白滝1群、1点が白滝2群、18点が赤井川群、5点が上土幌群、3点が所山群、1点が秩父

表V-4 北海道・東北地方黒曜石産地の判別群

郡道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢路頭(15)、7の沢川支流(2)、IK路頭(10)、十勝石沢路頭直下河床(11)、アジサイの滝路頭(10)
		白滝2	赤石山山頂、八号沢路頭、八号沢、黒曜の沢、幌加林道(36)
	赤井川	曲川-土木川(24)	
	上土幌	上土幌	十勝三股(4) タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	笠文台(8)、雨前台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(66)
		秩父別2	
		秩父別3	
	滝軽	滝軽	社名湖川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)
		留辺蘂2	
	網路	網路	網路市営スキー場(9)、阿栗川右岸(2)、阿栗川左岸(6)
木造	出来島	出来島海岸(15)	
	深浦	八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
	男鹿	塩本	塩本海岸(4)
岩手	北上川	北上折戻2	北上川(9)
	羽黒	月山	月山荘前(10)
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸	根岸(40)
	仙台	秩父1	土蔵(18)
		秩父2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	



図V-3 北海道・東北地方黒曜石原石分布図

表V-5 測定値および産地推定結果

分析No	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn ¹⁰⁰ / Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
MS-X1	205.4	107.6	2929.9	534.3	718.1	284.3	834.8	22.53	3.67	30.28	1.15	秩父別3	秩父別
MS-X2	296.1	107.6	1834.1	718.2	335.6	356.8	743.4	33.34	5.87	15.58	0.79	赤井川	赤井川
MS-X3	264.2	94.9	1687.5	603.2	276.4	292.6	603.0	33.98	5.62	15.57	0.81	赤井川	赤井川
MS-X4	190.4	68.2	1213.3	444.2	200.4	215.8	464.1	33.54	5.62	15.13	0.80	赤井川	赤井川
MS-X5	295.6	96.4	1781.1	954.5	108.8	449.3	585.4	45.50	5.41	5.19	0.78	白滝2	白滝
MS-X6	284.6	103.1	1792.5	705.3	330.5	356.5	727.1	33.28	5.75	15.59	0.80	赤井川	赤井川
MS-X7	246.8	70.4	1763.6	631.1	349.9	283.2	722.9	31.76	3.99	17.61	0.85	所山	置戸
MS-X8	205.2	66.1	1376.6	554.3	245.5	300.6	545.1	33.69	4.80	14.92	0.83	上土幌	上土幌
MS-X9	142.8	46.8	1004.8	414.9	175.5	222.4	398.7	34.25	4.66	14.49	0.85	上土幌	上土幌
MS-X10	249.5	93.2	1638.3	625.5	284.5	302.1	621.9	34.11	5.69	15.51	0.82	赤井川	赤井川
MS-X11	317.1	117.8	1956.4	767.3	360.1	383.0	788.0	33.38	6.02	15.67	0.79	赤井川	赤井川
MS-X12	297.3	108.7	1835.7	719.2	336.0	356.2	741.3	33.41	5.92	15.61	0.79	赤井川	赤井川
MS-X13	243.7	79.3	1639.2	639.6	290.4	359.2	644.7	33.76	4.84	14.86	0.83	上土幌	上土幌
MS-X14	240.3	75.1	1676.8	658.4	369.4	317.2	787.3	30.88	4.48	17.32	0.84	所山	置戸
MS-X15	305.1	107.3	1861.9	727.5	347.2	364.8	747.3	33.27	5.76	15.88	0.79	赤井川	赤井川
MS-X16	282.2	85.0	1778.0	716.8	188.5	345.8	583.4	39.07	4.78	10.27	0.80	白滝1	白滝
MS-X17	282.6	88.2	1908.0	765.6	201.2	369.4	600.2	39.54	4.62	10.39	0.83	白滝1	白滝
MS-X18	313.5	113.9	1931.1	745.5	348.0	376.0	787.0	33.04	5.90	15.42	0.79	赤井川	赤井川
MS-X19	311.5	113.2	1913.7	734.4	345.1	368.4	754.2	33.35	5.91	15.67	0.79	赤井川	赤井川
MS-X20	305.2	99.4	2066.5	800.6	340.1	420.5	760.8	34.48	4.81	14.65	0.83	上土幌	上土幌
MS-X21	287.0	101.5	1697.7	679.7	318.8	344.8	724.9	32.86	5.98	15.42	0.77	赤井川	赤井川
MS-X22	300.7	93.9	2097.9	820.0	464.4	391.2	969.5	31.00	4.47	17.56	0.84	所山	置戸
MS-X23	302.5	110.6	1859.6	727.1	344.8	370.3	748.8	33.19	5.95	15.74	0.79	赤井川	赤井川
MS-X24	285.9	101.8	1762.9	642.8	295.7	314.6	662.5	33.56	5.78	15.43	0.79	赤井川	赤井川
MS-X25	271.7	99.5	1813.6	636.3	298.9	318.1	687.6	32.78	5.49	15.40	0.82	赤井川	赤井川
MS-X26	281.2	102.3	1731.4	678.9	317.1	337.7	699.7	33.39	5.91	15.59	0.79	赤井川	赤井川
MS-X27	211.1	69.9	1474.2	602.4	269.8	327.9	594.0	33.58	4.74	15.04	0.84	上土幌	上土幌
MS-X28	292.7	105.1	1793.3	686.1	322.5	349.7	751.0	32.53	5.86	15.29	0.79	赤井川	赤井川
MS-X29	138.3	46.3	848.4	272.7	123.5	129.0	258.9	34.78	5.45	15.75	0.79	赤井川	赤井川
MS-X30	243.0	88.5	1491.1	597.4	282.6	311.9	633.8	32.72	5.94	15.48	0.79	赤井川	赤井川

別3群の範囲にプロットされた。測定値および産地推定結果を表V-5に、器種ごとの産地を表V-6に示す。

なお、MS-X25-30は石核で、一部自然面を残していたが、MS-X27（上土幌群）は円礫であったことから、沢や川原などで採取されたものと考えられる。その他5点（いずれも赤井川群）については、角礫～亜角礫であった。

4. おわりに

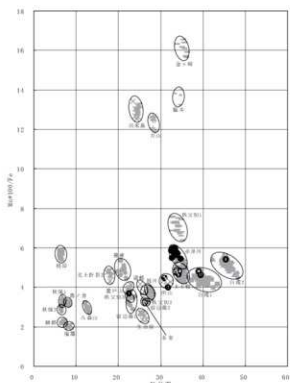
南六号川左岸遺跡出土の黒曜石製石器30点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、3点が白滝エリア、18点が赤井川エリア、5点が上土幌エリア、3点が置戸エリア、1点が秩父別エリア産と推定された。

引用文献

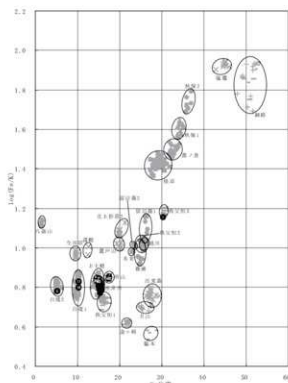
望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 上和田城山遺跡篇一」：172-179。大和市教育委員会。

表V-6 器種ごとの産地

	白滝	赤井川	上土幌	置戸	秩父別	計
石核	1	5	2	1	1	10
石楯	2	4	1	1	—	8
楔形石器	—	4	1	1	—	6
石核	—	5	1	—	—	6
計	3	18	5	3	1	30



図V-4 黒曜石産地推定判別図 (1)



図V-5 黒曜石産地推定判別図 (2)

	赤井川	置戸	秩父別	上士幌	白滝
石鏢	X4, X6, X3, X2, X10	X7 所山	X1 秩父別 3	X9, X8	X5 白滝 2
石槍	X12, X15, X11, X18	X14 所山		X13	X17 白滝 1, X16 白滝 1
楕円形石鏢	X23, X24, X19, X21	X22 所山		X20	
石核	X25, X26, X29, X30	X28 所山		X27	

図V-6 黒曜石産地分析試料一覽

VI まとめ

1 遺構について

遺構は堅穴住居跡1軒（H-1）、土坑9基（P-1~9）、焼土4か所（F-1~4）、土器集中5か所（PC-1~5）、剥片集中7か所（FC-1~7）、集石1か所（S-1）が検出された。

堅穴住居跡は調査区北西部、ハイタウシュナイ川側に位置し、長径5.6m、短径3.7mの隅丸長方形である。床面は比高差の少ないベンチ構造で、長軸に焼土3か所（HF-2~4）、炭化物集中2か所（HCC-1・2）が並ぶ。焼土は床面中央の上位にも1か所（HF-1）確認されている。付属土坑は浅い皿状で、ベンチの段差付近にあり、長軸端部に掘り込まれるものもある。柱穴状小ピットは直径10cm以下のものと10~20cmのものがあり、前者はベンチ構造の内側、後者はベンチ構造の段差からベンチ上に多いが、配列に規則性は見られない。遺物は床面から石楡2点が出土したほか、壁際に黒曜石、片岩・緑色泥岩の小型剥片・砕片を含む剥片集中がそれぞれ2か所（HFC-1・2）、1か所（HFC-3）検出されている。また、HCC-1・2からも小型剥片・砕片が出土しているが黒曜石、片岩・緑色泥岩の偏りは少ない。土器は覆土上部からは余市式が、下部からは北筒式が出土していることから住居跡の時期は縄文時代中期後葉北筒式期で、その埋没過程で余市式が流入したものと思われる。焼土・炭化物集中出土の炭化木片の年代測定結果は3960~4000yrBPで、既知の北筒Ⅱ1~2式期の年代測定値（工藤 2008）と調和的である。

土坑は調査区北側のハイタウシュナイ川側に偏在している。直径2m程の円形で、底面が皿状、覆土が黒色土主体のものが多い。明確に時期を特定できるものは少ないが、覆土や出土遺物などから縄文時代中期から晩期に形成されたものであろう。

焼土は1か所（F-4）が年代測定の結果、縄文時代後期前葉余市式期に形成されたものであった。H-1周辺に位置し、H-1覆土上層での同時期遺物の出土状況から埋没途中の窪みの周辺で焼土が形成されたとみられる。

土器集中は縄文時代晩期前葉が4か所、後期前葉が1か所で、通時的な活動痕跡が残される中で、晩期前葉の土器の遺棄後、それほど大きい活動がなかったことが推定される。

剥片集中は1cm以下の黒曜石剥片がほとんどで、小型原石ないし石核からの剥片剥離や剥片石器からの二次加工によって形成されたものである。

2 遺物について

(1) 土器

縄文時代早期（Ⅰ群）が1点（0.004%）、前期（Ⅱ群）が1点（0.004%）、中期（Ⅲ群）が4,768点（19%）、中期前半期（Ⅲ群a類）が167点（0.7%）、中期後半期（Ⅲ群b類）が71点（0.3%）、後期前葉（Ⅳ群a類）が3,353点（13.7%）、後期中葉（Ⅳ群b類）が3点（0.01%）、後期中葉ウサクマイC式（Ⅳ群b1類）が369点（1.5%）、後期中葉ウサクマイC式または手稲式（Ⅳ群b1・2類）が15点（0.06%）、後期中葉手稲式（Ⅳ群b2類）が103点（0.4%）、後期中葉鯉調式（Ⅳ群b3類）が3点（0.01%）、後期後葉（Ⅳ群c類）が14点（0.06%）、晩期（Ⅴ群）が15,617点（64%）、統縄文時代（Ⅵ群）が1点（0.004%）、擦文文化期（Ⅶ群）が21点（0.09%）出土している。

a 縄文時代晩期前葉の土器群

最も多い時期はⅤ群で、縄文時代晩期前葉（Ⅴ群a類）がほとんどである（図Ⅵ-1上段）。本群に

表VI-1 南六号川左岸遺跡縄文時代晩期前葉土器の特徴

土器型式	上ノ国式・大洞BC式併行			
器種組成	深鉢・鉢・浅鉢・台付浅鉢・皿・壺			
器種	深鉢・鉢	浅鉢・台付浅鉢・皿	壺	
器形	底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は直線的にわずかに外傾ないし直立して立ち上がる。刺突文に口縁部で軽く屈曲してほぼ直立して立ち上がるものあり。鉢がほとんど。	①直線的に斜めに立ち上がるものと②底部から湾曲して口縁部が斜めに立ち上がるものがある。	底部から斜めに立ち上がり、胴上部で内屈して肩部に接続し、屈曲して立ち上がる頸部は緩やかに内傾するものから外反するものまである。	
厚さ	6～8mm程度	6～7mm程度	6～9mm程度	
口縁部形状	平縁で、貼付による突起があるものがある。	突起部を持つものも多く、口縁部の一部が内側に折り込まれるものが多い。突起部は山形・台形状小突起や粘土を付けて肥厚させるものなどがある。突起下部に穿孔のあるものもあり。	口唇部下に1条の沈線が横環するものがある。	
口唇部断面形状	角形主体	角形主体		
口唇端面	棒状工具による斜めの刺突（外面から見て右方向が多い）、棒状工具・ヘラ状工具によるキザミ（斜格子状もあり）、斜行縄文	棒状・ヘラ状工具によるキザミ、斜行縄文。突起部の幅広面にキザミ列2列、沈線と刺突の組合せなどあり。		
口唇部角		突起部内側に棒状工具によるキザミあり。		
底部形状	低い台状多く、底面にも縄文が施文されるものが多い。	低い台状多く、底面にも縄文が施文されるものが多い。円形の透かし孔のある高台がつくものがあり、高台部の縦断面形は中央が張り出す。		
縄文	掲載資料のうち①LR斜行縄文が56%、②RL斜行縄文が24%、③RL縦走縄文が18%、④無文が3%。爪形文・縄文のみに①が、刺突文に③が多い。	掲載資料のうち①LR斜行縄文が56%、②RL斜行縄文が22%、③RL縦走縄文が17%、④RLR斜行縄文が4%。	肩部にRL縦走縄文が施文されるものあり。	
接合面	内傾	内傾		
文様	爪形文	口縁部に1～3列横環する。左から親指で施文されるものが、右から人差し指で施文されるものより多い。また、反対側に人差し指または親指で押さえた爪の痕跡があるものもある。底部付近に1列横環するものあり。		
	刺突文	口縁部に2～4列横環する。棒状工具で右から斜めに押捺されるものも多く、下から斜めに施文されるものもある。	無文地にヘラ状工具による3列の刺突列が横環するもの、口縁部折り込み部に刺突列あるものあり。	
	沈線文	上下横走沈線によって区画された中に、対向連続弧線文が施文される。弧線文が交互に組み合うものもある。底部付近に数条平行沈線の施文されるものあり。	折り込み部に口縁に沿って2列施文されるものあり。高台部に対向連続弧線文が描かれ、その間にヘラ状工具によるキザミが充填されるもの、またはその下に刺突列が横環するものあり。	肩部に平行沈線によって区画された中に連続弧線文が描かれる。平行沈線間には刺突文・ヘラ状工具によるキザミが施文される。
	無文帯の有無	口唇部付近に無文帯があるものが多い。文様はその下部に施文されるものが多い。口縁部無文帯は胴部に比べ薄い傾向がある。	口唇部付近に無文帯があるものが多い。口縁部無文帯は胴部に比べ薄い傾向がある。	
	貼付など		口唇部に貼付によって突起や肥厚帯が付けられる。	肩部に半円状の突起が突くものあり。

したものは爪形文・刺突文・沈線文・縄文・無文がある。爪形文には突瘤を伴うものは無く、口縁部に無文帯があるのが特徴である。器形等の特徴については表VI-1に示す。

当該期に相当する土器群は遺失部では「東三川I式」(野村 1969)、道南部では「上ノ国式」(大場ほか 1961)がある。東三川I式は三叉文などの精製土器、突瘤文・爪形文などの粗製土器が組成されるもので大洞B式に、上ノ国式は爪形文を主体として直線・曲線の沈線で構成されるもので大洞BC-C₂式に併行するものと考えられている。

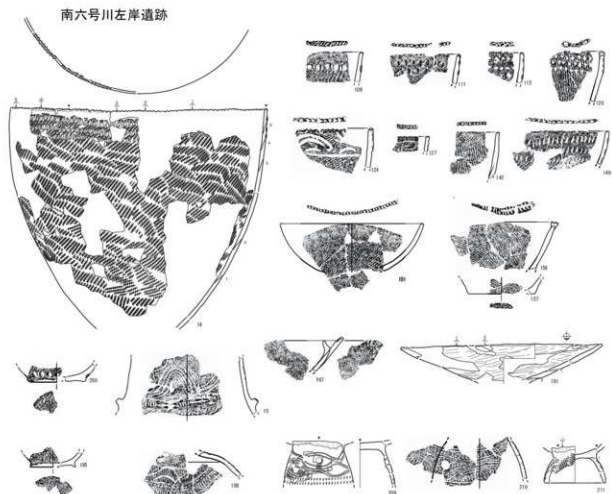
石狩低地帯周辺部では当該期に相当する遺跡は由仁町東三川遺跡(野村 1969)、恵庭市柏木川遺跡(北海道文化財保護協会 1971)・カリノバ3(上屋2003・2004)・ユカンボシE2(松谷 2006)・西島松5(佐藤 2004)、千歳市キウス遺跡(キウス遺物包含地)(大場・石川 1967)・美々4遺跡などがある。これまで土器編年研究はキウス遺跡の資料を用いた大場利夫・波辺兼庸によるキウスI~III式の設定(大場・石川 1967)、東三川遺跡の資料を用いた野村崇による東三川I式の設定(野村 1969)、西島松5遺跡などの資料を用いた佐藤剛による東三川I式の細分案(佐藤 2008)が示されている。また、大沼忠春はキウスI~III式と東三川I式の評価を行い、東三川I式資料が時間幅のあるものが混在していることを述べている(大沼 2010)。近年では西島松5遺跡など一括性の高いまとまった資料が増加し、東三川I式相当の時期(大洞B式併行期)についてはその様相が徐々に明らかになってきている。しかしながら後続する上ノ国式併行期(大洞BC-C₂式併行期)については断片的な資料が多く、なお不明瞭な部分が多い。

前述のとおり本遺跡では爪形文・刺突文・沈線文・縄文・無文があり、特に爪形文には突瘤を伴うものは無く、口縁部に無文帯があるのが特徴である。後期後葉から晩期前葉へ突瘤が減少し、爪形文が増加する傾向があり(佐藤 2004)、東三川I式新段階でも突瘤が残る(佐藤 2008)。また、本遺跡資料のほとんどが器高/口径が1以下の鉢に相当する器形から判断すると本遺跡の土器群は上ノ国式併行期に相当すると思われる。

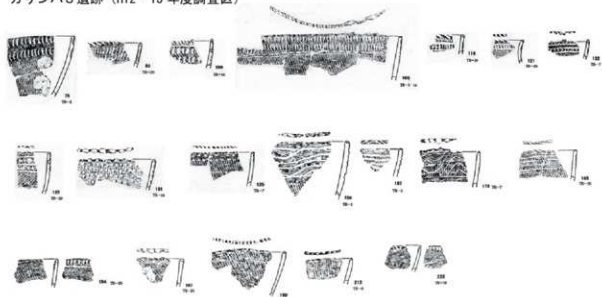
次に、これまで不明瞭な石狩低地帯周辺部の縄文時代晩期前葉後半~中葉前半期の文様の変化を検討するために、周辺地域の東三川I式~上ノ国式併行期のユカンボシE2遺跡(図VI-2、松谷 2006)、上ノ国式併行期と見られるカリノバ3遺跡(H12・13年度調査区包含層)(図VI-1下段、上屋 2003)を対象に文様と地文縄文、口唇部整形(図IV-3)、口縁部無文帯・無文地帯の有無を比較した(表VI-2)。カリノバ3遺跡は突瘤がなく、盛り上がりのない爪形文(ここでは主文様の「キザミ」と表現)が主体であるため南六号川左岸遺跡に後続するものと判断した。これらは全て包含層出土遺物であるため、多少の時間幅を持つと思われるが、総体で時間差が認められると思われるので比較の対象としている。

主文様の比較では、ユカンボシE2遺跡には「突瘤」、「爪形」、「キザミ」、「刺突」、「沈線」、「縄文のみ」があるが、〈平行沈線区画内のヘラ状工具によるキザミ列〉(図VI-1上段188、下段114・121・122、以下、平行沈線区画内ヘラキザミ)のあるものがない。南六号川左岸遺跡には「突瘤」、〈爪形+沈線〉(刺突+沈線)がない。カリノバ3遺跡には「突瘤」、「爪形」がない。時系列的に整理すると、ユカンボシE2段階では〈平行沈線区画内ヘラキザミ〉以外の文様があるが、南六号川左岸段階で「突瘤」がなくなり、〈平行沈線区画内ヘラ状キザミ〉が出現する。カリノバ3段階ではさらに「爪形」(盛り上がり)のあるものがなくなり、〈平行沈線区画内ヘラ状キザミ〉が一定量組成される。

地文縄文はユカンボシE2遺跡ではLR斜行縄文が主体的で、RL斜行縄文が客体的である。カリノバ3遺跡はRL斜行・縦走縄文が主体的で、LR斜行縄文が客体的である。南六号川左岸遺跡はユカンボシE2遺跡に類似するが、主文様が「キザミ」、「刺突」はRL縦走が主体的で、両者の中間的様相を示す。

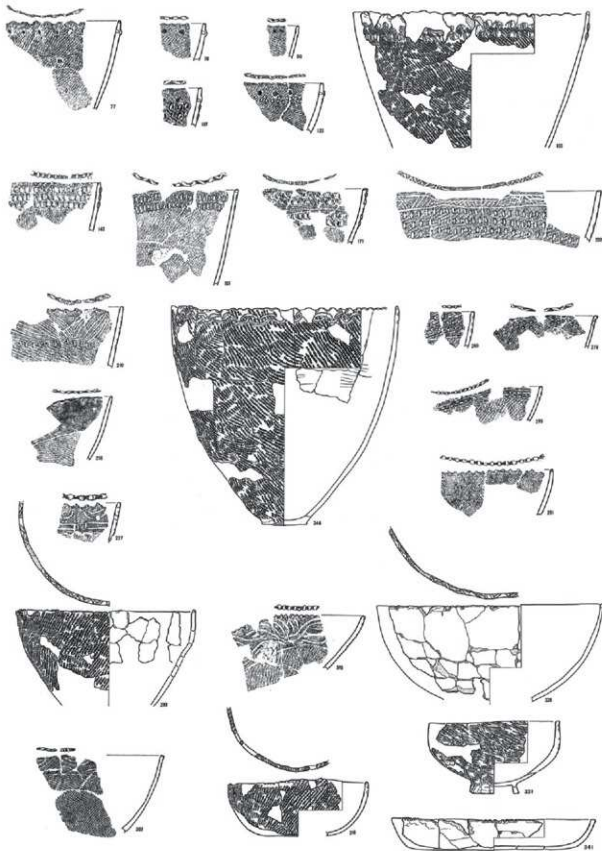


カリンバ3遺跡 (H12・13年度調査区)



図VI-1 縄文時代晩期前半期土器群 (1)

ユカンボシ E2 遺跡



図VI-2 縄文時代晩期前半期土器群 (2)

表VI-3 有意な属性の新旧関係

主文種	縄文				口唇部整形										新文(地) 器の 名称			
	L面斜行	R面斜行	R面縦走	①小波状	②押圧による小波状	棒状工具によるキザミ				棒状工具による新型		へら状工具によるキザミ		棒状工具によるキザミ		新文型	新文地帯	
						③平行	④鋸歯状	⑤交差状	⑥斜行	⑦内外面交互	⑧平行	⑨斜行	⑩外面斜行	⑪内面平行				
突帯のみ	○	△		○	○	○	○											
突帯+爪形	○	△		○	○	○												
爪形	○	△			△	○	○	○	○	○							○	○
刺突	△	○			△	○	○	○	○				○				○	○
キザミ(古)	○	△			△	○	○	○	○								○	○
キザミ(新)	△	○	○	△	○	○	○	○	○						○		○	○
平行沈凹区画内ヘラキザミ		○	○															○
属性の新旧	古	新	新	古	古	新統	新統	新	新	新	新	新	新	新	新	中	新	新

* (キザミ(古))はユカンボシ22図例、(キザミ(新))はカリンバ3図例。

●③は(キザミ(新))と(平行沈凹区画内ヘラキザミ)には付かないが、カリンバ3図例の(沈凹のみ)(縄文のみ)に付うことから新統とした。

①小波状		棒状工具によるキザミ	⑤外面斜行		
②押圧による小波状			⑨内面平行		
棒状工具によるキザミ	③平行	へら状工具によるキザミ	⑩内外面交互		
	④鋸歯状		⑪平行		
	⑤交差状		⑫斜行		
	⑥斜行		棒状工具による刺突	⑬斜行	
	⑦交互斜行			⑭垂直	

図VI-3 口唇部整形

大きくLR斜行縄文からRL斜行・縦走縄文への変化が認められる。

口唇部整形は、古いもの、新しいもの、継続的なものがある。古いものは①小波状と②押圧による小波状である。①小波状はユカンボシE2遺跡の「突瘤」「爪形」に、②押圧による小波状はユカンボシE2遺跡に一般的に見られ、南六号川左岸・カリンバ3遺跡には少量認められる。これらは後期から続く口唇部形状で、最初から小波状に作るものから口縁部を平らに作ったのちにヘラ状工具や棒状工具、指などを使って小波状にするものへと製作技術が変化していると考えられる。その他、垂直刺突はユカンボシE2遺跡のみで古い様相の可能性がある。

新しいものは⑤交差状キザミ⑥斜行キザミ⑧外面斜行キザミ⑨内面平行キザミ⑩平行ヘラキザミ⑪斜行ヘラキザミ⑬斜方刺突である。⑥斜行キザミ⑬斜方刺突は突瘤のない爪形以降、⑩平行ヘラキザミ⑪斜方ヘラキザミは「キザミ」以降である。また、⑧外面斜行キザミはカリンバ3遺跡のみで、浜中大曲式・美々3式でも見られ、後続する時期に連続するものとみられる。その他、⑦交互斜行キザミは⑥斜行キザミの変形と見られ、⑨内面平行キザミは無文の浅鉢に多く、ユカンボシE2遺跡にはないため、新相とみられる。

継続的なものは③平行キザミで、④鋸歯状キザミは南六号川左岸遺跡には見られないが⑤交差状キザミがそれに類するものとみられ、これらは通時的な様相を示すものと見られる。

無文帯・無文地帯は「突瘤」では見られず、「爪形」以降、南六号川左岸遺跡段階で認められ、カリンバ3遺跡段階では「無文帯」がなくなり、「無文地帯」のみとなる。

以上をまとめたものが表Ⅵ-3である。東三川Ⅰ式段階（ユカンボシE2の主体となる突瘤を含む段階）では地文縄文はLR斜行縄文が主体的で、口唇部は①小波状②押圧による小波状が残り、棒状工具によるキザミの③平行④鋸歯状が施文される。上ノ国式前半段階（南六号川左岸段階）では地文縄文は前段階と変わらずLR斜行縄文主体で、口唇部は②押圧による小波状が残り、棒状工具によるキザミの③平行④鋸歯状が継続し、新たに⑤交差状⑥斜行、棒状工具による⑬斜方刺突が加わる。無文帯・無文地帯は東三川Ⅰ式後半段階から本時期まで継続する。上ノ国式後半段階（カリンバ3段階）では盛り上がりのある爪形文がなくなり、キザミ列が主文様となる。口唇部は②押圧による小波状、棒状工具によるキザミの③平行④鋸歯状⑤交差状⑥斜行、棒状工具による⑬斜方刺突が継続し、ヘラ状工具によるキザミの⑩平行⑪斜行が増加し、特徴的に棒状工具によるキザミの⑧外面斜行が追加する。

カリンバ3遺跡で見られる〈平行沈線区画内ヘラキザミ〉が大洞C式に相当する文様要素と考えられることから、東三川Ⅰ式段階（ユカンボシE2の突瘤を含む段階）は大洞B式併行期、上ノ国式前半段階（南六号川左岸段階）は大洞BC式併行期、上ノ国式後半段階（カリンバ3段階）は大洞C式併行期に概ね相当すると考えられる。

b 縄文時代晩期前葉以外の土器群

V群の次に多いのはⅢ群で、前半期萩ヶ岡2式、後半期北筒式が含まれる。次はⅣ群であるが余市式がほとんどで、ウサクマイC式・手稲式が一部出土する。手稲式は口縁部文様帯下部の無文帯下位に段があり、ウサクマイC式と器形が類似し、また、口唇部無文帯が無いが、有っても狭いことから上屋（1996）の一・二群に相当する初期の段階のものである。以上のⅢ群a・b類、Ⅳ群a・b1・b2類、V群以外は非常に少量の出土である。

(2) 石器

石鏃・石槍・ナイフ・両面調整石器・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・楔形石器・二次加

工ある剥片・石核・石斧・砥石・たたき石・すり石・台石・原石・垂飾が出土した。石材は剥片石器には黒曜石が90%以上利用されている。剥片は黒曜石（88%）と緑色泥岩（4%）・片岩（5%）がほとんどで、遺跡内では黒曜石を利用した剥片剥離・二次加工や緑色泥岩・片岩を利用した石斧の加工が行われたと考えられる。

石鏃は形態からIa～Ie、II、IIIa・b類に分けた。有茎で茎部が棒状のIa類は縄文後期中葉（IV群b類）に、Ib類は縄文晩期前葉（V群a類）に、Id類は縄文中期（III群a類）～後期前葉（IV群a類）に、II類は縄文早期（II群）に相当すると思われる。三角形のIIIa・b類は出土土器との対応関係が不明である。石槍は石鏃Id類同様、縄文中期（III群a類）～後期前葉（IV群a類）に相当し、両者の形態は相似的・連続的である。尖頭部に細縁と平行する線状痕が観察されるもの（図IV-16-26）や多段階表面変化が認められるもの（図IV-16-32）がある。つまみ付きナイフは頁岩製が半数を占める。石錐はメノウ・頁岩が黒曜石より多く、棒状ないし、つまみ部のある棒状のもので、両者とも縄文晩期前葉に相当するものと思われる。楔形石器（47点）・石核（67点）は多数出土し、それらには角礫面が残存するものが多い。角礫の原石サイズは直径5cm前後であったと推定され、相対的に大型のものは作業面数が少なく、小型のものは作業面数が多いこと、石核から楔形石器への変化が認められることから、石核は作業面を転移させながら小型化し、最終的には両極剥離によって剥片が剥離されると推定される。ただし、これらの石核からは大型の剥片は剥離されないことから石鏃などの小型剥片石器の素材のみが供給されたと考えられる。剥片の内容などを考慮すると、遺跡内では搬入された小型原石から小型剥片が剥離され、石鏃などの小型石器の素材として利用され、搬入されたツールなどに二次加工が行われたものと思われる。

黒曜石産地分析の結果、縄文中期～後期前葉の石鏃・石槍は赤井川産が多く、時期不明であるが大型の石槍は白滝・置戸産、縄文晩期とみられる石鏃は赤井川産で、縄文後期中葉とみられる石鏃は赤井川産・上土幌産であった。楔形石器・石核はほとんどが赤井川産で、置戸産・上土幌産が少量確認された。

石斧は緑色泥岩や片岩製が主体で、長さ10cm前後のものも多く、素材の大きさにより研磨の度合いが異なるが、全面的に研磨されるものが多い。たたき石は扁平な転礫や、やや厚みのある転礫素材で表裏とも2か所窪みが残り、手で保持して上下両面持ち替えながら利用されたと思われる。すり石は断面三角形の薄い縁辺を擦り面として利用したものと平面形が北海道式石冠に類似するものがある。砥石は角柱状で、複数の擦り面がある。石製品は、滑石製で断面四角形の三日月状の垂飾がある。

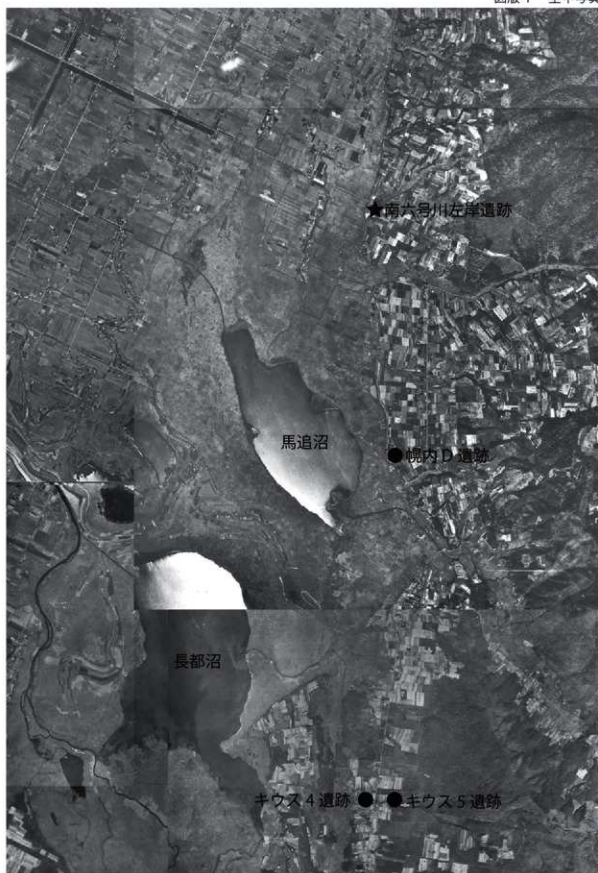
（鈴木）

引用・参考文献

- 上屋真一 1996 「第三章 成果と課題」『ユカンボシE9遺跡B地区』pp.49-59
- 上屋真一編 2003 「カリノバ3遺跡(2)」恵庭市教育委員会
- 上屋真一編 2004 「カリノバ3遺跡(3)」恵庭市教育委員会
- 大沼忠春 2010 「第1章 第2節 第2項 6.縄文文化の終末」『新千歳市史通史編 上巻』pp.217-226
- 大場利夫・石川 徹 1967 「千歳遺跡」千歳市教育委員会
- 大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸 1961 「上ノ国遺跡-檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書-」上ノ国村教育委員会
- 工藤研治 2008 「北筒式土器」『総覧 縄文土器』pp.522-529
- 小崎 尚・小野有五・野上道男・平川一臣編 2003 「日本の地形2 北海道」
- 佐藤 剛 2004 「X 考察」『恵庭市西島松5遺跡(3)』北理調報209 pp.483-506
- 佐藤 剛 2008 「東三川I式・上ノ国式土器」『総覧 縄文土器』pp.694-699
- 佐藤 剛編 2004 「恵庭市西島松5遺跡(3)』北理調報209 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 芝田直人 2000 「I章4(5) 長沼町幌内神社の周堤墓について」『千歳市キウス4遺跡(5)』北理調報144 pp.11-17
- 関根達人 2007 「大洞系・類大洞系・非大洞系土器の検証」『考古学談義』pp.287-312
- 関根達人 2012 「北海道晩期土器編年の再構築」『北海道考古学』48pp.33-52
- 西田茂・羽坂俊一・小林幸雄 1996 「北海道馬追丘陵キウス7遺跡で見つかった断層」『地質ニュース』1996年2月号
- 長沼町史編纂委員会 1977 「長沼町九十年史」
- 野村 崇 1962 「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史下巻』pp.13-89
- 野村 崇 1969 「由仁町東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』pp.27-58
- 野村 崇 1977a 「長沼町の先史時代」『長沼町九十年史』pp.91-154
- 野村 崇 1977b 「長沼町幌内タネネトウ遺跡の発掘調査」
- 野村 崇編 1984 「長沼町12区B遺跡の発掘調査」
- 野村 崇・宇田川洋 1967 「長沼町幌内堂林遺跡調査報告」長沼町の文化財2
- 廣瀬 亘・大津 直・岡 孝雄 2000 「6 北海道馬追丘陵西翼、千歳市キウス4遺跡の地割れについて」『千歳市キウス4遺跡(5)』北理調報144 pp.305-314
- 福田正宏 2003 「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」『海と考古学 第5号』pp.19-52
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 「長沼町 幌内D遺跡」『調査年報24』pp.10-11
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2013 「長沼町 幌内D遺跡」『調査年報25』pp.6-11
- 松谷純一 2006 「ユカンボシE2遺跡」恵庭市教育委員会

写 真 图 版

図版 1 空中写真



1 南六号川左岸遺跡 (1947年9月米軍撮影)

図版2 遺跡遠景・近景



1 遺跡遠景（北西から）



2 遺跡近景（北から）



1 I層除去状況（南東から）



2 調査状況（北西から）

図版 4 土層



1 C~E6区北壁断面 (南西から)



2 I4区西壁断面 (東から)



3 風倒木痕内樽前a軽石分布状況 (K8区、西から)

図版 5 竪穴住居跡 (1)



1 H-1 完掘 (南東から)



2 H-1 断面 (南から)



3 H-1 断面 (東から)

図版 6 竪穴住居跡 (2)



1 H-1 遺物出土状況 (東から)



2 H-1 石斧出土状況 (西から)



3 H-1 HF-1 検出状況 (西から)



4 H-1 HF-1 断面 (西から)



5 H-1 HF-3 断面 (東から)



6 H-1 HF-4 断面 (南から)



7 H-1 HCC-2 断面 (南から)



8 H-1 HFC-1 検出状況 (北から)

図版7 竪穴住居跡(3)・土坑(1)



1 H-1 HP-1 断面(東から)



2 H-1 HP-13 断面(南から)



3 H-1 HP-11 断面(南西から)



4 H-1 HP-14 断面(南から)



5 H-1 HP-12 断面(南東から)



6 H-1 HP-21 断面(北から)



7 H-1 HP-23 断面(東から)



8 H-1 HP-24 断面(南西から)



9 P-1 断面(南から)



10 P-1 完掘(南西から)

図版 8 土坑 (2)



1 P-2 断面 (南から)



2 P-2 完掘 (南東から)



3 P-3 断面 (南から)



4 P-3 完掘 (南から)



5 P-4 断面 (南東から)



6 P-4 完掘 (南から)



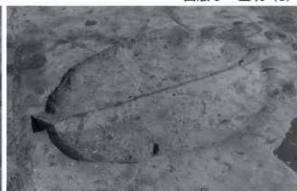
7 P-5 断面 (南から)



8 P-5 完掘 (南西から)



1 P-6 断面(北東から)



2 P-6 完掘(南東から)



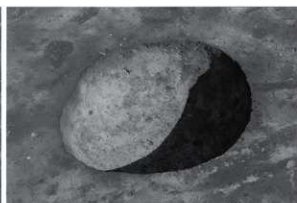
3 P-7 断面・PFC-1(南から)



4 P-7 完掘(南西から)



5 P-8 断面(南から)



6 P-8 完掘(南から)



7 P-9 断面(北から)



8 P-9 完掘(南西から)

図版10 焼土・集石・土器集中 (1)



1 F-1 断面 (西から)



2 F-2 断面 (北東から)



3 F-3 断面 (南から)



4 F-4 断面 (南から)



5 S-1 (南から)



6 PC-2 (北から)

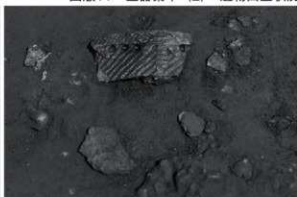


7 PC-3 (北東から)

図版11 土器集中 (2)・遺物出土状況



1 PC-4 (北から)



2 土器出土状況 (D5区、南から)



3 土製品 (L8区、南から)



4 石槍 (I5区、東から)



5 石槍 (I3区、東から)



6 石製品 (G6区、北から)

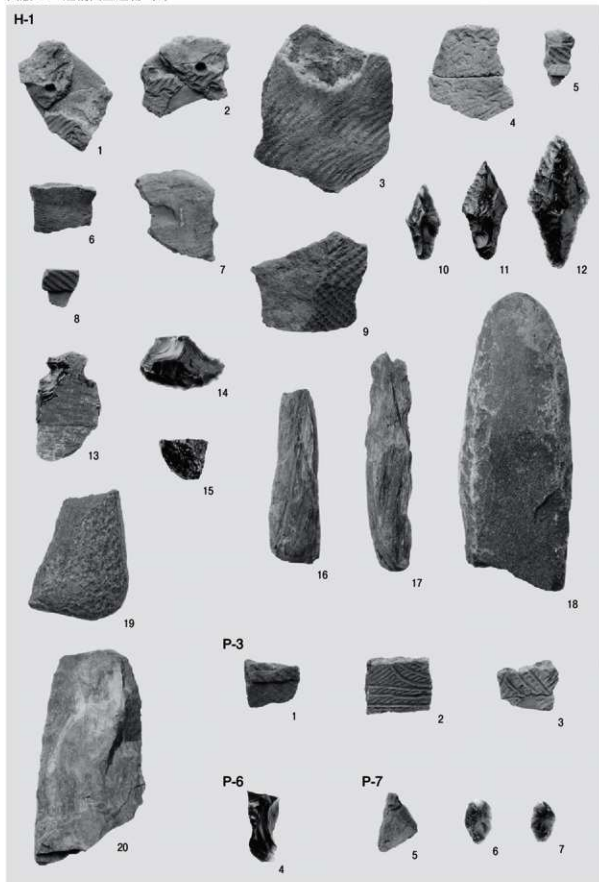


7 砥石 (H6区、東から)

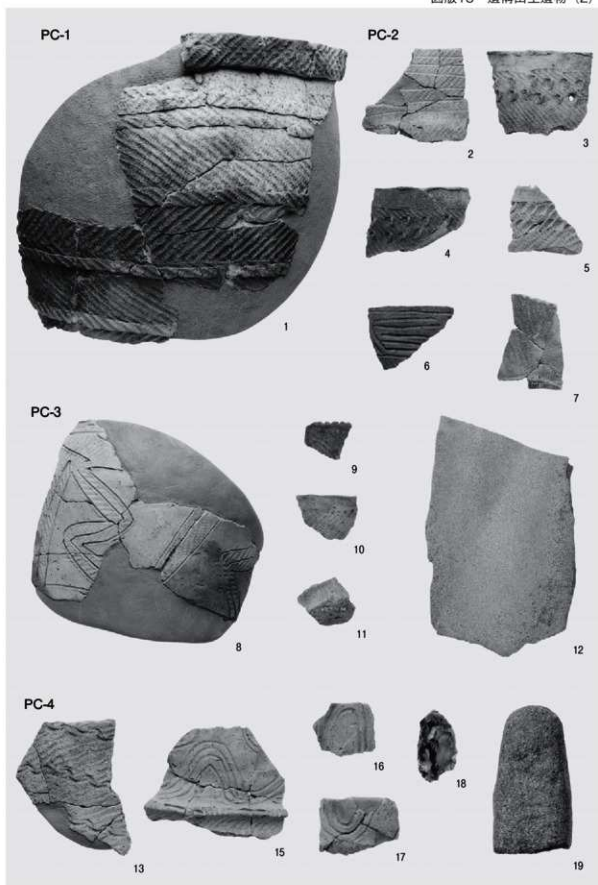


8 寛永通宝 (C5区、北東から)

図版12 遺構出土遺物 (1)



1 H-1、P-3・6・7の遺物

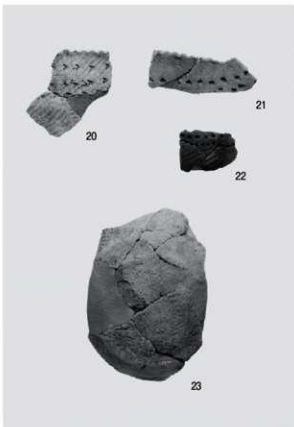


1 PC-1~4の遺物

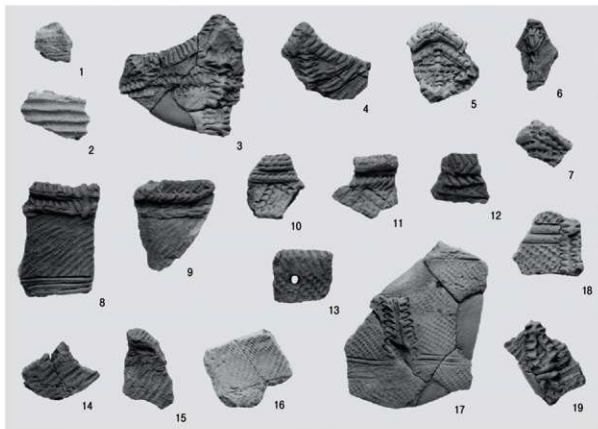
図版14 遺構出土遺物 (3)・包含層出土遺物 (1)



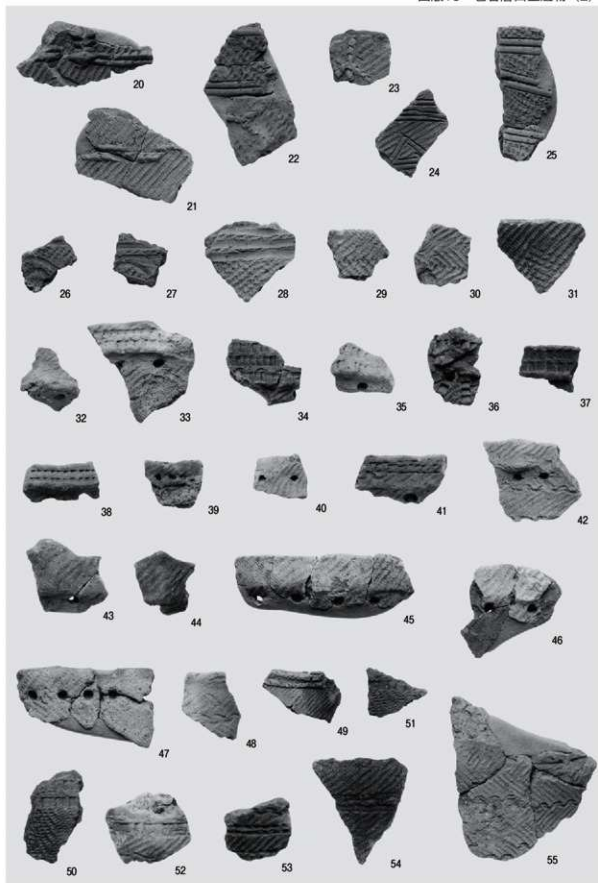
1 PC-4の遺物



2 PC-5の遺物

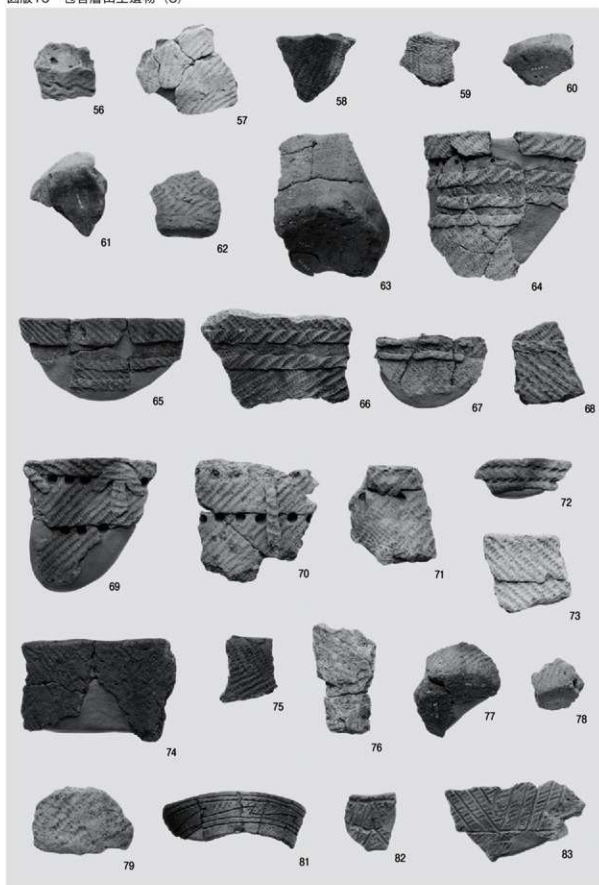


3 包含層出土土器 (掲載番号1~19)



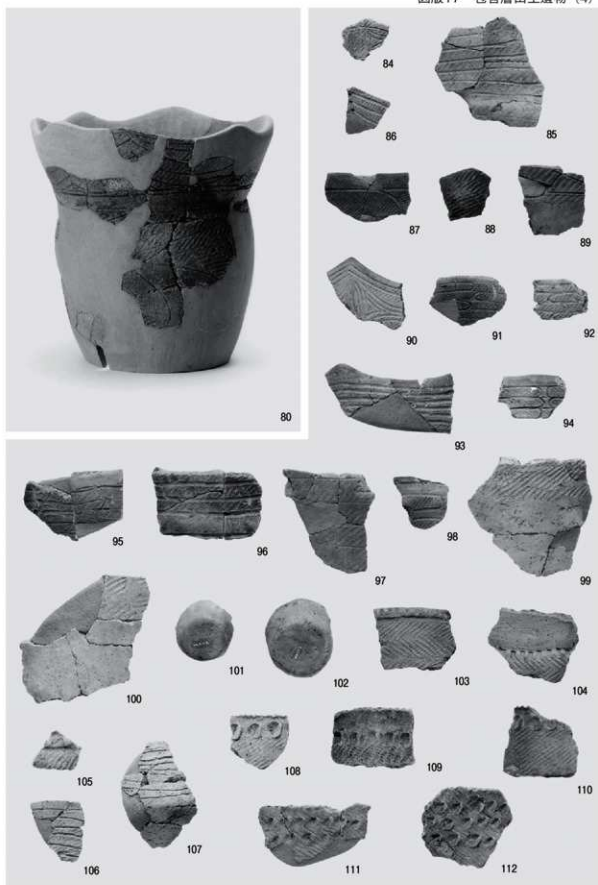
1 包含層出土土器 (掲載番号20~55)

図版16 包含層出土遺物 (3)



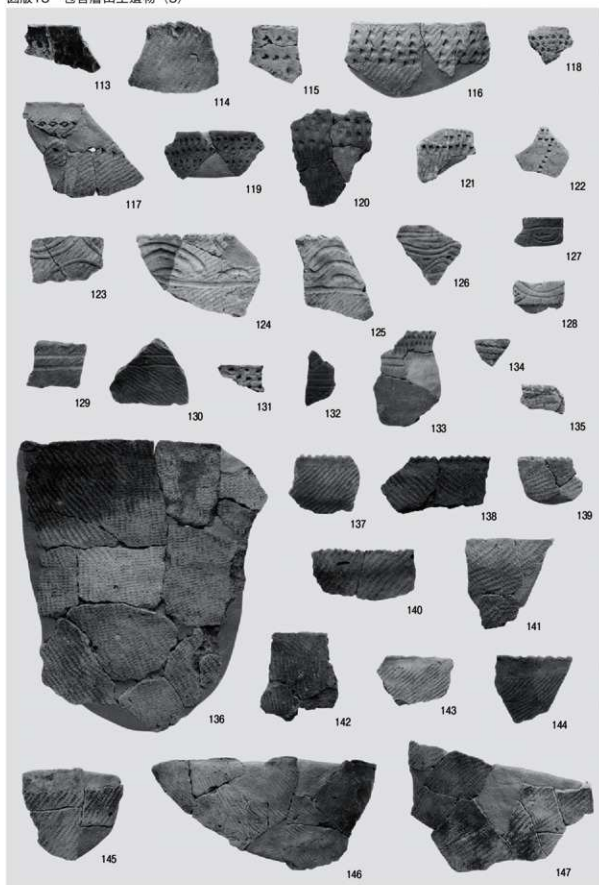
1 包含層出土土器 (掲載番号56~79・81~83)

図版17 包含層出土遺物 (4)

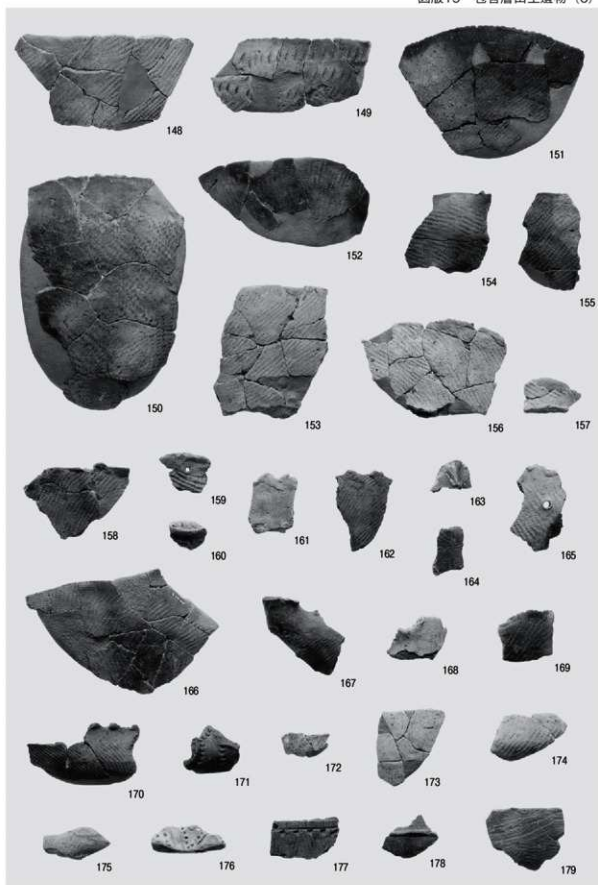


1 包含層出土土器 (掲載番号80・84~112)

図版18 包含層出土遺物 (5)

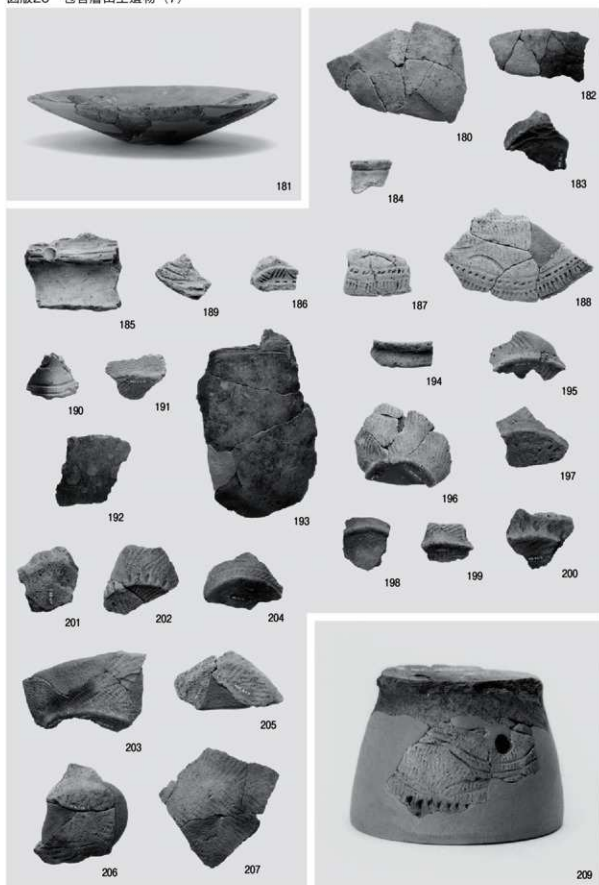


1 包含層出土土器 (掲載番号113~147)



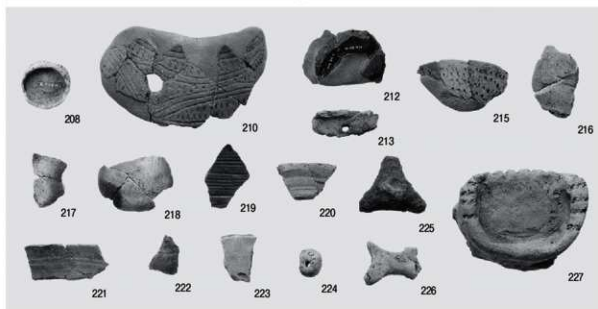
1 包含層出土土器 (掲載番号148~179)

図版20 包含層出土遺物 (7)

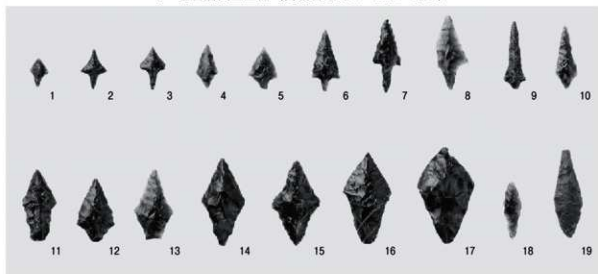


1 包含層出土土器 (掲載番号180~207・209)

図版21 包含層出土遺物 (8)

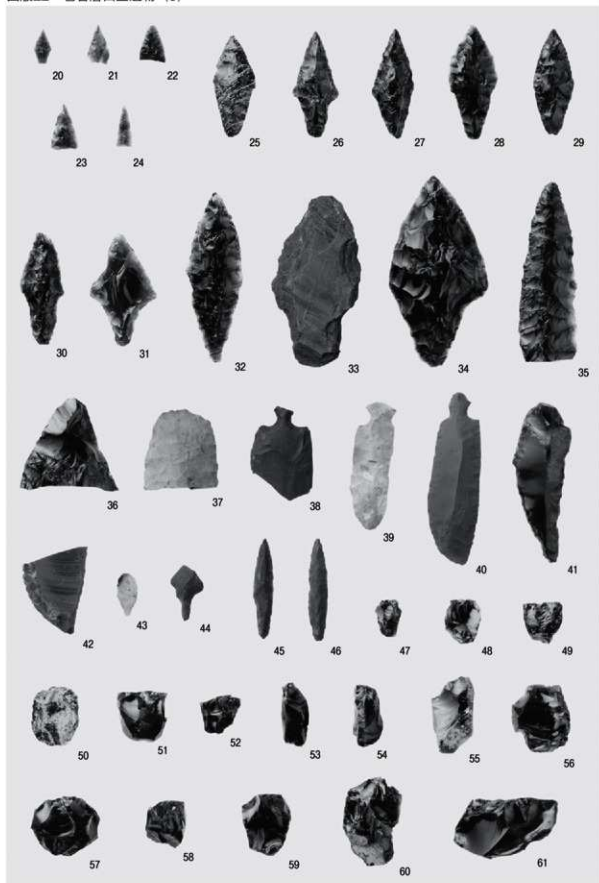


1 包含層出土土器 (掲載番号208・210~227)

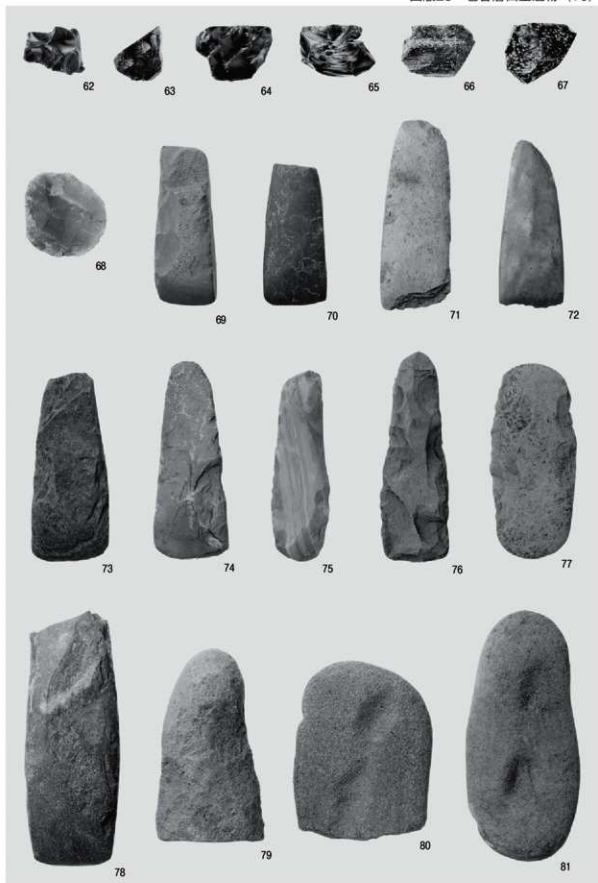


2 包含層出土石器 (掲載番号1~19)

図版22 包含層出土遺物 (9)

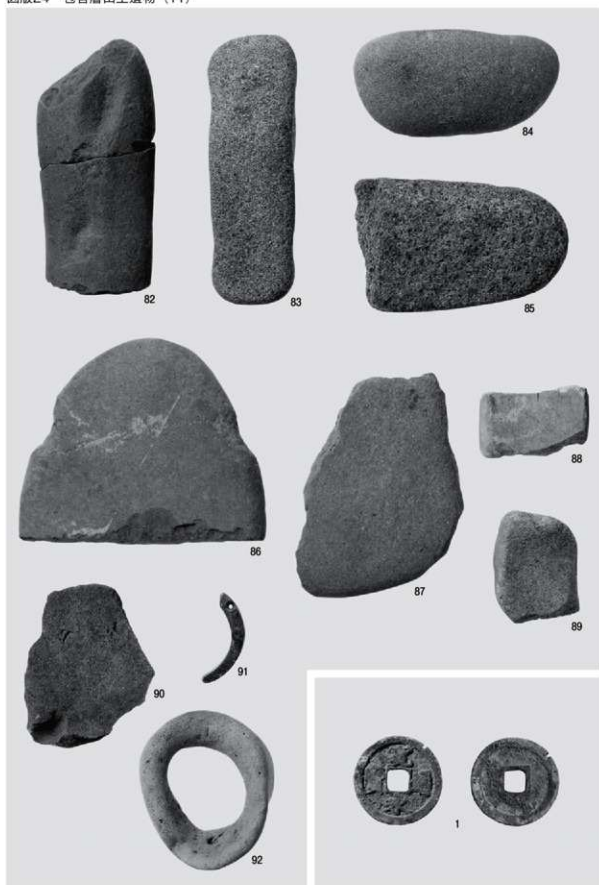


1 包含層出土石器 (掲載番号20~61)



1 包含層出土石器 (掲載番号62~81)

図版24 包含層出土遺物 (11)



1 包含層出土石器 (掲載番号82~92)・金属製品 (掲載番号1)

報告書抄録

ふりがな	ながぬまちょう みなみろくごうがわさがんいせき							
書名	長沼町 南六号川左岸遺跡							
副書名	道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第298集							
編著者名	鈴木宏行・末光正卓							
編集機関	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685番地 1							
発行年月日	平成25(西暦2013)年2月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南六号川左岸遺跡	北海道夕張郡長沼町883-27 ほか	01428	E-17-58	42° 57' 03"	141° 42' 52"	20110801～ 20111111	2,300㎡	道路建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南六号川左岸遺跡	遺物包含地	縄文時代中期前半	竪穴住居跡	土器 縄文時代中期前半(萩ヶ岡2式)、中期後半(北筒式)、後期前葉(余市式)、後期中葉(ウサクマイC式・手稲式)、晩期前葉ほか 石器 石鏃・石槍・両面調整石器・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・楔形石器・石核・石斧・たたき石・垂飾など		縄文時代晩期前葉の土器群が出土		
		縄文時代中期後半						
		縄文時代後期前葉						
		縄文時代晩期前葉						
要約	<p>南六号川左岸遺跡は石狩低地帯の東縁部に位置し、馬追丘陵から流下し低地帯に流れ込む小 河川の左岸低位段丘上に立地する。縄文時代中期後葉の住居跡1軒のほか、土坑9基、焼土4 か所、土器集中5か所、剥片集中7か所、集石1か所が検出された。</p> <p>遺物は土器等が24,582点、石器等が19,835点、その他が201点出土し、土器は縄文時代前葉が 64%、縄文時代中期(前半期萩ヶ岡2式や後半期北筒式合わせて)が20%、縄文時代後期前葉 余市式が14%である。石器は石鏃・石槍・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・楔形石器・ 石核・石斧・たたき石・垂飾などが出土し、剥片石器の91%が黒曜石製で、剥片の88%が黒曜石、 9%が片岩・緑色泥岩である。黒曜石の剥片剥離・加工、石斧の加工が行われている。</p>							

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第298集

ながのまちょう みなみろくごうがわ き がん
長沼町 南六号川左岸遺跡

— 道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財調査報告書 —

発行 平成25年2月28日
編集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] http://www.domaibun.or.jp
印刷 株式会社 中央出版社
〒064-0826 札幌市中央区北6条西28丁目3番16号
TEL (011) 631-9339 FAX (011) 631-9343